

第九章 成都

さほど大きくもない望みであるのだから叶えられてよさそうだった。

世慣れた風に振る舞うのは昔から不得手でない。成都にきてからの日々は順調と見られているのだろう。そのように意識される己の外見に、内心はそぐわない。外見に内心を合致させられれば楽になる。そうまで成り下がった己に追想されるのを春琴は拒むに違いない。しかし、現実は無恥心がないのとどこが異なるのか。

天復二（九〇二）年八月。暗く沈んだ成都を出て、百花潭のあたりに舟を浮かべる。

日が射して川面を金色に輝かせ、日が翳って水を青黒く深くさせる。その繰り返しを、大きな笠の下に顔を沈め眺めている。隣に綜がいる。小舟の上

は、釣り糸を垂れるこの二人である。

西方より成都へと流れ込む川は、ゆるやかに湾曲しつつ幅を広げ、ここで三日月形の中洲を生み、風光にさらなる興趣を添える。なだらかに盛り上がる州の中央に蓼の花が乱れ、水際に鷺が背を低くして魚を狙う。甲羅干しをしていた亀がそつと流れへと乗り出す。

竿を手にしているものの、魚を獲ろうとの意志はなく、一尾も釣れていない。笠の縁をつまみ、空を見上げる。縞状に雲が列を成し、ただでも変わりやすい成都の天候、夕方はまた雨なのか。短いこの好日を意図して楽しもうとしても、じきに終わらねばならない。

「たまには悪くはないか」

心の内といささか異なることを口にする。

閑雅に費やしてよいだけの時間はない。成都にきた目的は果せていない。まだ為し得てはいなくとも、この先の可能性はなおあると思いたい。止まったり迷ったりしてはられない。だが、迷いはあり、為すべきを置き去りに

して悠然と釣りを楽しむかのような己がここにいる。

「たまにはではなく、毎日でもよろしいのではありませんか」

釣り糸の先から目を離さずに縋が言う。

「毎日とはいくまい。そうだろう。今日だって、ほら、もうすぐ雨だ」

「雨もまた好いではありませんか。一年毎日となれば、好天もあれば、焼け
る烈日もあり、はたまた凍える氷雨もあり、それら全てが好いですからな」

「釣三昧のそなたのようにはいかぬ」

「忙しいからですか」

「図らずも今日はこの閑を得た。心の底より楽しめる好日ではないにしても、
稀なことだ」

「十分にお楽しみになればよいではありませんか。簡単でしょう」

「そうはいかぬ」

「何の難しいことがありませんか」

「そなたにはできても私にはできぬ」

「なぜですか。退隠されても十分な年齢でありますのに」

綜は少しばかり語気を強める。

成都にきて間もなく一年半、二度目の秋だ。同じ季節が巡りくれば過去を振り返るようにもなる。

これまでの日々が順調ではなかったと誰が言おうか。他所からきた人間にこれ以上のことがあり得たと思ひ描く方がどうかしていよう。全てが思い通りに運ぶとまでは期待していなかった。大きな望みがあつた訳ではないのだから大きな失望もなかった。一年半は短くはないが長くもない。これからだと思いたい。この先があるとの確信はない。とりわけ、成都を暗く沈ませた事件が心の陰りを深くさせる。

六十七歳は、綜が言う通り退隠するに十分な年齢だ。身にも心にも明らかに老いが迫りきている。老齢を理由にすれば退隠は許されよう。そのような年齢であるからこそ、迷ったり閑雅にうつつを抜かしたりする暇はない。

綜の間に答えぬまま、舟の上の二人は沈黙に戻る。

釣り糸の先はぴくりとも動かない。心に去来する全てを払い除け、糸が水面に刺さっているその一点へと気持を集中させたい。魚が釣り上がってくる瞬間まで、時が流れる他は何もない状態の内になりたい。

綜の今朝の誘いは有難かった。弛みなく進む日常と異なるところに己を移したかった。それは取りも直さず、迷いがあり、閑雅を欲しているからなのだろう。綜が言う退隱が魅惑的に響く。立派な地位に平然と収まっているより、退いた方がまだしも廉恥心があると言えようか。

四日前の夜、王宗滌（おう そうじよ）が不条理な死に方をした。翌日にその死が知れると、町の人も軍營の兵も往來に出て哭した。王宗滌は王建の仮子の一人、民衆の間での人気は群を抜いていた。王建自身を除けば、この人のためになら命を惜しまぬ第一の男だった。最も勇敢で、最も情が厚く、最も慕われていた。成都の入り口に朱に輝く壮麗な門が築かれ、王建が画紅楼と名づけたとき、「画紅」とは王宗滌の元の姓名の「華洪」に通じると人々は解釈した。画紅楼を見上げるたびに、民衆は王宗滌の勲功を思った。

王宗滌は首を括って死んでいた。王建は、子を死に追いやったと自身を責めた。

王建は、王宗滌が近頃甚だ驕慢であると聞き、成都に呼び付け、父として厳しく叱り付けた。王宗滌は、「大王さまは讒言に惑わされて、この功臣を殺す気なのですか」と、強く抗弁した。息子の不遜な態度に、これがまさに驕慢の印であるを見て、王建は激怒した。「二度と我が前にその面を見せるな」と追い出した。王宗滌はその夜に死んだ。

成都の民衆は一日中泣き叫んだ。次の日、王宗滌は殺されたのだとの噂が広がった。このようなことが起こり得るとの予感が全くない訳ではなかったと人々は気づいた。民衆はより一層の悲嘆に沈み、成都は一段と暗く重くなった。鄭郎や林婆さんが町の噂を聞いてきた。より強い予感のあつた韋荘は、それが真実に違いないと受け止めた。

一昨日、幕府の片隅で王宗儒に出会った。王建に仕えるよう長安にきて誘ってくれた王宗儒は、赤虎亭との縁もあつて、成都の幕府において何くれと

なく気を遣ってかれている。王宗儒はいつにないうち萎れた顔付きで、「義父上は小子どもに惑わされております。残念でなりません」と、知るところの真相を耳打ちしてくれた。噂と違わなかった。成都もまた世の例外ではなかったのである。

一人が抜きん出れば嫉妬が生じる。王建は、大きな手柄を立てた武将に、王の姓と宗の字の付く名を与えて仮子とし、軍を一つの家族として育ててきた。王建の仮子となったのは、王宗佶（おう そうきつ）、王宗侃（おう そうかん）、王宗弼（おう そうひつ）、王宗弁（おう そうべん）、王宗鉞（おう そうしゅつ）、王宗瑤（おう そうよう）、王宗滌、王宗儒など数十人に上る。仮子の最年長は最古参の一人の王宗佶で、死んだ王宗滌は比較的新顔である。王宗佶は若輩者に凌駕されたのを快しとはしていなかった。

最も知悉せねばならぬのは王建であるのに、仮子の間に感情の軋轢が存在し得るとは全く考えもしない。自身の特異な性格による。父である王建は仮子たちに十二分の愛を注いでいる。息子たちは当然その愛に応え、息子たち

同士は愛の太い紐帯によって結ばれる。父の愛が全てを包み込んでいるのだからよからぬ何かが生じ得るはずがない。

成都にきて、韋莊は父の愛を確信する王建に強い感銘を受けた。己は新参者で、唐朝では低い官職であったにも拘わらず、成都では文官の筆頭である掌書記として迎えられた。何ら実績がなく、『秦婦吟』の作者というだけでこの厚遇だ。長く仕えてきた他の人々の感情を害するのではないかと危惧するのが普通であろう。王建はそのようなことは露も考えない。父の思いを息子たちが共有しないことはあり得ない。文官は武将と異なり姓名を授かる父子関係までは結ばぬが、軍のみならず蜀の国全体が、王建を父とする一つの家族なのである。

仏蕃が話していた賊王八のころから王建の性格は際立っていた。理屈が通らぬことは決してしない。理屈がひとたび通れば必ず貫く。自身が常にそうであるのだから、他人も同じであると理解している。王建の家族が愛によってひとたび成り立てば、揺らいだりは決してしない。実際のところ、王建の

家族は大成功を収め、蜀の地を平定した。

しかし、王建の確信する通りではない。韋莊は他人の視線に憎悪が籠っているのを幾度か見た。文官同士であるから血生臭い事件にならずにすんでいるが、武将同士ではそうはいかない。王宗滌の死という、痛ましくも象徴的な事件が起きた。

唐道襲(とう どうしゅ)という王建の寵童がいる。いまでは童と言える年齢ではないが、蔭で多くの者が小僧子扱いしている。可愛いらしく舞い踊る姿が王建の眼に止まって召し上げられた。常にそばに置かれ、それこそ犬か猫でも相手にするのと同じ気分なのだろう、王建は唐道襲に向かって、他の者には言えぬ国家の機微についてしばしば口にしてきた。唐道襲に口出しさせる気はなく、単に自身の考えをまとめる手段に過ぎないのだろうが、唐道襲は犬でも猫でもないから時にはものを言うし、成長すれば知恵もつき利に聡くもなる。

王宗滌を嫉む王宗佶が唐道襲に接近した。二人してこもこも王宗滌の良か

らぬことを王建の耳に入れた。王建は、父として叱ってやろうと王宗滌を呼び寄せ、「二度と顔を見せるな」と言うことになった。王宗滌は一時の興奮が冷めてくると、父に抗弁したのを悔んだ。唐道襲が訪ねてきた。この寵童が己の敵であるとは疑わずに、「某が大王さまを宥めましようほどに御心配召されますな」と、親切顔で言うのを真に受け、慰めの酒を勧められるままにそこたま飲んだ。唐道襲が帰った翌朝、王宗滌は首を括った姿で発見された。

王宗儒は怒りと悲しみの混じった声で、唐道襲が縊り殺したに違いないと、言外に匂わせた。「この不幸な事件を、せめてよき機縁に変えるのが我等の役目なのでありましょう」と、王宗儒に向かつて言ったのだが、何かできることがあるとは二人とも必ずしも思っていないことが互いの表情から読み取れた。

そのときの王宗儒の顔を思い出し、手から釣竿がぼろりと落ちる。

何気ない風を装って竿を持ち直す。その手を王建に握られたときの感触が甦ってくる。

王建として理想の君主ではない。赤虎亭の女将から聞いた王建は優れた英雄そのものだった。『秦婦吟』を兵士に歌わせたとき、王建は神々しいばかりであった。都を出て成都にくるに当たって、過剰な期待をせぬよう己を戒めた。元は盗賊であるし、韓建と兄弟分であったのだから、底が知れていると思っべきだ。それなりの警戒心は持っていた。間近に王建を見て、かつて幕客として仕えた周宝とは無論のこと、錢鏐と比べても別格と思えた。自身が作り上げてきた家族に、愛で繋がる善意のみを見ようとする王建に、並外れた美しさを感じた。その家族の一員になれたことに深い安堵を覚え、この父のため、『秦婦吟』を重んじてくれる唯一無二の人に、己の身を惜しまずに捧げねばならないと思った。それはいまも変わらない。

願君挙棹東復東

あなたにお願いするのは、棹を挙げて東へ東へと向かい

詠此長歌獻相公

この長い歌を詠じ、お偉い方に献じて下さることで

秦婦の願いは、悲惨な日々を終わらせてくれる人に『秦婦吟』を献じることだった。王建こそがその相手であつたと信じた。弟の藹は王建が兄を知る者だと言っていた。王建に尽くすことが、成都にきた目的である不幸な女たちを救うことに通じると考えたい。

しかし、王建の家族には恐るべき破綻の芽が潜んでいる。その現実に向かうだけの力は己にはない。せいぜいのところ危うきを踏まずに避ける知恵があるくらいだ。長安でもそうやって生きてきた。さほど大きくもない望みであっても、これでどのようにしたら叶えられるのか。綜の言うように退隠するのが良いのか。それでは安楽な暮らしを得るために成都にきたことになつてしまふ。

「齢だけを言えばそうかも知れぬが、成都にきてわずか一年半だ、まだまだだ」

ぼそりと言う。

「そうですかな」

「やらねばならぬことがある」

自身でうなずき、

「これでも多忙の身である」

「たぶん息もつけぬほどに御多忙なのでありましような」

綜が韋蘭の口調を真似るのは、何かしら言いたいことがあるときだ。

「このように暢気に釣りなどしていられるのも、それと裏腹に今日が特殊な日だからだ。また明日からは忙しい日々に戻る」

王宗滌が死んでからの成都の民衆や兵士の悲しみ方が尋常でないのにとまどい、王建は町を鎮めるため、今日の一日は幕府も市も一切の活動を止めることにした。普段であれば夜明け前に屋敷を出なければならぬ韋荘も、今日だけは綜の誘いに応じられた。

毎日が多忙であるのは、そうであることを求めてきたからだ。成都にくるよう王宗儒に誘われたとき、飾り物にされるだけだと綜が反対した。飾り物でないためには、掌書記としての任を十全に果たして見せなければならぬ。

成都にきて日が浅く、人に憎まれもする己の立場を安んじるためにも、職務に精勤する姿を見せなければならぬ。それが呼んでくれた王建の恩に応えるあるべき姿というものでもあるだろう。

それだけではない。多忙である限りは、外見と乖離する内心と向き合わずにすむ。あるいは、乖離している事実を己に対して糊塗することができる。今日のような閑雅があると、そのようなことに気づかされてしまう。多忙の中に己を埋没させてきた。それが退隱を恐れる理由か。

成都の幕府での一日は、夜明けの朝見から始まる。王建が臨席し、幕府の主だった者が点呼を受ける。それぞれが抱える案件を王建に報告する。最も多くの事柄に関与するのが韋莊だ。掌書記、すなわち書記の総まとめ役は、文官のあらゆる仕事に精通しているべき役柄だ。もとより人の意を察するのに機敏であるから、王建の心にそうよう迅速に事を運ぶのはさほど難しくもない。王建は何よりも理屈が通っていることを重視する。王建は旧来の秩序を破壊して今日の地位を得たにも拘わらず、旧秩序を支えてきた原理を尊重す

る。理想の国家とは仁義礼智の徳目で結ばれた家族であるとの考えは儒教の根本原理と合致し、韋荘が学んできたそのままである。

朝見が終わると、王建の裁可に基づいて種々の案件の処理を書記たちに振り分ける。一段落してようやく朝食で、慌しくすませると、各部署から上がつてきている案件の処理に取り掛かる。大半は法令もしくは慣例に従って処置すればすむもので、書記たちに任せておいて少しも構わないのだが、律儀にも全てに目を通す。掌書記としての判断が必要な場合は、独断で決めるのではなく、書記たちの意見を十分に聞く。そうしなければ反発を買う恐れがある。掌書記の職分で決めてよいことも、新参者である立場を弁え、なるべく多くを王建の耳に入れる。王建の裁可を仰ぐ必要がある全てについて、朝見で十分な説明ができるよう詳細を把握すべく努める。そのようなことが大體すむと、朝のうちに書記たちに仕分けた事柄に関する公文書の下書きができてくる。逐一目を通し、細かな号令に至るまで少しも手を抜かない。時には屋敷に帰った後に書き直しをすることもある。

このような忙しさが、掌書記として為すべきことをしているとの自負を生む。それは心の安定につながるが、内心を外見に近づけていきもする。これが本当に求めていたことなのかとの疑念が消えるようであれば、春琴とは生死を別けた以上に遠く離れてしまうことになる。

掌書記の前任者であった馮涓（ふう けん）は引継ぎのときに、「川の流れでも眺めるようにしておればよいでしょう」と言った。馮涓は掌書記の一つ上の地位に昇り、いまでも朝見に顔を出している。稀に王建に問われると、「掌書記どのの申す通りと存じます」と答える。

馮涓は、唐朝の高官であった馮宿（ふう しゆく）の息子だ。馮宿とその弟の定（てい）は、数十年前に横暴な宦官と闘った清廉の士だ。かつて王建は成都の攻防戦に勝利して入城するに際して、「お父ちゃん」の田令孜とその兄の命を保証したのだが、しばらく後に二人は獄死した。朝廷は王建に対して強い不快感を示し、弁明のために都にきたのが馮涓だった。そのとき初めて馮涓の息子が王建のもとにいることが知られた。馮涓は鮮やかな弁舌を振るい、

王建はそれでやや見直された。それ以降、馮涓を頼って都から移る者が続き、成都に有能な人士が集まるようになった。

馮涓の最大の業績は賦税の率を下げたことだ。「お父ちゃん」の田令孜の兄の時代から蜀の税率は他地域より高く、民衆の負担は重かった。王建も連年の戦役のために高い税率を踏襲した、馮涓は、国を富ませるにはまず民を富ませねばならないと、王建に決断を迫り、武官たちの反対を押し切って、税率を引き下げた。馮涓は蜀の財政を安定させ、民衆は多いに恩義を感じた。以後、馮涓は川の流れを眺めるだけとなった。そのような馮涓の真似は、新たにきたばかりの韋荘にできるものでない。

「特殊なのは今日だけですかな」

「どうだろうか」

「いまはまだしもよかったと後に思うようになりはしませんかな」

王宗滌の死は重大な事件であるだけに、文官第一の掌書記の韋荘に關与できるところはない。文官は肅々と民政、財政の実務をこなすのを期待される。

成都の幕府は唐朝の伝統的な統治機構を形の上で踏んでいるものの、実態は王建の独裁だ。国の大事を王建が決める際に関わりをいくらかでも持てるのは、旧くからの参謀、旧くからの武将、そして佞臣の三者である。文官は埒外だ。参謀の筆頭は周庠で、王建が初めて利州知事に任命されたときに閬州を取るべきと勧め、王建の今日を築くきっかけを作った。旧くからの武将で有力な者は王建の仮子となり、その筆頭が王宗佶だ。佞臣の第一は唐道襲である。

「如何とも為し難しか」

「どうですか」

「しかし、やらねばならぬことがある」

不意に、衢州の不出院の庭で、綜と春琴に貢挙を受ける意志を明らかにしたときの情景が甦ってくる。春琴は一緒に都に行くことを望み、綜はそのままではなくてもよいのではと言った。あれから十年が経ち、春琴はいなくなり、綜は同じように疑問を投げかけてくる。

「伯父上は変わりませんな。重い荷を敢えて背負ってみようとするのですからな」

綜もまた十年前を回想していたのか。

「蘭くんがそのようなことを言っていたのだろう」

「何を好んで葉公子の苦しみをわざわざ引き受けようとなさるのですか。蘭おじさんも、そう言いましたよ」

莊子の寓話だ。人として生きる限り、親子の関係と君臣の関係から生じる困難な義務より逃れることはできないのだから、運命に安んじる他はないと、智者は葉公子に説いた。いかにしたら安んじられるのか。退隱は一つの立派な手段だ。

「好むと好まざるとを問わず、他にしようのないことがある。取り分けこのような時代にはだ」

「そうですか。たまたま佳き時代に生まれた者は好もしい生を享受し、そうでない時代に生まれた者はそれができない。理不尽ではありませんか」

「だからこそ不幸な者のためにせねばならぬことがある」

「我が身を徒に費やしてどうなさるのですか。いつの時代に生まれようとも、ささやかな安穩を得ようとするのは少しも悪いことはありませんでしょう。敢えて身を危うくする意味がどこにあるのですか」

綜の言うことはよくわかる。叔父の韋韜は唐の佳き時代のうちに死にたいと望み、後から生まれてくる者の苦しみを思いやった。佳き時代であれば楽に許された小さな幸せが、どう望んでも得られないのは理不尽だ。

だからこそ、己がたまたま安穩を得られればそれで佳しとしてはいけない。平陽公主を欽慕した春琴の選ぶところではない。『秦婦吟』のお蔭で得られたいまの地位を、秦婦のような女たちの苦しみをなくすために使わなければならぬ。それができるのか。迷ったり留まったりしてはならない。己には重過ぎる荷だ。春琴がここにおいてくれれば、貢挙に合格できたように、己でも何かができるのか。いまになっても春琴に助けを求め、老いて衰える一方の己にいまさら何ができようか。

「どうすればよいのかい」

「だから、退隠でしような」

「それでは春琴に顔向けできまい」

「いまはそうではないとおっしゃるのですか」

「すでに駄目なのかい」

「さあ、どうでしょうか」

「あれは、わかってくれていると思いたい」

「退隠されても同じではありませんかな」

「それではあれに甘え過ぎる。わずかなことをしたいと思っただけだ。

大それた望みを抱いているのではない」

「それが難しいのです。何故に我が身を押し殺してまで人に仕えるのですか。もうよいではありませんか。王とか皇帝とか、いなければいけないに越したことはないのです。違いますか。古の聖人の世に、民は王の存在を忘れ、鼓腹して太平を謳歌したと言います。ならば王などそもそも存在しないのでよい

のではありませんか」

「それなら誰がどのようにして人々に幸せを与えるのかい」

「与えはしません。人が自ずと幸せを持つのです。王や皇帝に奪われなければそれでよいのです」

「夢のような話ではないかい」

「現実と違い過ぎることくらい僕もわかっています。困難な世に、背負えるはずのないものを担おうとするのはもうやめにしてと申し上げているだけです。漢州にいらしてください」

「赤虎亭に世話になるのかい。無為徒食の仲間入りをさせようと言っのかい」
「無為徒食ではありません。僕はれっきとした赤虎亭の主です」

「そうなのかい。十五娘さんがぞつこんだから、釣をするのも許されていようが、私らまで厄介になっては、十五娘さんだってよい顔はしないのではないかい」

「あれに何も言わせはしません」

「なかなか強気ではないか」

少しばかり笑う。

成都にきて何もできなかったのではない。少なくとも綜の望みは叶えられた。

長安を出て成都に向かう途中、漢州の赤虎亭に立ち寄ったところで、劉女将の義妹の趙十五娘が綜に一目惚れした。綜もまんざらではなく、半年もしないうちに綜は赤虎亭の婿におさまった。綜は、箸の上げ下ろしに至るまでまめまめしく仕えてくれる女房と、釣三昧の日々を易々と得た。

「主人としてすべきことはしておりますから」

「そうなのかい」

綜は旅籠屋の主人らしきことを幾つか挙げる。

己が成都の幕府で忙しくしているのどこか似ている気がして、伯父と甥は似てしまうのかと微笑を浮かべて聞くうちに、言い知れぬ寂しさが湧き出てくる。

顔を上げて空を眺める。この感情は、成都にきて二度目となった秋の季節のせい。流れゆく雲に日が隠れ、そしてまた現れ、時の移りの速さを嫌が上にも思わせる。だからこの寂寥感なのか。

そうではあるまい。綜に取り残され、己は同じ場所に留まっている。

あれは嫉妬だった。貢挙に合格して婺州に帰ったとき、意識していなかったが、明らかに若い綜に嫉妬していた。それが春琴を苦しめ、綜の反発を生んだ。三人を救ってくれたのが彩霞だった。彩霞がそうしてくれたのを、春琴と綜を楊銀の持仏堂に残した後に陸氏から聞いた。綜と思いを共有しつつ反発し合ってきた。春琴が死に、もはや春琴のためにできることはないのだと、はっきりと認められるようになるまでに二年を要した。成都にくと最後に決めたときには、綜とぶつかり合うこともなくなっていた。

春琴がいなくなった喪失感は消えていない。春琴にわかってもらいたいといまも思い、春琴がいなければ何もできないといまも思う。綜は佳き妻を得た。春琴のことで、嫉妬させられるようなことはもうない。それでよい。そ

うでなくてはならない。

己一人がなお喪失感の内にあり続ける。それがこの寂しさを生み出しているのか。十七歳で死んだ春琴を人々は忘れ去りつつある。いつか己もそうなるのか。

綜の腕がぴくりと動く。

涙で濡れてきた目は、水も空気も一緒に合わさった白く朦朧とした空間の中央に、ぼんやりと一本の筋を捉える。

綜は竿を上げる。糸の先に小さな魚。折からまた漏れてきた秋の陽が白銀を輝かせる。

綜は手早く針をはずして魚籠に入れる。覗き見ると懸命に尾びれを動かしている。

白小群分命　この白く小さなものに与えられたのは

天然二寸魚　天然の二寸の魚としての運命。

細微霑水族　細微にして水族のなかまであるが

風俗当園蔬　　ここの土地柄として野菜とされている。

入肆銀花乱　　銀の花が乱れるばかりに店に運ばれ

傾筐雪片虚　　籠を傾けて売りさばかれ、雪が融けたように消える。

生成猶捨卵　　生成の理として卵は残すものとされているのに

尽取義何如　　取り尽くしてしまえばかりなのはどうか。

杜甫の詩を思い起こす。小さな魚の命にも杜甫は思いを巡らせていた。

己の望みは不幸な女たちに小さな幸せを与えることだった。王建に握られた手の感触を思い、二寸の魚の運命を思う。

「ここは百花潭であつたな」

日がまた翳って輝きを失った川べりを見渡す。

「土地の人はそのように申しております」

「すると何かい、杜甫の草堂は、この上流あたりにあつたのかい」

「たぶんそうでしょう。そちらに舟を向け、尋ねてみましょうか」

「そうだな」

白沙翠竹江村暮

白い砂と緑の竹、川べりの村は暮れた

相送柴門月色新

柴門から送っていくと、月がちょうど昇ってくる。

思い出すままに杜甫の詩をつぶやく。

綜は釣竿を置き、舟を動かす準備をする。

この上流にいけば杜甫が目にしたのと同じ風光を見ることになろう。胸に痛みが走る。

「今日はよしておこう」

「そうなのですか」

「まだ先のようにだ」

「では、もう少し続けますか」

「釣りをかい」

「辞めて退隠されれば、そのときには草堂の跡にもいけましようかな」

「たぶんなおさら難しかろう。安穩な隠居所を求めて都を去ったことになろうからな」

杜甫は苦勞の末に得た朝廷の職を捨てて西方への旅に出た。辺境の町で困苦し、新局面を切り開くべく成都にきた。友人たちの助力を得て、百花潭の上流の浣花溪に小さな草堂を結んだ。杜甫の生涯の中では珍しく穏やかな日々をそこで得た。

韋荘の人生は時折、杜甫の人生と重なりを持ち、その度に、杜甫との遠い隔たりを思い知らされる。

「それは違いましょう」

「私のしてきたことは大体がそのようなことばかりだった」

「伯父上は十分になさったと思います」

「違う」

春琴ばかりでなく多くの人々によって生かされてきた己がこれまでに何をしたのか。これで退隠しては、危くなった朝廷から逃げ出しただけになる。事実はそうであるのだ。

東呉くんは太原の李克用にところにいった。東呉くんと己は似ているよう

で大きく異なる。東呉くんは無官だ。官人の己は朝廷に仕える義務を負っていた。東呉くんは唐朝のためにとの高い志を抱き、己は低い志しか持っていなかった。それで隠居生活に入ってよいものか。

だが、掌書記の地位に留まる方がより見苦しいのか。己は事実としてはやはり飾り物だろう。そうであることを甘受しているから成都にいられるのか。顧みれば、これまで己は、世慣れた風に振る舞い、巧みにより場所に身を置いてきた。不器用に自分の生き方を貫こうとした杜甫と全く異なる。官を辞しても杜甫の唐への忠義心は揺らがなかった。己は唐の皇帝に絶望し、王建の手の感触に惹かれて成都にきた。そうでありながら、王建を理想の君主と思っていない。王建に尽くそうとの気持ちはある。しかし、かつて唐の皇帝に抱いていた崇高な念を王建に対して持つのではない。あのような気持ちを再び抱くことはない。皇帝の困苦に思いを致せば胸が苦しくもなる。それくらいのは、杜甫の純粹さから遙かに遠い。

都を出たのは天復元(902)年の晩春だった。劉季述の乱のようなことが

いつまた起こることも知れず、死がすぐ近くにあった。長安の門を出たとき、間に合ったと正直に思った。同時に、都に残る人々に対して申し訳ない気持ちも強かった。

崔胤は宦官たちの横暴を許すまいと、朝廷の権限を自分一人に集中させようと躍起になっていた。最大の焦点は禁軍の指揮権だった。宦官たちはそれを手放すまいと必死で、皇帝は宦官に酷い目に合わされながらも慣習を改めるのをためらった。崔胤を嫌う李茂貞が都に乗り込み、左禁軍は韓全誨（かんぜんかい）に、右禁軍は李彦弼（りげんひつ）にと、いままで通り宦官が指揮すると定めた。

韋荘が成都に到着した後の夏、朱全忠が派遣した汴州の兵が李克用の本拠地である太原の城下にまで迫った。たまたま大雨が続き、汴州の兵の間に病が流行り、囲みは解かれた。李克用自身敗北を覚悟せねばならないほどに厳しい状況だった。

その年の十月、朱全忠が都に向かった。皇帝を迎え取ると公言していたの

を実行に移したのだ。韓全誨たち宦官は皇帝を攫って李茂貞のいる鳳翔へと逃げた。文官は皇帝に付き従う者と、都に残る崔胤一派とに二分された。

朱全忠は長安へと進む道すがら、韓建を呼びつけ、李茂貞を選ぶか、自分を選ぶか、二つに一つだと脅した。韓建は朱全忠の前に膝を屈し、華州を開け渡した。

朱全忠は崔胤に迎えられて都に入り、鳳翔へと兵を進めた。朱全忠は、不埒な李茂貞や宦官の手から皇帝を救い出すためだと、王建に協力を要請してきた。王建は五万の兵を出した。それを指揮したのが、今回の事件の当事者となった王宗佶と王宗滌だった。王建は李茂貞の領地から山南諸州を切り取って我が手に収めた。言わば漁夫の利を得たのだ。

翌天復二（九〇二）年春、朱全忠の動きを牽制すべく李克用が東方で戦端を開いた。朱全忠は二方面でよく戦い、李克用はまたも敗れた。

六月、李茂貞は朱全忠に決戦を挑んで敗れ、鳳翔は五重の柵で取り囲まれた。以来、秋のいまに至るも包囲が続いている。皇帝がいかなる状況にある

のかわからない。文官の内の清流派の人々が鳳翔にいる。もし己が都に残っていたならば、その人々と苦しみを一つにしたのかも知れない。ここにおいて皇帝のためにできることは何もない。暢気に釣をしている。

「伯父上は、なかなか欲深いではありませんか」

「私がかい」

「何かせねばならぬと、欲がおありなのです。その欲深さを怖がって、魚が一尾もかからないのではありませんかな」

「そうだろうか」

「ともあれ、雲行きも怪しくなってきましたから、これで帰るとしますかな」
 綜は木に繋いでいた縄を解く。

韋荘は魚籠に手を伸ばし、少しく中を見てから、魚を川に放つ。

「欲などないと、川の神に見せるおつもりですか」

綜は川の中央へと舟を出していく。

「我らには小さな一尾の魚でも、あの魚にしてみればそれが全てだ。蟻光禪

師さまも蟻の一匹と言っておられた。一尾、一匹のために何かをして、それで意味があるのかと問われれば、はかばかしい答えはない。一尾、一匹を救いたいと思うのも欲であろうか」

「蘭おじさんは、かつて狐潭を發つたときに巨人の話をしていました。巨人から見れば、この地上の争いなど取るに足りぬ些細なことです。小さなことに汲々と走り回る必要などどこにありましようか」

「大きなことに汲々としても同じではないかい。王宗滌さまの死を成都の人々は悲しんでいる。魚の一尾と王宗滌さまと命の軽重はどこにあるのだろうか」

「さあ、それはどうでしょうか」

「無論、軍旅のことは私の知るところではない」
吐き捨てるように言う。

舟は川の流れに乗る。

舟べりを叩いて自身の詩を唱える。

何代何王不戦争

何れの代の何れの王であろうか。戦争をなくし

尽従離乱見清平

離乱を終わらせて清平を見せてくださるのは。

如今暴骨多於土

ああ、今も土の上に骨がさらされているというのに

猶點郷兵作戍兵

なお村から人を集めて兵士に仕立てようとしている。

「どうせなら、王などいなくても思つてよいのではありませんか」

「成都の民ために何ができようかと思えば、王建さまがおられねばならぬ。

それは明らかだろう」

「いつまでも負えもせぬ荷を担ごうとなさるのですな」

「及ばぬ身であるからこそ、まだこうしていなければならぬ。春琴に恥じ

ずに生き、いつか杜甫の草堂の跡地に立てる日がくると思いたい」

安得広厦千万間

千万間もの広さの大屋根があつて

大庇天下寒士俱歡顔

天下の貧者を皆覆い、喜びの顔がそこにあ

ふれる

風雨不動安如山

風雨にも動かざること山のごとく屋根だ。

嗚呼何時眼前突兀見此屋

ああ、いつかそびえるその家を目の前にで

きたならば

我廬独破受凍死亦足

我が家など壊れ、私など凍え死んで構わな
い。

秋の大風で草堂の屋根を飛ばされたときに杜甫が詠んだ詩を唱える。

都で春琴と初めて結ばれた翌朝に、壊れた屋根を見上げてこの詩を想った。

あのような幸せな時は戻ってこない。だからこそ、天下の貧者を收容する大屋根を夢想する杜甫の心になお近づこうとしなければならぬ。

「もしもお気持ちが変わりましたら、いつでもお待ちしています」

「そなたには感謝している」

舟は下り、明日からまた多忙の中に己を埋没させる日々が続くのだろう。

その先に何かを為し得るのか。そのように思うのは多欲であるからか。杜甫のように一つの己を保たねばならない。それは何か。元に戻って考えなければ流されるだけだ。忙しさを求めるのは、考えずにいる己と向き合うのを

避けるためか。それこそが廉恥心を捨てるものではないのか。春琴を想って許される己ではない。

天復二（九〇三）年春。

夜半まで降り続いた雨で重く垂れていた枝に朝日が注ぎ始める。淡い靄が立ち昇り、海棠の紅が活き活きと輝き出す。

風で落ちた葉や小枝を林婆さんが掃き集めている。その単調な音が心地よい。

時折、庭に目を遣りつつ、一人、碁盤と向き合っている。長安で殺された弟の莠が遺した棋譜の注解を、今日こそは理解してやろうとの意気込みであった。若い頃よりも腕前が落ちてきたいまになってわかる道理はなからうが、このようなことができるのも、あるいは今日限りかも知れない。

掌書記の住いとして王建が与えてくれた屋敷はなかなか広い。不要な建

物を取り払い、空いた土地は、畑にしようが花を植えようが、陸氏と林婆さんの好みに任せている。

碁盤上の局面は難解だ。莠の注解は覚書のようなもので、楮胤が打ったのとは別の手を示し、それが元来の手よりも優ろうとも、ここでの大勢はすでに決しているといっているようだ。さらに別の手があるように思えるのだが、莠はそれには触れていない。己の考え通りには局面は進まぬのだろうと、ふつと碁盤から目を離し、海棠を眺めやる。

明るく美しいこの朝のうちに、ここだけでもわかっておきたい。莠はこの注解を書き改めようと考えていた。書かれるべきであった弟の思索を辿る術はない。己がいなくなれば、弟の思いに近づこうとする者もいなくなる。

近日中に成都を発つのだろう。馮涓は受けない。己がいくしかない。成都には帰れぬとの覚悟が求められる。かつて李洵とともに果たした勅使の任務より険しい。腸が焦げるばかりの葉公子の苦しみが己のものとなる。

蜀の何百万の民の命に関わる。朱全忠との戦が避け難いものとして迫って

いる。見せ掛けの友好がこれまではあった。朱全忠の要請に応じて李茂貞を討つて漁夫の利を得たのを、朱全忠は腹に据えかねている。

王建は早くから朱全忠を警戒していた。王建が成都に入った翌年であるから、十一年前に、朱全忠に最初の使者を送った。使者は劍閣の險をことさらに強調し、蜀に入るのは大変困難であるだけでなく、山また山の地を得ても利のないことを言った。朱全忠は「隣の火事が消えぬのに、山に虎を捕らえにいく愚か者はおるまい」と笑って聞き流した。

隣の火事がほとんど消え、虎を捕らえに山に入る時期がきた。天下の帰趨は朱全忠へとほぼ決し、唯一それを脅かし兼ねないのが蜀に盤居する虎だ。威勢のよい蜀の將軍連中は先に討つて出るべきと言ひ募る。王建は戦端を開くのを欲していない。見せ掛けではあっても、まだ破られていない友好関係を温め直したいと考え、天下に名高い馮涓を修好の使者として朱全忠のもとへ送ろうとしている。馮涓ほどの人物が出かけていけば、朱全忠も疎かに扱いはしないだろう。王建の要請を馮涓は受けえないに違いない。修好は朱全忠

を利すると考えているからだ。

長く朱全忠に包囲されていた李茂貞はとうとう音を上げ、この一月、皇帝を差し出すことで朱全忠と和議を結んだ。朱全忠は、皇帝を攫っていった韓全誨たちの首を要求した。李茂貞は韓全誨を各戸む二十余人の宦官を誅殺した。朱全忠はさらなる処罰を望み、七十二人の宦官が殺された。皇帝は鳳翔を出て朱全忠と会い、長安に帰還した。迎えた崔胤は朱全忠と諮り、宮廷になお残っていた数百人の宦官を悉く誅殺した。崔胤の宿願がついに果たされた。朝廷は都の外にいる宦官も全て殺すよう全土に命を發した。王建は無益なごとと宦官を匿い、それがまた朱全忠を怒らせた。

朱全忠は梁王の号を得て、都を崔胤に委ねて汴州に引き上げた。朱全忠の狙いは唐を滅ぼして皇帝になることだ。黄巢のように勝手に皇帝を名乗るのではなく、名実ともに唐を引き継ぐ新王朝の創始者になる。王建との衝突は不可避だ。

馮涓は唐朝の名士の子孫であるとの自負をなお持ち続けている。唐朝を存

続させる唯一の道は、朱全忠に鉄槌を下すことだ。それが可能とすれば王建だ。王建と朱全忠が和すのは唐朝のためにならない。修好の使者は馮涓の引き受けるところでない。將軍連中とともに、朱全忠撃つべしと勇ましく主張するのが、唐朝のためになる。王建は朱全忠のように皇位を篡奪する意志を外に示していない。長安から避難してくる宮廷人を手厚く保護している。もしも王建が朱全忠に勝つものならば、唐朝が再び盛り上がる可能性はあるだろう。敗北すれば蜀の民は悲惨なことになる。

馮涓がいかなければ己にそれが回ってくる。朱全忠は修好を望んでおらず、王建を早く除きたいと考えているのは間違いない。修好の使者を斬って、王建を戦争に引き込もうとするかも知れない。朱全忠が勝算ありと見ているのなら、そうするだろう。いまや敵無しの朱全忠だ、馮涓ならともかく、韋莊如きを殺すに躊躇はあるまい。

碁盤にまた目を注ぎ、考えをそこに戻そうとする。己の手はこの局面を打開するものではないようだ。その理由がわからず、思考は行き詰まる。

そして海棠。あたりに漂っていた靄はあらかた消え、花の房に宿る水滴が日の光を反射する。ここにきて三度目の春。この土地にも慣れてきた。成都の春の空気の軟らかさが今日はことのほか細やかに感じられる。

曉看紅濕処　　明日の朝、紅色に湿る処を看るだろう

花重錦官城　　錦官城を覆う重い花々を。

杜甫の詩を想う。

成都には錦官城と言う美しい別称がある。天子に献上する豪華な錦を製造する役所が遠い昔にあった。成都の町の艶やかさと古い伝統を表す麗しい名だ。

杜甫は草堂にあつて夜の雨音を耳にしていた。この雨が朝までに上がれば、重く潤った紅い海棠の花が、成都の町に見られるだろう。官職を捨て、成都の春に初めて希望を見出したのがこの詩だった。

長安では牡丹の季節を迎えていよう。青竜寺の蟻光は昨夏のうちに亡くなったと、風の便りに聞いた。唐朝に所縁の深い青竜寺も無住になった。

心が臆せば時に遅れ、心が逸れば時流に吞まれると、貫休は言った。唐と言う時代そのものが時に遅れたのか。逸った者は順次時流に吞まれ、結局はあの裸の暴れん坊なのか。貢挙に合格して初めて皇帝の前に出たときに、突如として朱全忠に負けてはならぬとの思いが湧き上がった。その朱全忠のところへ、皇帝のためには害になるかも知れぬことをするためにいくのか。しかも命を懸けて。

庭を掃く音が止み、林婆さんがすぐ近くに立っている。何やらにやにやとしている。

「へぼな碁打ちが一人で呻っているのが可笑しいかい」

「そうではありませんので。いままで唱えておられましたのは杜甫の詩でありましょうか」

「ほう、わかるのかい」

「お蔭さまで耳はまだ達者です」

「耳ばかりでない。そなたは、体も口も若い者にはまだまだ負けていない。」

大したものだ」

「おつむの方はもう随分と鈍くなりまして、奥さまに言い付けられた御用もすぐに忘れてしまいます。いまだって大事なことをすっかり忘れていて、後でお小言を頂戴するのもわかりません。それでも、昔聞いたことだけは不思議と忘れません。杜甫の詩を耳にしまして、旦那さまに通じるような面白い話を思い出し、ちよつと可笑しく思っていたのです」

「ほう、私に通じるとは、それはどのような話なのだい」
「出てくるのが、やつぱり韋家のぼんぼんでして、余計に可笑しくて」

林婆さんは一人で笑う。

「それなら、案外この私の噂話だったのではないのかい。そのぼんぼんも、やはり何かい、貢挙に苦しんでいたのかい」

重くなっていた気分を林婆さんとの話に紛らわせようとする。

「その通りですとも。家柄のよろしいお方には、それくらいのお苦勞はしていただきませんと。そのぼんぼんも落第を重ねておられました」

「世の中はまあまあそれで釣り合いが取れているのだろう」

「ぼんぼんが育つたのはそれはもう御大層なお家で、長安にも洛陽にも御立派なお屋敷がありまして、その上、お父さまが余程さばけたお方だったのでしよう、ぼんぼんの望むままに、洛陽の名妓を買って家に入れてやり、大変な御寵愛ぶりでありました」

「甘やかせ過ぎではないかい」

「下手に町に遊びに出て悪い連中のかもにされてしまうよりは、家にいてくれた方が御安心なのでしょう。それにその妓女は、そこらの性悪女とは違い、見目形もよろしければ、心栄えもよろしと、文句の付けようのない人だったそうです。音律に大層優れ、ぼんぼんが杜甫の詩集を手に入れ、声に出して読んでおきますと、そこは韻が合わないから写し間違いいではないか、そこは平仄が合わないからこう直すべきではないかと言いまして、後により優れた写本と比べてみますと、悉く女の申した通りだったのです。ぼんぼんは女をいよいよ敬愛し、貢奉に受かったならば正式の妻にしたいと考えていました。

ところが、思うようにならぬのが世の中でして、可愛そうに、女は二十一歳で亡くなってしまったのです」

「才ある女はやはり薄命なのか」

「この婆などは、まだまだ長く生きることでしょう」

「話はそれで終わりがい」

「いえいえ、ここからです。お聞き下さいまし」

林婆さんは箒を下に置き、話にますます身が入る。

「女が死んでぼんぼんは嘆き悲しみ、夢でもいいから女に会いたいと、部屋に籠って床に伏せるばかり、見る見る痩せ細ってしまいました。御両親の御心配はいかばかりでしょうか。そこで家の執事が申すには、嵩山に任（じん）処士と言う、返魂の術を得意とする者がいて、死者に会わせてくれると巷で評判。どこまでも甘いお父さまは、ぼんぼんのために大金を出して任処士を洛陽のお屋敷へと呼び寄せました。ぼんぼんは齋戒沐浴した上で、一室に香を焚いて任処士を迎え入れます。任処士が言うには、『術を為すには、生前そ

のお方がお召しになつていたお着物が要ります』と。女の衣装は葬儀の際に布施物として僧に与えてしまつたのですが、衣笥を探ると金縷裙が一枚だけ残つておりました。任処士はそれを検分し、『これなら成りましよう』。早速時日を占い、『今夜にも魂を呼び戻してみせましよう』と言う。ぼんぼんは大喜び。全ての人を遠ざけ、任処士と二人だけで夜がくるのを待ちました。周りに幃を垂らし、一本の蠟燭を点し、二人は身じろぎもせず座し、次第に夜が更けていきます。風もない穏やかな夜、あたりはひたすら静まり返り、天に皓々と銀河が輝きます。任処士は蠟燭の長さを計り、『間もなく一寸になります。そうになりましたら、お会いしたいお方がお見えになります』。任処士の言葉に、ぼんぼんは深くうなずき、息をこらしてその時が至るのを待ちます。いよいよ一寸になり、任処士は大きく長く息を吐き、女の方の金縷裙を手元に引き寄せ、招き寄せるような仕草でその袖を振るいます。ゆつくりと三度繰り返しますと、金縷裙はふわふわと浮いて任処士の手を離れ、中空を滑つて、幃の向こうへと消えます。ぼんぼんが小さく『あつ』と叫ぶと、幃にふ

つと仄かな明かりが射します。金縷裙を纏って立つ女の影があります。怨みに耐えがたき風情に、ぼんぼんは泣き叫び、幃を持ち上げようとします。任処士はぼんぼんの肩を抑え、『お静かになさいませ。驚かしますと帰ってしまいますぞ』。ぼんぼんは涙を抑え、懸命に穏やかな声を作って話しかけます。女はそつとうなずきます。ぼんぼんは女が死んでからの悲しみを縷々訴え、女は泣くような仕草を見せます。一寸ばかりになつていた蠟燭ですから、たちまち燃え尽き、幃に射していた明かりも絶え、女は消えてしまいます。『いかないでくれ』。ぼんぼんは幃にすがって悶絶し、それから一年も経たずでしようか、亡くなつてしまわれました」

林婆さんは話し終え、少し間を置いて、ふふつと笑う。

「何かい、任処士の術は本物だったのかい」

「どうでしょうか。もし本物でしたら、旦那さまには、お会いになりたいお方がおられますでしょうか」

碁盤の方へと振り返り、

「そうだな、この手の意味を、莠くんが教えてくれたら一番有難いだろうな」

「そうなのですか。他のお方ではないのですか」

「あれが出てきたならば、その女のように泣いたりはずせずに、この私を叱るかも知れぬな」

「そのようなことがありましようか」

「むしろそうしてもらいたい」

「しかし、叱ってほしいとお思いになられましても、この婆も随分といかさまなことに関わりましたからわかるのですが、これは執事と任処士が仕組んだ悪企みなのでしょう」

「どうせそのようなところだろうな」

「それでも、ぼんぼんにとつては、贋物だろうが本物だろうが、どちらでも構いはしなかったでしょう。会いたいと願っていた女を見られたと思ったのですから、それでまことに結構ではないですか」

「ぼんぼんは悲しみの余り死んでしまったのだろう、それで結構なのかい」

「死ねば余計なことを考えずにすみましょう」

「それはそうだ」

「いずれにしましても、可哀想なのはほんほんよりも女の方だと、あたしは思います。写本の間違いを正せるだけの才能がありながら、それを埋もれさせたまま死ねばならなかったのですから」

「確かにそうだな」

「そんな女が都にはたくさんいました。この成都にもたくさんいましょう」
成都にきたのは、そのような女たちを救うためだった。

「この婆などは容姿も才学も何の取柄もなしで、こうして長生きをし、ほん」と申し訳ないことです」

「おまえは大したものだ。何でもできる。私などは老いて、駄目になるばかりだ」

「立派なお仕事をなさっているではありませんか」

「何が立派なものか。春琴には叱られるしかない」

「そのうちよいときが必ずきましよう」

「そうだろうか。よいときは昔にしかないのではないかい。とりわけ老人には。このような世の中だ、石濼さまもそのようにおっしゃっていた」

「琴の名手の石濼さまですか」

「華州の齊雲楼での新年の宴で御一緒してから何年ぶりであつたらうか、石濼さまもこちらに流寓され、さる將軍のお屋敷でお会いました。將軍に請われて奏かれた琴の音の懐かしさに思わず涙がこぼれそうになつたのだが、客人たちはろくに聞こうともせず、当の將軍も盃を巡らせて大声で話をする始末だつた。喧騒の中で、石濼さまはもの寂しげに最後まで奏いておられた。あまりにお気の毒な有様に慰めを申し上げると、『いつものことです。私のような死に損ないは、昔のよき日々を思うだけです。聞いていただけぬとわかつておりまして、この勇ましい方々にすがらねば今夜の宿にも困りますので』とおっしゃられた」

「都から流れてきた妓女も同じでしょう。それでも、成都がありますお蔭で、

石濼さまにしても、妓女にしても、この婆にしても、生きていられるのですよ」

「おまえの言う通りだな」

「もしかしたらいつかよい日があると、思っていた方がどうせならよろしいのではありませんか」

「せめて悪くならずにあってほしいものだ」

それを潮に立ち上がり、杜甫に希望を与えた海棠の花を間近に見るべく庭へと出る。林婆さんは掃き集めた落ち葉を捨てに畑に行く。

海棠を手にとって眺め、湿った地面を踏んで木立の下へと入り、小径を辿って小さな池に出る。池はこの屋敷に元からあったもので、形は違うが狐潭に擬して、岸边にお狐さまの祠を置き、安邑坊から運んだお狐さまの像を収めた。

池の縁を歩んでいくと、祠の前に人がいる。水面に垂れる枝の向こうの立ち姿は、斑に注ぐ光が揺れて見定め難いが、屋敷では見かけぬもののようにだ。

よもや返魂の術によって春琴が現れたのでもあるまいと、足を止めて窺うと、こちらに振り返り、杖を持ち替え、笠の縁を持ち上げる身なりは尼僧である。

「御壮健でございましたか」

歩み寄ってきて発する声に驚き、笠の下の顔を己は確かによく知っている。「どうしてこれに」

声を出したつもりが、喉が低く鳴るだけだ。

父の前に彩霞が立つ。

「しばらくぶりでございます。先ほど、庭より覗きましたら、何か熱心にお話をされている御様子でしたので、お邪魔をしてはと、こちらあたりを歩いておりました。あれはやはりお狐さまをお祀りされているのでしょうか」
これまで知っている彩霞とは随分と違う。十年の歳月が間にあり、尼僧となった娘を初めて見た。変わっていて当然だ。それにしても穏やかな顔であり声である。

「どうしてここに」

「鄭さんに案内していただきました」

「鄭郎はどこにいったのかい」

「どうして出し抜けに娘とここで会うようになったのか。」

「驚かれましたか」

「そうだな」

「昨日、成都に着いたばかりです」

「ああ、そうなのかい」

「お元氣そうで何よりです」

彩霞は微笑む。母に似るとかつて嫌っていたのと異なる娘の眼差しにかえつてとまどいを覚える。

「どうにかまだ生きている」

「叔父上も、叔母上もお変わりありませんでしょうか」

「ああ、綜のところについてこの前、孫が生まれ、二人とも喜んでる」

「綜ちゃんも、とうとう父親ですか。ならば、釣はもうやっていないの
でしょうね」

「いやそれは別のようだ」

娘の前で初めてわずかに笑う。

「淑娥ちゃんも元気でした。あちらでは二人目が間もなく生まれるところ
です」

「淑娥に会ったのかい」

「荊州に寄って参りましたので」

「そうなのかい。藹たちに聞かせてやったら喜ぶだろう。あちらでは戦が始
まるらしいと、大層心配している」

娘とこのようにしていることに違和感があり、彩霞が言うのに反応して言
葉を発してはいるが、己自身が話しているような気がしない。

「李の皆さま方は町から離れた場所にあつて、戦の心配は余りなさっていま
せんでした」

「そうなのかい」

うなずき、さてどうしたものかと、とりあえず彩霞の前に立って、屋敷の内へと戻る。

娘がどうしてここにいいのか依然としてわかっていない。昨日成都に着き、鄭郎が中に入れたと言うのだから、ここに彩霞がいる段取りとしてはそうだったのだろう。しかし、なぜ娘が父に会いにきたのか不可解である。

淑娥が嫁にいった荊州では大きな戦が始まろうとしている。かつて華州を復興させた韓建と荊州を甦らせた郭禹は北韓南郭と並び称された。韓建は朱全忠に屈し、郭禹はその後、成汭（せい ぜい）と名を改めたが、朱全忠と手を結んだ周辺勢力に呑み込まれまいと、起死回生の決戦に撃って出ようとしている。和舟載、齊山、截海、劈浪と名付けた巨艦を建造し、長江を下る大遠征を企てているのである。

娘を部屋に導き入れ、

「もしかして貫休さまも御一緒なのかい」

彩霞が成都にきた理由として考えられるのはそれくらいしかない。

「荊州まで御一緒でした。いまごろは湖州から南の地を巡っておられましよう」

「お変わらないのかい」

「婺州をお出になつてから、驚くほどにお元気になりました。父上が御存知のころとは見違えるばかりでしょう。以前は歩くのも御不自由なくらいに太っておられましたから。このような具合に」

大儀そうに体を揺する貫休の仕草を真似る。このような陽気な娘をこれまで見たことがない。彩霞は笑うが、韋莊のとまどいは大きくなる。

「それは何かい、お瘦せになつたのかい」

「それはもう大変な変わりようです。真黒に日焼けして、野山を自由に歩いておられます。とにかくお元気なのは結構なのですが、勢い余つてと申しませうか、成納さまと大喧嘩をされました」

「そうなのかい。婺州を出られたのは、錢鏐さまと喧嘩別れをしたためだそ

うではないか」

「貫休さまには天下に怖いものなどないのでしよう。成納さまは、貫休さましか御存知ない書法を教えてほしいとお頼みになりました、何でもその頼み方が無礼であったとかで、貫休さまがお怒りになりました、些細なことで怒鳴るとは傲慢な坊主だと、成納さまがかんかんになり、荊州から出ていけ、出ていくともと、売り言葉に買い言葉の大騒動でして、そんなこんなで私とはひとまず南と西にお別れしたのです」

彩霞は笑いながら言う。

これもよくわからぬ話に、

「子どもの喧嘩ようではないかい」

にこりともせずと言う。

「それが貫休さまはなさり方なのでしよう。成納さまも取るに足りぬとお見限りになったようです」

「そうなのかい」

「そのうち王建さまを御覧になるためにこの成都にもいらっしやいましょう」

「そうなのかい」

同じ相槌を打ちつつ、蟻光禪師が貫休と成都で会うことになろうと言ったのを思い起こす。

「貫休さまのことですから、ここでもやはり騒動を起こされることでしょう。そうなれば、父上にも大変なとばっちりが及ぶかも知れません」

「私にもかい」

「ええ、王建さまが大怒なさったら、どうされますか」

「私も怒られるのかい」

「勿論ですとも。貫休さまのふるいお馴染みなのでから」

「ならば、貫休さまとともに成都を出ていこうか」

そう口にするると、一瞬だけだが、胸が急に軽くなる。成都にきて以来の諸々も全て消えてしまっただろうか。

庭の海棠に目を向ける。

曉看紅濕処　　明日の朝、紅色に湿る処を看るだろう

花重錦官城　　錦官城を覆う重い花々を。

一つの希望がそこにあるだろう。

「父上にそれができましようか」

その声に彩霞を見ると、娘は昔通りの眼差しで父を見ている。

娘の視線を避けて首をかしげる。娘は父の動きを追って碁盤に目を遣り、

「どなたかお相手がいらしたのですか」

我に返って、

「いや、徒然の慰めに一人で並べていた」

ふっと息を漏らす。

「お一人ですか。随分と難しい局面ではありませんか」

「碁がわかるのかい」

「貫休さまに教わりました。白黒並べるぐらいのことしかできないのですが」

娘が話を變えてくれたのに乗って、

「次は白なのだが、どこに置いたらよいと思うかい」

と、尋ねる。

彩霞は碁盤の正面に座り直して考え始める。

韋荘は立ち、窓の外に戻ってきた林婆さんに茶でも持ってくるよう頼む。

「ここでは、どうでしょうか」

それは秀の注解にあった場所だ。娘の棋力は白黒並べるどころではないよ
うだ。

「それで白が勝てそうかい」

「なかなか難しいでしょう」

「ここではいけないのかい」

元来の棋譜にあった場所を指で示す。

「確かに、どちらがよいか迷うところですが、それも難しいと思います」

「それでは、ここではどうかい」

自分ならと思っていた所を示す。

自分一人では無理だと思っていた莠の注解の理解が、思いがけず彩霞によって可能になるのかも知れない。

「そこが父上のお好みでしょうか」

「まあ、そうだが」

碁盤に目を凝らす娘の顔を見る。

彩霞のことを己は知らぬが、なぜか娘は父を見通している。

「それでどうなるか、試しに私が黒を持ってみましょうか」

「碁の相手をしてくれるのかい」

娘に測られるような気持ちで交互に石を並べる。

始めのうちは予想していた通りに進み、しばらくして彩霞は考えてもいなかったところに置く。

「成程、こうなるとすると、あれがそもそも悪かった訳になるのか」

「父上のお好みではありませんか」

「私の好みかわかるのかい」

「父上は変わりませんから」

「そうなのかい」

やはり娘に測られたのか。それなら父の全てを見てくれてよい。

「ええ、ずっと昔から同じです」

「この齢になって変わらないと見てくれるのなら、まだしもと思うべきかも知れないな。何しろ齢を取って一段とへぼになった。世の中には、老齢に及んで円熟の境地に達する者もあるが、私などは遠いものだ」

娘に甘えるようにして言うと、

「そうでしょか」

彩霞は厳しい目付きに戻る。

「大器晩成と言うが、その逆もあるのだろう。莠くんには早見えの碁だと言われ続けた。安易に勝ちを得ようとして、最後はすっかり失ってしまう。私がおむのは所詮はそのような手なのだろう」

「貫休さまに伺いましたところでは、達人の碁は、打ち初めはごく弱そうに

見えるものだそうです。凡庸そうな手ばかりが続くので、これなら軽く勝てそうだと相手は思います。ところが、あるところで気づくと、盤面全体において達人が完璧な勝ちを収めていて、どうすることもできないのです。達人の碁は晩成の人の一生に似ると言う話です」

「やはり私は晩成から程遠い一生なのか」

力なく笑うところに、林婆さんが茶を持って入ってくる。

彩霞が林婆さんと会うのはこれが初めてで、こもこも挨拶をするうちに、話は自然と春琴の最期のころへと及ぶ。

韋荘は何も言わず、林婆さんの多弁に任せる。

もしも返魂の術によって春琴がここに帰ってきたならば、彩霞に何を告げるだろうか。揚州の酒楼の窓の下で、韋荘がどのような男であるか見るようにと言ったことに、春琴はどのような答えを得たと言うだろうか。

「そのときの琴はいまありませんか」

己に向けられた彩霞の声に我に返り、

「琴か。あれは手放さず、ここに持ってきた」

「見せていただけますか」

林婆さんを取りにいかせる。

娘と二人になり、林婆さんが話していた間に思っていたことを言ってみようとする。

「よかつたら、一つだけでも教えてくれないか」

父は遠慮がちだ。

彩霞はどうしてここにいるのか依然として理解できていない。もしも彩霞がいまままでの娘とは異なるのなら尋ねたいことは多くある。しかし、あまりに性急すぎると、娘はこれまで通り何も言ってくれなくなるような気がする。

「何でしょうか」

娘の柔らかない返事に勇気を得て、

「婺州から都にいき、一回目の試験で落第した。死ぬような気持ちで平康坊

を訪ねた。春琴が『秦婦吟』を吟じてくれた。それがなければ立ち直れなかった。どうしてそなたは春琴にそうするように言ったのかい」

「それでしたら何でもありません。父上が万一不合格になれば、必ず平康坊いかれると思っただけのことですから」

「私がことをすっかりわかっていたのかい」

「誰にでもわかることです」

「『秦婦吟』を聞いて私がどうしたか、それは春琴から聞いたのかい」

「尼寺にきてくれたとき」

「それは思った通りだったのかい」

彩霞の顔が厳しくなり、

「お尋ねはお一つだけではありませんでしたか」

低く言う。

父と娘はまだ多くを語れない。

理由はわかっている。彩霞の母のことを考えていないからだ。

林婆さんが琴を床に据える。彩霞は慈しむかのようにそれを撫で、

「あの子がこれを奏していたのですか」

弦の上に指を滑らせる。

緩められたままだった弦を張り直し、一本ずつ音を調整していく。

「一曲、奏いてもみてもよろしいでしょうか」

「ああ、好きにしてくれ」

彩霞は琴の前でしばし瞑目し、

「曲目は私が選んでも構いませんでしょうか」

「それも好きにしてくれてよい」

彩霞は息を整え、弦の上に手を置く。その手から音が生まれる。春琴に琴を教えたのは彩霞だ。春琴の音を聞くかのようだ。

耳に馴染んだ曲。長安は平康坊、揚州は九里三十歩街で聞きもし歌いもした『木蘭花』。尼僧には似つかわしくない曲に、華やかなりし色街の情景が浮かんでくる。

彩霞は一度奏き終わると、そのまま琴を見つめ、

「歌つてもよろしいでしょうか」

「そなたが聞かせてくれるのかい」

彩霞はしばらく間を置いてから、先ほどもよりもゆったりとした調子で『木蘭花』を奏き始める。

独上小楼春欲暮

この春の終わり、ぽつんねんと楼閣に立ち

愁望玉関芳草路

玉門関に続く草原の道へと愁いが馳せる。

消息断

来るべき消息は断たれ

不逢人

会えるはずの人はいない。

却斂細眉帰繡戸

何も見せてくれなかった目を閉じ部屋に戻る。

別離の詞だ。

彩霞は手を止め、

「父上、この後を続けてはいただけませんかでしょうか」

「私がかい」

「父上なら少しも難しいことではありませんでしょう」

「いまのは、そなたがいまここで作ったのかい」

「変だったでしょうか」

「いや、みごとだ。とても後を続けられそうにないくらいにみごとだ」

「いま一度同じように歌いますから、それに続けていただけますか」

「わかった、そうしよう」

彩霞はなぜこの曲を選び、どうして別離の詞なのか、その意図を探るよりも、娘の詞の後を続けられることに気持ちちが昂ぶる。

曲が流れ出すと、その昂りさえも忘れ、『木蘭花』が生み出す世界へと入っていく。

玉門関は西方世界との境。大唐の盛時に玉門関は大きく開かれ、西方の人も唐の人も自由に往来していた。いまは、そこが鎖されているのか、開かれているのか、定かでない。

後半が始まる。声を出す。歌うのは久しぶりで、喉の奥に絡まるようだが、

言葉は淀みなく溢れてくる。

坐看落花空嘆息

空しく溜め息が出るのは花の落ちたためか

羅袂湿斑紅淚滴

襟が濡れているのは涙が落ちたからか。

千山万水不曾行

千の山、万の川を越えては行けぬ私

魂夢欲教何所覓

夢をさまよう魂に、どこで何を求めさせたらいのか。

体が震えている。

なぜなのか。悲しみを歌う詞だからか。己のこの一生は魂が見た夢であったのか。

音が止み、父と娘は無言で向き合う。このようなときが己にあるとは思っていないかった。だからなのか。

鄭郎の声が戸外に響く。

琴の余韻から現実に戻る。

王建からの急の使いだ。修好使の命が己に下るのだ。

「しばらくは成都にいるのかい」

立ち上がりつつ、彩霞に問う。

「そうなりましょう。隻念さまとともに、貫休さまのお越しをお待ちするつもりですから」

「そうかい。ならば、また会ってくれるかい」

彩霞ともう一度歌うことがあるだろうか。

彩霞は琴の前に座したまま、確かな返事を得ずに部屋を出る。

修好使の任を全うできたならば彩霞とまた話せるだろう。まずはこの任を果たさなければならぬ。

朝からの迷いは払拭され心が定まる。

成都の不幸な女たちのためにも朱全忠のところに行く。成都のこの平穩を守らなければならない。皇帝のためになるかならぬかはわからぬが、成都にきた目的はここにあったと思いたい。

部屋の外に立つ鄭郎に、

「藹くんはどうしているのかい。彩霞がきているのを知らせたのかい」

「あいにくと、あちらはお客さまがいらしてまして、奥さまも離れることができない御様子です」

「ああ、そうか、そう言えばそうだった」

藹の書は成都でも評判になり、このごろは方々から依頼がくる。藹は接客が不得手であるから陸氏が概ね対応している。

朱全忠のところへすぐに発つようになるだろう。それでよい。綜には会わずにいこう。葉公子の苦しみをなぜ我が身に引き受けるのかと、綜は止めるだろう。綜の思いは良くわかる。だから会わずにおきたい。

使者の任を為し終えて帰ってきたときに、新しい己がそこから始まるかも知れない。いまの震えはその予兆だったのか。

そうなるためには、彩霞と多くを話せるように、彩霞の母について考えなければならぬ。汴州の往復の間にそれを為さねばならぬ。それを終えて成都に帰ってくるのだ。

修好の任は果たせるのか。腸を焦がす苦しみだ。

隻念がきていると彩霞が言っていた。隻念がいるのなら、あるいは成るやも知れぬ。

その思い付きに、児戯に等しいと苦笑する。それでも運を託すのはそれ以外にないだろう。成都の民のためであり、己のためだ。

その年の四月。

成都にはない豪壮な建物。見上げれば、遥かな天井は小暗く沈む夕暮れ空のようであり、左右に目を向ければ、遠方において壁は闇を画し、その前を太い柱が巡って兵士が一人ずつ脇に置物のように立っている。

先ほど昇ってきた階に通じる扉だけが細く開かれ、わずかな光が差し込んできている。前方には深まりゆく暗がりがあり、初めは真の闇と見えていた奥にも、目が慣れるにつれ、星のような小さな点が幾つも存在するのが知れ

た。微かな光を捉える宝玉であろう。それらは巨大な王座の輪郭を縁取つていよう。その座におさまるべき人物、梁王、すなわち朱全忠を待っている。

ここに案内されたのは日の出からさほど経っていないころ。稀に流れくる風がいまではひどく生暖かく感じられ、すでに昼を過ぎたろう。夏の陽光から遮断されたこの場所で、隻念と二人で時を知ることでもできぬままに置かれている。修好使が歓迎されざる客であることのさらなる証だ。

汴州に着いた最初から粗略な扱いをされた。導かれた宿舎は恐ろしくお粗末で、韋荘と隻念はどうか人並みの寢床を得たものの、鄭郎や従者たちは馬とともに休まなければならなかった。食事の用意はなく、抗議すると役人はただ横柄な態度を示すだけで何もしてくれず、仕方なく翌日は町の旅籠屋に移った。不愉快にさせるのが仕事であると心得ているような役人を相手に交渉を重ね、鄭郎が誰彼構わずに届け物をし、どうにかこうにか幕客として韋荘と同等の立場にある李振に会えたのは、半月余り経つてからだ。それからまた半月を経て、ようやくここに案内されるまでに辿り着いた。これ

までの苦勞を思えば、ここで半日待つくらいは何でもない。今日が無駄に終わっても、明日も明後日もまたくれればよい。

朱全忠に仕える文官の筆頭は李振と敬翔（けい しょう）である。二人とも貢挙の落第者だ。李振は朝廷との折衝など外向きの仕事を、敬翔は官僚組織を束ねる内向きの仕事をしている。韋莊がまだ唐の朝廷にいたころにも、李振は都にきては辣腕を振るっていた。今回初めてその顔を見て、想像通りだった。こうでなければ朱全忠には仕えられまいと納得しつつ、この李振に誘われた従弟の慍がいかなることになっているのか思いやられた。韓建のもとを去って朱全忠のところに行ったはずの慍について、李振は一言も言わない。それとなく鄭郎に探らせても慍の様子は全くわからない。

朱全忠が常の人ではないことは、揚州において若き日の姿を見たし、世の評判で聞くところであり、李振を見てもいよいよわかった。外見のみで決め付けるべきではないにしても、李振は上に諂い下に苛烈な男だ。李振は巧みに泳いできたのだろうか、朱全忠の怒りに触れて身を喪った者は数知れない。

長男さえも殺されかけた。ある戦いで敵を最後まで追い詰めず、完全な勝利を得損なつた。朱全忠は激怒し、長男は殺されるに違いないと、山中に逃げた。救つたのは母だった。朱全忠が唯一頭の上がらぬ相手が妻だ。貧乏学者の倅だった朱全忠は、村の有力者の娘だった妻の尻に敷かれ、それで家を出て放浪していたほどだ。長男は母のお蔭で助かったものの、このときに味わつた恐怖がもとで精神に異常を来たした。

人の意を汲むのを得意とする韋莊も李振には閉口した。恐ろしくへりくだつた態度で、「進士どの」「進士どの」と李振は呼び掛けてくる。蔑みと敵意がないませの声で、「昔のままに悠久の時を刻む錦官城からのお客さまですから、ゆつたりと心永くお過ごこしいただきましようか」などと、のらりくらりと埒の明かないことばかりを言う。憤慨して交渉を打ち切つたりすれば相手の思う壺だ。修好は向こうの求めるところではなく、王建の望みなのだ。錦官城の名の由来する蜀の特産の錦繡を李振にたつぷり贈り、機嫌取りに徹した。

敬翔もなかなかの男で、常に苦虫を潰したような顔で、取り付く島もない。貴様などと会っている暇はないと言わんばかりの態度で、話の接ぎようがない。それでも李振に比べればまだしもで、重い口を開いてくれれば、それなりのことはあり、敬翔と接触できるようになって、ようやく朱全忠に会える見通しが立った。

揚州の裸男は、「天下にはいくらでも人間がいて取替えがいくらでもきく。俺さまの役に立たない奴は殺す。それが一番面倒がない」と嘯いていた。その通りではないにしても、それに近いことをしているのだろう。李振や敬翔を見ればわかる。李克用も李茂貞も韓建も圧倒し、朱全忠はいまや傲慢不遜を極めている。

不思議なのは、汴州の町で聞く朱全忠の評判が少しく異なることだ。梁王を、少々度の過ぎた悪戯をする悪餓鬼か何かのように見えて、粗暴さにむしろ親愛の念を抱いてさえいるようだ。

汴州は活気漲る町だ。かつて大相国寺で初めて貫休に会い、幾度か汴州に

はきていた。昔の汴州といまは何もかも違っている。かつての汴州よりも何倍にも大きく膨らみ、それでもまだ狭すぎるとばかりに人が溢れて渦を成している。長安は碁盤の目のように東西南北に整然と街路が走り、それによって区切られた各坊が高い壁で囲まれていた。汴州の道は、自在に曲がり、自在に交わり、坊を区切る壁は存在しない。朝夕の太鼓は鳴らず、夜間も自由に通行できる。官署と市と住宅と寺社がそこで混在し、何もかもが雑然とし、いつも澁刺としている。重く威厳に満ちた長安や、静謐で奥深い成都に比べ、汴州の猥雑な有様は、常の人ではない朱全忠でなければ生まれ得なかったものだろう。

汴州は力強く昇る夏の太陽に似ようか。成都は静かに落ちゆく秋の夕陽だろう。成都には昔の唐がそのままに残り、汴州には唐の昔はほとんど存在しない。成都を懐かしく思う者は、汴州では穏やかにしていられない。二つの町の相違は王建と朱全忠の違いを反映し、遠く隔たつてこそ二人は並び立てるのだろう。近しく修好を結び合えるものではあるまい。

覚悟はできている。汴州に囚われの身になろうとも、あるいは殺されようとも、修好使としての責務を果たすべく努めるだけだ。腹が据われれば、腸が焦げるばかりの葉公子の苦しみはない。修好の成否に蜀の民の命運がかかっている。人々の小さな幸せのためにと願っていたのはこの仕事だったに違いない。我が為すべきときがここにきた。兇戯に等しき手段であっても、問うべきは、事が成るか成らぬかだけだ。成都の平安を守る。成都が守れば漢州も守れる。漢州のあのように昔のままでなければならぬ。たとえ赤虎亭がそこになくともだ。

かく心を決した己であれば、この姿を春琴に見せられようか。一点の恥じらいがある。

春琴は死の床にあつて、全ての武器をなくすことに思いを巡らせていた。己は一時の弥縫策のために身を駆ってここに至った。目の前の戦を避けるのは成都の民のためになる。しかし、根源を求めての策ではない。元来は天下は唐朝のもとに一つであった。早く正しい姿に戻し、武器など要らぬ世にす

ることをこそ考えなければならぬ。この修好は天下の分裂をそのままにしておくものだ。

虫の羽音が耳をかすめる。沐州はすっかり真夏だ。かつて衢州の不出院で禅の修業の真似事をしたのも夏だった。そこで心を強くし、春琴と綜に貢奉を受ける決意を告げた。そのときに習った不動心を、ここで待つ間に得ようとする、返って雑念が去来する。

貢奉に合格し、皇帝の前に初めて出たとき、朱全忠への対抗心が急に湧き出てきた。いま朱全忠と張り合うのは無理だ。あの王座に朱全忠が現れば、己の命をどうしようと相手の勝手だ。何にしても己は無力で、例によって早見えの手を用意してきただけだ。それがあるから腹が据わっている。己の為し得るただ一つの手だ。それは、春琴が理想と仰いだ平陽公主が選ぶような手ではない。

ふっと嘆息する。

今日はおそらくするとこのまま待ち続けて終わるのだろうか。あるいは、そ

れが望ましく思えてくる。早見えの手を打たずにすみ、囚われの身になることも、殺されることも、取りあえず今日はないことになる。今夜は宿に帰って眠れる訳だ。もうしばらく時が過ぎれば、望もうが望むまいが、今日はそうなるだろう。

情けない考えだ。

隻念は一切の気配を立てずに後ろに座している。禅僧として長く修行を積んできた隻念のことだ、無我の境地に入っているのだろう。朱全忠がくれば全ては隻念にかかっている。無茶な頼みを聞いてくれた。己がいくらかでもましな生き方をしていたならば、このようなことは頼まずにすんだであろう。己を厭う気持ちのために、張り詰めていたものが緩んでならぬと、雑多な感情を身の外へ押し出そうとする。

不意に空気が変わる。体の表面がぼっと熱くなる。外から暑い風が入ってきたのか。背筋には冷たい感触が生まれている。

遠く太鼓が響く。身がこわばり、目だけを左右に動かす。柱の脇に立つ兵

士の影がゆらりと動く。

再びの静寂。それは長く続かない。低いざわめきが聞こえる。近づきくる足音であるようだ。

俄に光に包まれる。殿内の無数の灯が一斉にともる。壇上の王座を飾る金銀宝玉が眩い輝きを得る。全ての扉が開け放たれる。一気に射し込む光の氾濫に思わず目を閉じる。

静謐の声。頭を低くする。壇上へと入ってくる人の気配。それが一旦静まると、王建の掌書記である韋荘がここに控え居ると、よく通る声が告げる。一段と頭を下げる。

「前へと進むのだ」

頭を垂れたまま中腰で数歩ばかり出る。止まれの合図に、拝礼し、身を伏せる。

「何用があつてここに参つたか」

太い声だ。これは揚州で観衆を笑わせたあの裸男の声か。

再び拝し、腹ばいになるまで身を伏せる。

「即答せよ。まわりくどいのはわしを苛つかせる」

怒気を含んだ声に、揚州の裸男と共通する抑揚を認める。

わずかに顔を上げ、

「大王さまに差し上げたき物があり、千里の道も遠しとせず、成都より持参いたしました。でございます」

「ほほう、何であるか」

「後ろに控え居ります者の前にございます」

朱全忠は身をわずかに乗り出し、

「あの包みか。蜀の地図であるのか」

地図を差し出すとは領土を献上する意味である。

「よろしければ、御前に御披露申し上げたく存じます」

「まわりくどいのは嫌いだと言っただろう。見せるがよい」

「では、早速ながら」

身を低くしたまま腕を回し、隻念に進み出るよう合図を送る。隻念は拝礼し、床に這いつくばったまま肩で包みを前へと滑らせつつ進み出る。

「ああ待て待て。それはまことに古い趣向であるな。わしには通用せぬぞ。秦の始皇帝なんぞと異なり、わしは戦場を駆け巡ってきた男だ。一太刀浴びせようとは無理な願い。止めろ止めろ」

朱全忠は高らかに笑う。

揚州の橋のたもとで聞いたのと間違ひなく同じ声だ。今日は陽気のようだ。ならば事は成りそうだ。

「大王さまに申し上げます。この者は御覽の通りの僧にございまして、もとより殺生などは致さぬ者、かの荆軻(けい)かのような剣客ではございせん」
荆軻は燕の太子が秦の始皇帝に差し向けた刺客。燕の地図を献上すると偽って始皇帝に近づき、地図の最後に巻き込んであった匕首で刺そうとした。

「坊主か。用無しどもだ」

「それにこの者、たとえ七首を握ろうと思ひまして、金輪際できないのであります」

隻念は袖口から手首の先のない両腕を差し出す。

「成ほど。手が三つ四つあったところで、わしを刺すのは、その痩せ坊主にはできない。坊主などを連れて参つたのは、説法でも聞かせるつもりか。わしは他人の話は聞かぬと決めている」

「御覧に入れたき物があるだけにございます」

「勿体ぶらずにさつさと見せよ」

「大王さまのお目をいささかでもお喜ばせ申すことができましたならば、蜀から参つた甲斐があつたと申すもの、我らの面目も立ちましよう」

床を滑つて隻念の脇へと進み、包みをほどく。中から出てきたのは、一つの巻物、幾枚かの板切れ、筆と硯。

隻念は立ち上がり、

「まことに御無礼ながら、この窮屈な法衣、取らせていただきます」

襟より腕を出し、もろ肌脱ぎになる。韋荘が後ろより裾を括り上げ、足もむき出しにする。

朱全忠は髯を揉みながらにやにやと見ている。韋荘は気を強くする。

隻念は左右を見回し、

「さてさて、お立会いの皆さま方、これより我が拙き芸を御披露申し上げます、するほどに、ゆるりと御覧くださりませ。本日は汴州に参りましての初興行、特別に御代は不要とさせて頂きたくまいしう。御用とお急ぎでなければ、決して損をおかけすることはございません」

朱全忠は王座を軽く叩き、

「何の芸かは知らぬが、気に入れば、褒美は惜しまぬぞ」

「有難きお言葉。それに勇気づけられまして、早速御披露と及ぶところではございますが、その前に、少しばかりの用意をいたしますほどに、ここに控えております不器用な進士閣下に役目を仰せつけますこと、しばしの御猶予をお許し願います」

朱全忠がうなずくのを待つて、隻念は顎で韋莊に命じる。韋莊は隻念の後ろに床机を据え、その脇で墨を摺る。

「御覽の通り、まことに動作の鈍い進士閣下でありまして、愚僧もこやつには往生致しております。生まれてこの方、貢挙の勉強以外にしたものがなく、五十九歳になつてやつと合格をした稀代ののろまにございます。何をさせてもこの通り、たつたわずかの墨に日の暮れるまでかかるような有様、ほらほら早く摺り終わらぬか、せつかくお集まりいただいたお客様方が待ち遠しくて帰つてしまわれるぞ」

隻念は床を踏み鳴らす。

「まあそう叱るものでない。五経博士とか呼ばれたわしの父も、頭を振れば真四角な文字がこぼれるほどで、しかし、薪の一本も割れぬ不器用者であつた。気長に待つてつかわずぞ」

朱全忠は笑いを含んだ声で言う。

「有難きお言葉にございます」

隻念は大袈裟な仕草で礼を言い、韋莊もことさらに額の汗を拭って墨を摺りおさめる。

「さてさて、お立会いの皆さま方、墨もたつぷり摺り上がりしましたほどに、これより御披露申し上げますは、かつて絳紗灯の眩さで天下に知られましたるかの九里三十歩街、唐土の灯の三分の二を集めると言われました揚州におきまして、知らぬ者なき名高き絵師と申しますれば、よもやお忘れの方には頭を二度二度と振って思い出していたきたたく、初めてのお方は耳の穴をほじってお聞きいただきたく、かように手はございませぬが、千の手、万の手よりも、優れましたる画の達人、何を隠しましょうこの某、三十年前に変らぬ妙技をひっさげまして、その名も轟くこの孫何、磨き上げてのこの芸を今日只今ここに御披露も申し上げますほどに、とつくと御照覧ありましよう」

床を大きく踏み鳴らし、どうと尻餅をついて両足を斜めに高く上げ、「大王さまに足に向け、何と御無礼なお咎めは御容赦願いまししょう。孫何

と申さばかくなる姿でなければならぬのは、大王さまが先刻御承知のことです
「ございまする」

朱全忠は手を打ち、

「思い出したぞ、思い出したぞ。おまえは揚州の手なしの絵描きだ。懐かしい
ではないか。あれから堅固でおったのか」

隻念は足の間から頭を出し、

「有難きことにいまも画をかように描いておりまする」

「成都は、どうだ、儲かっておるか」

「いやはや、それがとんとあてがはずれまして、昔の揚州のようにはとても
参りません。何しろ成都なんぞと申す所は、深い山のそのまた奥にある小さな
田舎町。住んでおります人間なんぞも鄙びたしみつたれ揃い、昔の揚州の
ような豪気な商売人は一人もおりませんで、大道でかように芸を披露しまし
ても、御祝儀を下さる方は稀で、たまにいても、たった一枚の銭を惜しみ惜
しみ出してくるような始末、それでは到底おまんまが戴けませんので、仕方

なく、かくも法衣を着て贗坊主に成りすまし、いかさまな念仏を覚えて、かつかつの暮らしをしている次第にございます」

「揚州は愉快な町であった。あのころおまえはまだ子どもだった。道でひと声かければ、すぐに大勢の太っ腹な客が集まっただろう」

「生涯で一番の稼ぎどきでございました」

「どうだ、この汴州は、あのころの揚州に負けぬくらい賑やかだとは思わぬか」

「今日のこの場は某の晴れのお披露目。これを汴州における稼ぎ初めとして、ひと財産をこしらえて、後は安楽に暮らしたいものと願っております」

「気に入れば、祝儀は望みのままだ」

「では、早速に御披露に及びましょう。さあさあ皆さま方、いかなるお題でもお好みのまま、何なりとお申し付けくださいませ。この孫何がたちどころに描いてみせましょうほどに、御一同さまいかがでございますようか」

韋荘はすすると進み、隻念の足の指の間に筆と板を挟み込む。

「わしから所望しようか」

「大王さま御自らとは有難き幸せ。大王さまのお題で画を描かせていただきますれば、もう鼻高々でございまする」

朱全忠は顎を突き出し、身を揺らしながら考え、

「ならば、この題ではどうか。『朱三、節度使となつて村に帰り、母にまみゆる図』」

朱三とは朱家の三男である朱全忠その人だ。

「これはこれはまことにお目出度き図柄。畏まりましたございます」

隻念は「うん」と大きくうなずき、一瞬の間も置かず筆に墨を湿らせ、直ちに描き始める。

「相変わらずの早業であるな」

描き終わった板を韋荘が取り、壇の下へと進む。その間に一瞥し、隻念の大胆さに驚き、ためらいを覚えるが、お付きの者の手へと渡す。

案の定、朱全忠は渋い顔。画を隻念に向け、

「ここに立つ姫が母上であるのか」

「左様にございます」

「出世した息子が帰ってきたのに喜んでおらぬではないか。これは憂いの顔か」

「御覧の通りにございます」

「何故だ。返答如何によつては許さぬぞ」

隻念は平然と、

「それは御母堂さまの御心情をそのままに画にしたものにございます。大王さまの御尊父さまは五経博士と村人から敬われておられたお方。お家は貧乏でございまして、御尊父さまの御高德に村の人々は感化され、乱れ世にも拘わらず、大王さまの故郷ばかりは平穩であつたと伺つております。御母堂さまにおかれましては、五経博士の御子が位高くなられてお帰りになりました。御徳の慕われ方におきまして、御尊父さまに遙か遠く及ばないのを憂いておられるのでございます」

朱全忠は黙然とうなずく。韋莊の背に冷や汗が流れる。

朱全忠は破顔一笑、

「そちはどこかで見ておったのか。母上はまことにこの通りの顔であった。母とはいつまでも息子を心配するものだ。母上にこの画を御覧に入れたならば、そちがいま言った通りのことをおっしゃるであろう。大いに気に入った」

「有難きお言葉に存じます」

隻念は床机より下りて朱全忠を拝する。

「大王さまの御機嫌の麗しさに乗じまして、この一卷の軸も御覧いただきました。存じます」

「見てつかわずぞ」

韋莊が運び、朱全忠の足元に巻物が広げられる。

またしても大笑し、

「これがまだあったか。あの日、久しぶりの酒に酩酊し、筆が揺れてしまったが、ここに大皇帝朱温とあるは、まさしくわしが記したものだ。よくぞい

ままで残っておった」

「あの折の板を薄く削り一卷の軸に仕立ててお持ちした次第にございます」
韋荘が説明する。

「どうだ、この画と比べて、わしは立派になっておるか」

「いまでも拙き某の筆、昔の画はいま見てお恥ずかしい限りでございます、
ただいまの大王さまのお姿に遠く及ばぬのは如何ともしようがございません」

「あのころは、わしがこのようになろうとは、わし一人を除いて誰も思っておらなかつた。そちが描けなかつたのも無理はあるまい」

朱全忠の悦に入つた様を見て韋荘は、

「この孫何がその画を描きました折、脇におりました者を、大王さまは御記憶ではございませんでしょうか」

「揚州のどこぞの酒楼で馳走になった。ひどい空っ腹のところをいきなり呑んで腹痛を起こし、薬をもらったのではなかつたか」

「よく思い出してくださいました。この上なき幸せに存じます」

「そのときの医者かおまえが」

「あれは我が従弟でございました。従弟の隣に一人、貢奉の落第生がおりましたのがこの私めでございます」

「落第生か。いたような気もする」

昔を懐かしむ朱全忠の顔に、

「あの折に大王さまがお約束してくださいましたこと、それも覚えていらっしやいますでしょうか」

「わしの約束か。わしは言ったことは忘れない。いくら酔っていてもだ。人が申したことも決して忘れはせぬ」

朱全忠は声に凄みをきかせ、

「わしはこう言ったのだらう。皇帝になったらこの画を持ってこいと。宮廷画家だらうが、御殿医だらうが、宰相だらうが、何でも望むがままにしてやると。そうであらう」

「まこと左様にございます」

韋莊は後ろに下がってひれ伏す。

「それでここに持つて参ったのか。しかし、それはちと早過ぎたようだな。いやいや、早過ぎるより、持つて参るべきときなどあるうはずもない。わしは皇帝ではない。都におられる天子さまの忠実な僕に過ぎぬ。そうであろう。いずれその時がきましようなどと、あらぬ諂いを申しては、わしを侮蔑し、お上を蔑ろにするものであるぞ」

韋莊が身動きしないでいると、朱全忠は笑い、

「怒ってはおらぬぞ。この画を懐かしく思い、持つてきてくれたのを嬉しく思っておる。ただ、時をちと誤ったと言ったまでだ」

「お叱りを頂戴して当然の、時を弁えぬ愚か者にございます」
額を床に打ち付ける。

「謝らなくてよい」

「いえ、まことの愚か者、これでは到底足りません」

ごつんごつんと額を打ち、

「思えば、揚州におきましては、大王さまがかくも御立派になられるとは思
いも致さず、懲りもせず、貢奉に拘泥し続け、白髪頭となつてようやく進士
及第となりましたのも、やはり時勢を見る目を持たぬ故でございました。お
上にお仕えしながら、全くもつてうだつが上がらず、その日の食べるものに
も苦しみ、恥ずかしながら忠実な僕たるべき志がへし折れ、都から落ちゆき
ましたのが成都。あちらはまこと微々たる小都会ながらも、どうやら人並み
に暮らしが成り立ち、この度は大王さまの御拝謁を賜る幸せを得るに至りま
した。この歳になりまして、一生にまたとはない栄えあるこのとき、これを
逃しましてはいつ次があるうとも知れず、時分もわきまえずに画を持参致し
た次第にございます。平に御容赦くださいますようお願い申し上げます」

「見ればなかなかの歳のような。はるばるここにくるのも大儀であつ
たらう。どうだ、昔の約束もある、このまま汴州に残つてはどうか。わか
ら王建どのに頼んでやってもよい」

「有難い限りのお言葉にございます。ただ、この愚か者、しかも老いぼれま

して、大王さまのお近くに居させていただきましても何の御用も勤まりませぬ」

「従弟の医者はどうした。今日はきておらぬのか」

「あれは海を渡って日本に参り、そのままになつております」

「ほう、日本であるか。ならば、どうだ、従弟が帰ってくるのを待つて案内に立たせ、大船を並べ、日本へと攻め下つたならば愉快だとは思わぬか」

「大王さまにふさわしい壮図と存じます」

「だが、その前にだ、この中夏を一つにしておかねばならぬがな」

「それはもう間もなくのことでございますよう」

「都におられるお上のもとに世を一つに戻すのがわしの願いだ。ただな、困つたことに、邪魔立てする者が大勢いるので、安閑とはしていられぬのだ」

「大王さまの御威光に逆らう者などよもやおりますまい」

「なかなかそうはいかぬようであるな。例えばだ、そちが仕えおる王建どのはどうであるのか」

韋莊は少しばかり膝を進め、

「そのことにございます。かように申しては、蜀より参つた使者として、いささかふさわしからぬとおぼし召されるやも知れませぬが、大王さまの前では、我が心の内を一切隠さず申すのが礼と存じまして、声を潜めて申し上げるのでございますが」

と、床を滑ってさらに前に出て、

「実は、某も大王さまと心配を同じく致しておるのでございます」

「そちは何を申しているのか。王建どのは世を乱そうとお考えとおいでなのか。ならば、何故、そちをここに遣わしたのか」

「王建さまのお考えは左様ではございません。某がここに参りましたのは、王建さまの心から出たことにございますが、蜀にも御他聞に漏れず数多の小人どもがおるのでございます」

「王建どのに限って、小人どもに惑わされたりはなさるまい」

韋莊は身を起こしてことさらに嘆息し、

「大王さまに初めてお目にかかりました揚州の酒樓を懐かしく思い出します。大王さまのお言葉、いまも昨日のここのように、耳にはつきりと残っております。他人の言うことは聞かず、自分の言を全ての者に聞かせると、おっしゃられました。これこそが天下を定めるべきお方のお言葉にございます。王建さまには残念ながらその強い覚悟がないのでございます」

「そちは、汴州にまできて、そちの仕える王建どのの悪口を申すのか」

「いえいえ、決してそうではございません。大王さまに蜀の実状を正しくお知りいただこうと思っております。老い先短いこの愚か者、残り少ない命をただ安楽にしていたいと、願いと申すのはそれだけです。向こう見ずな小人どもが、不屈きなことをせぬかと、心を砕いておるのでございます」

「そちは掌書記であろう。小人どもの跳梁跋扈を抑えるのはそちの役目ではないのか」

「仰せの通りにございます。しかしながら、某は成都におきましては新参者、名ばかりの掌書記でございます。何の力もなく、下手に振る舞えば、この身

の明日が知れません」

「王建どのもまこと心もとないことであるな、そちのような者が掌書記では」
韋荘は頭を下げる。

「小人どもは、そちが修好使としてここにくることをどののように見ているのだ。さぞかし、反対したのではないか」

「奇妙に思し召されるでありますようが、某が修好使に選ばれましたのは、実は小人どもの企みに出たことでございます。小人どもの狙いとは、某がまさにこの場で首を刎ねられること。その気になれば蜀などたやすくひと捻りできる大王さまは、もとより修好をお望みではございませんでしょうから、某が修好を願い出ればお怒りを買うのは必定、それで某がなおしつこく願えば、首を刎ねられましょう。かく事態が進めば王建さまとて重大な決断を下さねばならなくなり、小人どもの期待するところへと事は成っていく訳にございませぬ」

「成ほど。蜀との一戦は勿論わしの望むところ。よい話を聞かせてもらった。

そちの首を刎ねて遣わずぞ」

朱全忠は笑いを交えて言う。

韋莊は大仰に身を縮め、

「平に御容赦願います」

「中夏を一つに戻そうとするのを邪魔する者は、お上の御為に成敗せねばならぬ。蜀を平らげるよい機会を逃しはせぬ」

「中夏は早くに一つになるべきでございます。某が思いますに、それが易々と成る時と、なお難しき時とがございます。少々の辛抱で易々と成る時があるのを待たぬのは真の智者とは申せませぬ」

「いまは待つ時と言いたいのか」

「大王さまは、昨秋、成都におきまして王宗滌が死にました事件をお聞き及びでございますでしょうか」

「ああ聞いておるぞ」

「最も武勲に優れた王宗滌が何故に死なねばならなかったのか、その訳は御

存知でありましょうか」

「讒言であろう」

「御慧眼恐れ入っております」

「王建どのも哀れであるな」

「某がここで申し上げましたこと、どうぞ大王さまのお心の内にお秘め置き願います。もしも小人どもに知れましては、成都に帰って命がございませぬ。某の望みは、残りわずかな余生を安穩に過ごすことだけでございませぬ」

「そちのような掌書記がいて、無謀な戦を望む小人どもがいて、王建どのも御苦労なことだ。よし、わかった、望みを叶えて遣す。いまの話をお聞かずとも、わしは約束を守るつもりでいた。若き日のわしの言葉を反故にする訳にはいかぬ。揚州の町でわしは笑いものにされた。わし一人だけが皇帝になるのを信じていた。だから今日のわしがある。若き日のわしを裏切りはせぬ。そちの願いは、無論、修好の使者としての役目を果たすことにあるのだろう」

「有難きお言葉にございます」

大役はこれにて成った。腹を据え、兇戯に等しきことを為した。成都の民を救った。戦はなければそれに越したことはない。悠久の計ではない。一時を糊塗するだけのものだ。しかし、己にはこれで精一杯だ。己でなければこのようなことでもできなかったに違いない。

安堵し、全身の力が抜けていく。

「この画はわしの手元に置こう。この画が存在していて、そちとの約束を違えることはない。安心するがよい。で、絵描きの孫何は何を望むのか」

「某の望みと申しましても、画を描くより他には何もございませぬ。筆と墨と紙があれば十分でございます」

「欲のない男だ。わしの屋敷にくるがよい。筆も墨も紙もたつぷりと与えようぞ」

「有難き幸せにございます」

「ついでに、屋敷の者どもにそちの妙技を披露してくれまいか」

「お望みのままにさせていただきます」

朱全忠はいかにも満足げに、

「一つ聞いてもよいか。そちは人の出す題によって画を描くのを商売としておるが、もしも自分の望むままに好きに描くとしたら、何を描きたいと思っておるのか」

隻念は首を傾けて思案し、

「いま思いますが、ここ汴州の人々の姿でありましょうか」

「ほう、汴州のか。何かそうしたい訳でもあるのか」

「人々の顔が眩しいほどに輝いておりますので」

「ほう、他の町の人間とは違うか」

「某が思いますに、汴州が思いのままに生きられる町だからなのであります。大王さまがまさにそうなさっておられます故でありましょう」

朱全忠は高らかに笑い、

「大いに気に入った。我が屋敷に、ゆっくり遊びにくるがよい。待っておるぞ」

朱全忠と隻念のやりとりを傍らで聞く間に、心の底から、我が身を厭う感情がじつとりと滲み出してきて、たちまち心全体を浸し切る。

それを抑えていたものがはずれたのだ。腹を据えるとは、その意味もあつたのだ。

儒学を学んだ者として、朱全忠に対決せねばならぬと、かつて皇帝の前で考えた。いまここで為したのは儒学のどのような教えによるのか。孔子は詔いの術を弟子に教えたのか。それこそがまさしく生来の術であるかのように己は巧みに成し遂げた。これがこの己だ。

成都の民を救うためだ。旧き漢州を守るためにした。心を決し、かくあらねばならぬと思うのを押し殺して、修好のために、敢えてこのように振る舞った。隻念に申し訳ないが、隻念も民のためにと引き受けてくれた。これは方便と言うものだ。

そうなのか。ならば、方便ではないところのかくあるべき己とは何なのか。本来このようなことをするのではない己があるのか。あってほしいと夢想し

ていただけではないのか。貫くべき何かが己にあったらうか。

朱全忠に媚び、それによつて為し得たことを、己の手柄と思つて安堵した男がここにいる。またも早見えの手だ。それは変らぬと彩霞に言われた。これこそが己で、他の己などはない。そうであれば、もとより春琴に見せられたものではなかった。春琴が理想とした平陽公主との落差は大きすぎる。

隻念が言うことは一つ一つ朱全忠の笑壺に入り、いよいよ上機嫌である。

隻念は描いた画がそうであったように、朱全忠に対して媚びてなどいない。自身の思うままに画を描き、それ以外のことは全て些事である。隻念の画に当たるものが己にあるのか。

今日はこれでよかつた。こうするために汴州にきた。

ここまでは誤るところがあつたとしても、成都に帰つてからは違ふ。彩霞と話す先に、何かが見出せるはずだ。ともかくも使者の任を終えて帰還できるようにしたのだから、道が繋がつたのだ。そう思いたい。

朱全忠に目一杯の追従笑いをし続けている己がここにいるとしてもそうだ

と思いたい。

朱全忠の勧めに従い、洛陽に立ち寄り、それより成都への帰路につく。五月の雨の多い時期にも拘わらず、晴天続きに道がはかどる。

かつて初冬の冷たい雨に難儀した場所を通過する。陸氏が祖父に所縁の仏寺へと導いてくれた分岐点は、当時と様子がすっかり変わり、道の左右は豊かに稔る麦畑、夏の陽光に穂が輝く。『秦婦吟』を初めて藹たちに聞いてもらった夜を一人思い返す。

あのときの苦しかった道を洛陽から逆に辿れば自ずと虢州に至る。修好使としての往復の間に、虢州に立ち寄ることがあるとは考えていなかった。朱全忠にほぼ強制的に洛陽を見させられたことが、一つの決意を導いた。

三本柳に達したならば、左に折れて莊園の跡地を訪ねよう。成都への帰還が半日ないし一日遅れるだろうが、今回の役目は失敗したのではないのだから

ら、これくらいは許されよう。故地を訪ねるのは昔を懐かしむためではない。

己が何者であるのか、彩霞の母が莊園にきたところに立ち戻って考えるためだ。

洛陽への道で完成させた『秦婦吟』が己の運命を変えた。『秦婦吟』がなければ今日の己はない。『秦婦吟』に生かされた二十年であったと言えようか。それでいながら、己は『秦婦吟』にふさわしい人間から遠ざかるばかりだ。『秦婦吟』は銀犁の詩だ。己のような男の詩であってはならない。

汴州と洛陽であったことが、そこから離れるにつれて、心の底をいよいよ重くしている。汴州であった全てを消してしまいたい。修好は成った。もしもまた初めからやり直すようになったら、同じことをするに違いない。消し去ってしまいたいと思うようになるとわかっていても必ず同じことをする。彩霞が言っていた晩成とは程遠いこの己という人間であるからだ。

顔を上げる。目に馴染みの風景がある。三本柳まであと少し。莊園の跡地に立ち寄るとそろそろ告げるべきだろう。

馬を曳く鄭郎の背に、

「天氣に恵まれ、道がはかどり、帰心矢の如しではないかい」

「成都に帰って、早くほっとしたいと、正直に申して、そう思っています」

「そうだろう。沐州ではそなたにも随分と苦労をかけた」

「何も致しておりません」

「そなたがいてくれなければ難しかった。成都に帰ったらゆっくり休んでくれ」

「不思議なものですなあ、成都はついこの前までは全く知らぬ土地でありましたのに、いまは早く帰りたいと思っています。こう天氣が好いのに文句を付けてはお天道さまに叱られましようが、晴れたら晴れたで、ここらは埃がひどくていけません。長安にいたころはこれくらいの埃は何でもないことでしたのに、成都に移ってすっかり苦手になったようです。人間など、所詮、安きへと流れるものなのでしょう」

「成都の暮らしはよいかい」

「旦那さまのお蔭で樂をさせていただいております。あっしの一生を顧みて、

「これほど安楽なのは初めてです」

「そうかい」

「生き死の心配は勿論ありませんし、食べるものに困ったことも一度だってありません」

「ずっと成都にいたいと思うかい」

「それはどうでしょうか」

「違うのかい」

「あつしは旦那さま次第です。旦那さまが成都でのお暮らしに満足されているのなら、あつしもいるだけです」

「私のことはさておいて、そなたはどうなのかい」

「あつしは旦那さまにお仕えするだけで、他のことは考えられません」

「私もこの齢だ。もしも私がいなくなったらどうするかい」

「縁起でもないことを尋ねられましても、考えようがありません」

「ならば、成都に帰るのはやめにした、汴州か洛陽に住むぞと言いだしたら

どうするかい。朱全忠さまにお願いしたら案外叶えてくださるのではないかい」

「そうでしょうか」

「二つとも立派な町だ。住むに不足はあるまい」

鄭郎は斜めに少しだけ振り返り、

「成都よりもよい町でしょうか」

「成都に慣れたように、汴州だって洛陽だって住めばすぐに慣れるだろう。汴州も洛陽もなかなかの町ではないかい」

「汴州の賑わいには、長安の西の市もこうであったかと思ひ出させるものがありました。一攫千金の夢を、ただの一度の勝負に賭けて打って出る商人の顔を久しぶりに見ました。狡猾であり無思慮であり、小心であり大胆であり、勝ちに逸り負けに怯え、何もかもが入り混じったままをあからさまに外に出して勝負に出る姿は、傍で見ていて、爽快であり哀れでもありません。他所ではあのような者を見ることはとんとありませんでした」

「何だか難しいことを言うが、汴州の印象は悪くはなかったようだな」

「洛陽は面白くありませんでした。どちらかと言うと嫌な感じがしました。工事の勢いの凄まじさには驚かされましたが、それがすばらしいかと聞かれると、どうなのでしょうか」

「気に入らなかったのかい。この前、私が洛陽にいったのは二十年前で、あのころはまだ蘭くんの店が残っていたけれど、町に人気はなく寂しいものだった。その後、孫儒が入って洛陽をすっかり廃墟にしてみましたと聞いていたが、いまは全てが新たに生まれ変わろうとしている。朱全忠どのの力の入れようは大したものだ」

「旦那さまのお供で杭州に参りましたとき、あちらでは羅城の建設が、それこそ今回の洛陽にも似た勢いで進んでいました。思い出しますと、杭州では、人々がごく陽気に工事に携わっていました。自分たちの町を自分たちの手で立派にできるのを誇るかのようでした。洛陽は陰気な嫌な雰囲気でした」

「そうだったかい」

「長安では、お上が華州からお戻りになる前に、宮殿の修復が進められるのを見ましたけれど、いまだから申しますが、あれも感心できぬものでした。

我等の都を元に戻すと云う心意気と申しましょうか、何かしら気持ちの昂ぶりのようなものがあつてしかるべきなのに、何も感じられませんでした。都は本当に駄目になったとつくづく思われました。あのときに都で為されていたことなどは、いまの洛陽と比べたら、百分の一にもなりませんでしょう」

「そんなことを思っていたのかい。とにかく、朱全忠さまは大した力をお持ちだということだ。あれを見ては、蜀を挙げて戦つても勝算はないと考えるしかあるまい、この度の修好はあくまでも朱全忠さまが恵んでくださったものと思ひ知らせるため、特に洛陽に立ち寄せたのだろう」

心の重さを吐き出すように言う。

いまになって思い返すと、朱全忠はこの度の修好を実は初めから望んでいたのでないかと考えられなくもない。洛陽修復の工事を見せてことさらに力を誇示しようとしたことに、朱全忠の魂胆が透けて見えようか。戦えば負

けないだけの力を朱全忠は有していよう。それでも蜀との正面切つての戦いはさすがに荷が重すぎるだろう。

洛陽の修復は大事業だ。皇帝を長安から洛陽に移すのは皇位篡奪に向けて踏まねばならぬ段取りであるとして朱全忠は考えている。李振が用意周到に張り巡らしてきた朝廷工作が成就すれば、朱全忠は正しい道筋を通つて皇帝になれる。いづれ蜀と戦端を開くことがあるとしても、当面は避けておきたいだろう。それを見透かされまいと、韋莊に対して強硬な姿勢を見せていたのではないのか。つまりは、朱全忠の手の内で踊らされたのだ。

己は李振にも及ばない。諂いを事とすると見た李振を嫌いつつ、その李振に諂つたのは誰だ。朱全忠の歓心を買うべく懸命に努め、幾度か開かれた祝宴で、朱全忠にも、李振たち重鎮たちにもせつせと媚びた。相手の顔色を見て喜ばせるのは不得手ではない。朱全忠の徳を称える詩も作つた。そうしたことのできるのが己に元來備わつた才能なのだろう。それがあつたから今日まで生きてこられた。

汴州で愠の行く末を思いやった。愚劣な李振の誘いを受けた従弟を哀れんだのだが、そもそも愠の不幸はどこにあったのかと考えれば、李振以下の己に杖で撃たれたことの他に何があるだろう。己の為したことは消せない。再び元に戻っても、この己と言う男は、やはり同じことをするのだろう。元來己が何者であったかを見極めて、新たにこれから歩み直すしかない

「あのお方はいまはとにかく皇帝になりたいのでしよう」

「揚州にいたころからなりたがっていた。天地間に生を享けて、皇帝になりたいと望むのは、ままたることではないかい」

朱全忠の生き方は認められないが、一つのを求め続けてはきたのだろう。

「昔、秦の始皇帝が死んだ後、横暴な役人に齒向かって、秦に反旗を翻した陳勝は、誰だって皇帝になってよいはずだと言ったと聞きます。暴君を倒し、民のために義の政治を為そうとの志は壮としましょう。黄巢だってそのように言っていました。黄巢を裏切ったあのお方は、黄巢と比べてどれだけ立派

なのでしょいか

「さあ、どうだろうか」

朱全忠は黄巢の轍を踏むまいとしてきた。だから、正しい段取りを踏んで皇帝になろうとしている。皇帝の位は、徳のある者から徳のある者へと譲られるべきものだ。奪い取ったり、勝手に即位したりするものではない。譲らましようと言われても、幾度も辞退し、天の命、人の声に逆らえず、他に逃れる術がなくなつて初めて即くのが皇位と言うものだ。八百年来磨き上げられてきた正しい禅譲の段取りを朱全忠は踏もうとしている。それはそれなかなか面倒な事業である。

「旦那さまは、あの方が皇帝になつてどうなつていくとお考えですか」

「それで天下が治まるものなら、それでもよいのだろう。それ以外に何があるのか」

投げ槍に言い放つ。王建との修好が成り、朱全忠は禅譲の成就に向けて専念できるようになった。己はその手助けをしたのだ。

「まことにそうお考えでしょうか」

「心の底からそう思っているのなら汴州に残って朱全忠どにお仕えする。だから、成都に帰るのをやめて、汴州とか洛陽に住むと言ったらどうするか」と聞いてみたのだ」

韋荘は笑う。

李振と並び立つ己であって良かろうか。朱全忠のところに李振がいて、王建のところ韋荘がいるのだから、もとより二人は同類である。

「旦那さまのお気持ちがあつしは従うまでです」

「本当ならこうして帰途につきはしない」

馬の背を叩き嘆息する。

「修好が成りましたのに、旦那さまは少しも嬉しそうではありません」

「そう見えるかい」

「これで世の中は静かになりましたか」

「私が知り得るのは、ぜいぜいのところ、いましばらくの間はだけ成都が平

穏でいられることだ」

「都はどうなりましようか」

「あの賑わいをこの目で見ることはもうあるまい。長安はそなたの生まれたところ、寂しいが、これはもうどうにもならない」

言外に、己のしたことの影響など微々たるものと匂わせようとしていることに、我が身が疎ましくなる。

長安の現状は、成都にいるときよりも多くを汴州で聞くことができた。

町から日々人がいなくなっていく一方で、崔胤は奮闘を続け、皇帝を守る禁軍を増強しようと躍起になっている。皇帝が力を失った大きな原因は、内では宦官が禁軍の指揮権を握り、外では節度使が軍事権を握ったことにある。崔胤は、望み通り宦官を一掃し終え、朝廷を本来のあるべき姿に戻そうとしている。朱全忠はこれまで崔胤を助けてきた。しかし、皇帝が軍事力を有するなど望むはずがない。

崔胤以上に絶望的な状況にあるのが清流派だ。もし都になお残って清流派

の中にいたならば、いかなる見通しが描けるのか。考え付くことは何もない。忠節を保ち続けようとしている人々に畏敬の念を抱かずにはいられない。

いつであつたか、変転極まりない世を生き抜くには無節操であるしかない、と、蘭が言っていた。それには必ずしも同意しなかつた。大義を重んじ、あくまでも唐朝に忠節を尽くすのが己の本分であると南山で宣言し、貢奉を受けに長安に上つた。その後の歳月を省みて、一体どこに節操があつたのか。唐の宰相まで出した韋家の末裔の姿がこれだ。

「長安の繁栄も所詮は一時のものだったのです。何百年も続いた王朝も必ず倒れます。それが良いのか悪いのか、そんなこととは無関係に世の中は変わっていきます。たまたま結構な時代に巡り合わせた者にはよき日々があり、そうでなかつた者は悲惨な生涯を送る。その繰り返しがあるだけです。あつしのように、いくらかよき時を若いころに味わつた者は、昔の思い出を胸にしてすくすく消え去っていくのが関の山でしょう」

諦観したような物言いは鄭郎の癖だ。

「これから先には希望がないのかい」

「汴州の商人なら大当たりの可能性がありますか」

「だったら汴州にいくかい」

「先ほどからのお尋ねで、もしもです、ここにはあつし一人しかいなくて、世の中にはもはや一人の知り合いがいなしましよう。その場合にどこにいくのかと考えたら、どうでしょうか、やはり、長安の西の市だと思えます」

「都の賑わいはもう見られないと言わなかったかい」

「それでも、昔の記憶のある場所へと人は導かれていくのではありませんか。たとえ西の市が廢墟になったとわかっていても、いくようになるでしょう」

「そうなのかい」

鄭郎は伸び上がって左右を見回し、

「旦那さまの莊園があったのは、このあたりなのではありませんでしょうか」

「莊園にはきたことがないのに、わかるのかい」

「そのような気がしておりました」

「もう少しくくと三本の柳が立っている。そこで左に入れば我が莊園だ」

「曲がるおつもりですか」

「やはり昔の記憶に導かれるのだろう。それだけではない。いかねばならぬ理由もある」

成都に戻って、己に残されている歲月はどれだけだろうか。わずかな間でも、新たな己になって生きてみたい。厭わしく思うこの己から脱却したい。

悔いることばかりを重ねてきた。そもそも悔いることの初めに立ち戻って、できれば悔いることの最後にしたい。迷妄の底にまで達したときに初めて迷妄の外に出られると、貫休は言っていた。いまの重い心から、莊園の跡地において、最も深い底へと落ちていければ、新たな己になれる可能性が生まれ、ときはないか。

「あつしもお供してよろしいのでしょうか」

「是非そうしておくれ」

馬を止めて景色を見れば、ここがそこであるのは間違いない。しかし、東

にいくか西にいくか、幾度か人生の岐路を選んだ場所に、三本柳は立っていない。

厳然たる時間の経過がある。ここから荷車を押して洛陽に向かった九人のうち、己一人だけが帰ってきた。蘭は日本に渡ったまま、楊胆と春琴は死んだ。蘭は「俺まで帰れると思うのは高望みが過ぎますかな。この中の一人は帰れるとしておくのが、分をわきまえた望みでしようかな」と言った。その一人が己だった。

鄭郎と隻念と二人の従者を連れて左に折れ、残りの者たちを次の宿へと先に進ませる。狐潭まで往復して、日の長いこの時期、夕暮れ時には合流できようか。

道は昔のままであるようでいて、少しく異なりもする。初めての貢奉に落第したのは四十年余り昔。楊耶の背の後ろに重い足を引きずって帰ってきた。合格したならば、馬上で胸をそびらかし、大勢の伴を連れていたであろうになどと考えたものだ。今日、己は立派な衣服に身を包み、馬にも跨り、伴の

者もいる。六十八歳になったこの己の姿は、落第した二十七歳の青年に対して誇れるものなのか。君の将来はこうだと、青年に堂々とと言えるだろうか。こうはなってはいけなないと忠告しなければならぬのか。

川は同じように流れている。橋は少しく上流に移り、川の向こうにあった四阿は跡形もない。

莊園の様子が最後に知れたのは伍伝の手紙だった。伍伝は遠く杭州からたくさんの物を持って都にきてくれ、その帰りに虢州に立ち寄った。その伍伝もすでに死んだ。

「あの丘の向こうに我が莊園があつたのだ」

「伍七さんが妹を舟に乗せてくださつた池は、どのあたりでしょうか」

「高く見えるのが南山。その裏側に狐潭がある。水を堰き止める土堤が切れたりしていなければ、池を見ることもできよう」

莊園の様々な光景が浮かんでくる。無性に懐かしくあり、悔やまれることがいまさらながら多々ある。

ぼくりぼくりと韋荘と隻念の乗る馬が進む。

丘を上る坂は、最後にここを出たときとすっかり様子が違っている。よく踏み馴らされ、夏草も伸びておらず、林も見るからに手入れが行き届いている。

馬より降りる。己の足で歩きたい。

坂を踏みしめて上る。どうして二十年余りもここから離れていたのか。昨日もここを歩いていたような気になる。

この丘の向こう側から、一生に出ずにいてよいはずだったではないのか。出なければならぬ理由など何もなかった。

一望秋山静　望み見る秋の山は静まり返り

簫条形跡疎　人の踏み入った跡は稀である。

方願沮溺耦　願うべきは古き二人の隠者のように

澹泊守田盧　田を守りつつ淡き日々を送ること。

南山で貢奉を受ける決意を明らかにした後、叔父の韜が韋応物のこの詩を

歌った。この詩の心を素直に受け止めていけば、己の人生はよいものになっていただろう。莊園が滅びることもなかったに違いない。

「桑の木もよく手入れされている」

幹を叩く。

「誰かがここで暮らしているのでしょうか」

鄭郎は辺りを透かし見る。斜面に屋根が少しだけ覗くのは蚕を飼う小屋なのか。昔も同じような場所にあつて、蚕を煮る独特の臭いがここらに立ち込めていた。

「土地が空いていれば人は放っておくまい。人の暮らしがここにあるのは、世の中が静かになってきた証だ。結構なことではないかい」

そう言う口の端に寂しさが独特の味を伴って湧き上がってくる。ここは懐かしい土地だ。人がここで暮らしている。そうであるのに、ここにあるのは己の暮らしではない。

ここが他人の土地になったのを恨みはしない。他人の手であれ、こうして

同じ場所で桑が大切にされ、蚕が飼われているのは、嬉しいと思わなければいけない。ここが韋家の土地であるといまさら主張する気はない。ここで暮らす者たちの平安を乱してはいけない。狐潭の辺りまでそつと見させてもらって帰るとしよう。

鄭郎は、

「万一にも、危ないことがなければよいのですが」

と、前方を警戒する。

そうだ、己は蜀の人間だ。修好が成つたとは言え、己は歓迎されない異郷の人間である。

韋荘は嘆息する。廢墟のままであつたならば、警戒する必要はなかつた。

坂を下り、林の間より畑の広がりが増間見える。かつて一族郎党三百人の暮らしがここにあつた。いまはどうなっているのか。莊園の者が常に行き来していたこの道を、いまは誰が歩いているのか。

彩霞の母も、この道をたどつて、莊園にやってきた。初めて顔を見たとき

に、美しい女性であると思った。どうして弟夫婦のように愛し合うことができなかつたのか。彩霞の母を愛せれば、愠を杖で撃つこともなく、愠が復讐の念を燃やすこともなかつた。莊園が廢墟になった始まりは、彩霞の母を愛さなかつたことにあつたのだ。

楊爺は全てわかつていた。莊園は滅びるべく、そして再興すると考えていたのだろう。誰か知らぬ者の手によつて再興はこのように果たされた。それは誰なのか。ここにきて、まだ人の姿を見ない。

坂が終わり、道が二股に分かれる。右にいくか左にいくか。

「そなたは狐潭を見たいのだろう」

左を選べば、愠が出てきて足を刺した場所だ。あの痛みより幾層倍もの痛みに彩霞の母と愠は耐え続けていたのだろう。それを彩霞だけが知っていた。

いましも彩霞の母がここへと嫁にくるのならば、愛することができようか。そうだ、あれはあれで愛すべき女だつた。貢拳などというものに己もあれも囚われずに、莊園での暮らしだけを大切に思っていたのならば、愛し合えた

はずだ。そうしていれば、いまもここに彩霞も純もいるのだろう。純の短すぎる一生は己の過ちの故だ。

右に水路に沿って歩む。

「伍七の祖父が酔っぱらって死んでいたのはここの下のあのあたりだ」

鄭郎を呼び止めて、細い流れへと下る斜面を示す。水は変わらずに流れている。

伍七の爺さんがここに倒れていたのは、伍七が阿枉を舟に乗せたのと同じ祭の日だった。愠と彩霞の母が駆け落ちしたのもその日だ。暗がりです。「私は母とは違います」と彩霞が言った。

「伍七さんの御祖父さまなら、阿枉にもそうでしょう」

鄭郎は川に手を合わせる。

次の分かれ岐に達して、隻念に、

「こちらを登っていきますと、一族の者が南山と呼び慣わしていた丘の頂に至ります。反対側が狐潭です。狐潭と南山は、莊園の内でもいささか興趣の

あるところと自負しておりました。御覧になれば、あるいは筆を執ってみようかとお気持ちになっただけでも知れませんか」

「先ほどよりこの道は興あるところと感じておりました。長く人が暮らしてきた場所には独特の匂いがあります。そこに潜む真の奥深さは、外からきた者にすぐにわかるようなものではなく、長く愛着を持って暮らしてこそ格別なものとして知れてくるのでしょう。愚僧がいま筆を持ちましても何も描けはしないと思います」

「いえ、隻念さんであれば、きっと描いて下さるものがあると思います」
韋荘の胸に、貢挙から落ちて帰ってきた日に、人々の住む家並みより漂い出てきていた饅えた臭気が甦ってくる。そのときは厭わしくてならなかったものが、いまは身を振るばかりに懐かしい。

「愚僧の目がここで何を見てとれるのかはなはだ心もとなくはありますが、すでに感じることもあります。いつか画になることもありませんか」

「画にしていただけることがあるかと思うだけで、心が昂ぶります」

「愚僧にいかに優れた技がありましたも、掌書記さまのお気持ちまでを描くことはできません」

「隻念さんならおできになりましょう。貫休さまとは大いに異なる画境を切り開かれておられると、常日頃から感心させられております」

「師には遠く及びません」

「そのような隻念さんに、沐州ではとんでもないことをお願いし、改めてお詫び申し上げます」

頭を下げる。

隻念は朱全忠のために画を描き、その後、請われるままに屋敷にいき、奥の女たちの注文にも応じた。内心は穏やかでなかったに違いない。

「画を喜んでくださる方がいらつしやるのなら、どこへでもいき、何でも描きます。珍奇な姿で描くことで、お喜びいただけるのなら、それも結構です。出来上がりしました画は、どのような状況で描きましようとも、それは無関係に、一枚の画として存在するだけです。人さまの思いを画にするた

めに、筆が自ずと動くような境地に達するのが愚僧の望みです。まだまだ愚僧は己を消すことができずにいます」

「隻念さんはすでに至っているのではありませんでしょうか」

「とんでもないことです。恐らくは至ることのない境地でしょう」

隻念に遠く及ばない。己にこだわりを持ち続けてきた。いまでも。『秦婦吟』は銀犁の詩だと思いつつも、『秦婦吟』から離れることができない。『秦婦吟』はこの恥ずべき己などからは無縁になるのが最も良い。

狐潭を堰き止めている堤は元のままにある。ならば狐潭も昔の姿を留めているはずだ。長安からここに帰ってきた日に、堤の上で号泣した。再び己はそうなるのか。

胸の鼓動が速まっていくのを感じる。

狐潭の美しさは天地間にここ一つだけのものだ。そう思えるのは、ここに己や一族たちが住んでいた記憶が刻まれているからだろう。それを廢墟にした己が、狐潭を美しいと思い、泣くのは許されないことなのかも知れない。

だから、お狐さまは、己の願いを受け入れてくれなかったのか。莊園を復活させ、お祭の中に春琴を置くとの願いが叶わずに潰えたのは己のせいだ。堤を登っていくと、何かの音が聞こえてくる。

「誰かがきつとおりましょう」

鄭郎が前に立つ。

「そこが狐潭だ」

韋莊の声に鄭郎は立ち止まる。その隣に韋莊が並ぶ。

夏の日差しを受ける狐潭の水。最後にここを見たのは朝日が昇る前の初冬だった。明るさの違いに眩暈を覚える。

韋莊は泣かない。

「何の騒ぎでしょうか」

鄭郎が爪先立って狐潭の水辺を見渡す。

水を挟んだ林の向こうより聞こえる喧騒。それが、己の感情の放恣を押し留めるのか。狐潭との再会は、この前のように激しく身をゆさぶるものに

ならない。

少々拍子抜けした思いで、

「悪いことでなければよいが」

と、つぶやく

「陽気な気配が感じられます」

そうであるのかも知れない。笑いさざめいているようにも聞こえる。

鄭郎が先に立ち、周囲に気を配って水辺の道を歩む。左回りの弧をたどっていくと、明らかに人々の楽しげな声であるとわかる。その上、旨そうな匂いまで漂ってくる。

道は池の中ほどへと張り出し、そこで大きく曲がって、奥への展望が開ける。鄭郎が立ち止まり、韋荘は目を見張る。

「これはどうしたことだ」

水をはさんだ向かいに朱色の大きな幟が二本立つ。その下に大勢の人々がいる。そこはお狐さまの祠があった所だ。人々が賑やかに飲み食いをしてい

る。

韋莊たちが姿を現したことに、向こう側の人々もすぐに気づく。互いに制止し合って、騒ぎがたちどころに静まる。向こうの岸と、こちらの岸と、無言のままに向き合う。あちらの人々にとってみれば、立派な服装をした人間が突然やってくるのは、普通には歓迎されざることだ。

「様子を見てきてくれないかい」

鄭郎一人をいかせる。

鄭郎は両手に何も持たぬことを示し、岸を辿ってあちら側へといき、着いて話すことわずかのうちに、向こうの人々の間に大きなどよめきが起こる。一人の男がこちらへと走り出す。鄭郎が跳び上がって、こちらにくるようにと招く。

どうしたものかためらいつつも韋莊は歩む。向こう側の人々が一斉に動き、最初に走り出した男は早くも間近にきている。

向き合わせになり、男は両腕を上げ、絶叫する。

「旦那さま」

韋荘は細く呻き声を洩らす。

男がそのまま韋荘に飛びつこうとすれば、韋荘は受け止めるべく両手を前に出す。男は韋荘の顔の前で体を折り、韋荘の手を取って顔に押し付け、そのまま地面へと崩れ、慟哭する。

「ああ、そなたは」

男の顔をまさぐる。

男は途切れ途切れの声で、

「へい、伍七にございます」

「そうかい、伍七なのかい」

伍七は顔を見せようとするが、首が上がらずかえって地に突っ伏し、揺れる背に韋荘は涙を落とす。

「そなた、無事だったのだね」

「へい」

伍七の後ろに鄭郎が立ち、向こう岸にいた人々がそのまた後ろにひしめき合つて立ち並ぶ。誰もが伍七の泣く姿を見つめている。

「ここに帰ってきていたのだね」

「へい」

「そうかい。そうかい」

伍七は泣き声をおさめ、ようやく顔を上げる。長安で最後に別れてから二十余年、壮年になった男の顔にも昔の面影がある。

「へい。帰ってきておりました」

韋荘は両手でもう一度、伍七の頬に触れ、

「本当に伍七なんだね」

「いつかこのような日があればと、お待ちしておりました」

「そうなのかい、待っていてくれたのかい」

「今日がその日だったのです。何という幸せでありましょうか。これ以上に嬉しいことはありません」

伍七は袖で顔を拭い、笑顔を見せる。

「私も嬉しい。まさかここでそなたに会えるとは思ってもいなかった」

「これでやっと旦那さまにお返しできます。今日がその日だったのです。そうか、だから、夢を見たのだ」

伍七は膝を打って立ち上がり、振り返る。

「皆の者、こちらが常々申していた旦那さまである。今日からは、このお方がこの御主人だ。これこそがお狐さまのお導き、明け方の夢は、これを告げるものだったのだ。皆の者、きちんと御挨拶申し上げるのだ。わしに恥をかかせないように致せ」

伍七は向き直り、土下座をする。背後の人々もそれに習う。

「この七、今日までこの莊園をお預かりして参りましたが、そっくり旦那さまにお返し申し上げます。水の一滴、米の一粒に至るまで、この七、全て揃えてお返し致します。その上でのお願いであります。よろしかったらこの者どもをここに置いてやっていただけないでしょうか。他に行き場のない哀

れな連中です。武の孫のこの七が厳しく躡けて参りましたから、旦那さまのお役に立つはずと存知おりますが、もしも不届きのご事情が少しでもありましたら、どうぞ厳重に処分なさってください。七はもとより最初に仕置きを受ける覚悟であります」

伍七は一層深く頭を下げ、他の人々も同じようにする。

韋荘はその前であって、

「そなたが何を言っているのか、私には少しもわからない。どうか筋道立てて話してくれないかい」

伍七は顔を上げ、

「心急ぐままに申し上げてしまいました。しかし、筋道立ててと思いましたが、そうなりますと、はて、どこからお話すればよいのやら」

左右を見て一人でうなずくと、中腰に立ち、

「では、お願いでございます。まずは、お狐さまの祠の前までお越しくださいませ。ただいまはお狐さまのお祭を致しておったところです。旦那さま

にぜひお祭の中に入っていたいただきたく存じます」

「ああ、それでこのように賑やかだったのかい」

「お祭は昔から八月と決まっておりますが、明け方の夢に、お狐さまがお姿をお現わしになり、夜が明けたなら直ちに祭を致せとおっしゃいまして、目が覚めた後も、耳にその響きがありありと残っていたものですから、すぐに皆を集めて相談しますと、これはやらなければいけないと申しまして、俄なこと、取って置き酒ばかりを開け、あとはありあわせの食べ物を並べるくらいで、形だけはいつも通りにお狐さまのお祭をしておりました。これがよもや旦那さまをお迎えするためのものであったとは、思いもありませんでした」

「そうだったのかい。今日は、偶々ここに寄ることができたのだが、それもこれも、お狐さまのお導きなのかも知れないな」

「そうです、そうです。さあ、祠の前はどうぞお越してください」

朱全忠が洛陽を見ていくようにと言わなければこの道を選ぶことはなかつ

たのだが、お狐さまの力の方を信じたくなる。

伍七は道を塞ぐ人々を手で左右に払う。皆、小走りで元の岸边へと戻っていく。

「七がここにおりますこと、旦那さまにお知らせ申したいとずっと思っておりました、この頃になりまして、風の便りに、蜀の国でお偉くなっておられると聞きました、どうにかしてそちらに参りたいものと考えておりました。しかし、この落ち着かぬ世に、まだ果たせずにぐずぐずとしておりました。申し訳ありません」

「成都にいること、聞いておったのかい。いまでは王建さまにお仕えする身だ。宰相まで出した我が先祖には顔向けならぬことだが、生きるために止むを得ずこうなってしまった」

「さぞかし御事情があったのでございましょう。こちらから参らねばならぬところを、旦那さまの方からお越しくださいますて、嬉しいやら、申し訳ないやら、おかしな気持ちです」

二本の朱色の幟を起点に人々が左右に並ぶ。大人から子どもまで二十人ばかり、ざつと一瞥して、韋荘の記憶にあるような顔はない。その間を歩んで祠の前に立つ。この前ここを去ったときと異なり、薛未亡人が建てた姿にほぼ近い状態に戻っている。楊爺が定めた作法の通りに祠を拝む。

ここに帰ってきたのはお狐さまの導きであるに違いない。莊園を継ぐ者があると、楊爺が最後に楊胆に言ったのは、このようなことだったのか。

祠を拝する間に心が定まる。いかにして狐潭を去るのかが決まった。瞬時にかく定まったのもお狐さまの導きか。楊爺がそうせよと導くからだろう。

「全てお狐さまのお蔭です。この命が助かりましたのも、ここで私どもの暮らしがありませんのも、こうして旦那さまにお会いできましたのも、お狐さまのお蔭によらないものは何一つありません」

伍七は再び泣き声になる。

「この祠はそなたが直してくれたのかい。昔よりも立派ではないか」

「この七は何もしておりません。お狐さまによって生かされているだけです。」

この祠がいまこうしてありますのは、七の力などではなく、旦那さま方の力によるものです」

「旦那さま方とは誰のことなのかい」

「へい、勿論目の前にいらっしやる旦那さまもであります、私どもがここで生きていられますのは、慍さまと憐さまのお二人のお力によるのでございます」

その名に驚き、

「慍と憐とは、従弟の二人のことかい」

「へい、それに、孤真さまです」

「楊銀もなのかい」

「今日のこの日に、皆さまがいらっしやればどれほどお喜びになることでしょうか」

「三人はどうしているのかい」

「憐さまは私どもの知らぬ村へとお帰りになりました。孤真さまは仏道修行

の旅に出られたままです。慍さまはここで亡くなられました」

「慍は死んだのかい」

「へえ、二年前の大雪の朝でした。いつものようにお食事をお届けに参りますと、すでに大往生を遂げておられました。それは、南山の上、昔、大旦那さまの隠居所がございましたあたり。小さな庵を結んで、念仏三昧の日々を送っておられました」

「そうだったのかい」

伍七が言う慍の最後は、華州で会った自信に満ちた姿と全く結び付かない。華州を出てから何があったのか。

伍七は、乱雑に置かれていた床几を並べ換えさせ、韋荘たちの座す場を作る。盃を交わしてより、長安で別れて以来の顛末を伍七が語る。

「最初に申し上げるべきは、旦那さまよりお預かりしましたお手紙でございます。あれは確かに平康坊の仙水楼にお届けいたしました」

「有り難う。そなたがそうしてくれたことは後でわかった。私の思いは伝え

ることができた。やっと今日になって礼が言えた」

「で、そのお方とは」

伍七は問いかけて、韋荘の表情に、

「いえ、まずは私の話をいたしましょう」

そこからは事の意外さに、悪い狐に馬の小便を吞まされ、ありもしない夢を見ているのではないかとの疑いが生じるほどだ。しかし、夏の陽が水に揺れる狐潭の風光は、まぎれもなくかつて深く慣れ親しんできたこの場所の真実の姿である。阿枉を乗せた小舟が漕ぎ寄せられたのがここだ。阿枉の死を後で伍七に告げねばならない。

己は銀犁を失い、伍七は阿枉を失った。そのようなことがあのときの長安で起こったのだ。

伍七は、当時は朱温と言っていた朱全忠の部隊に組み込まれ、長安郊外の各地で、明けも暮れても官軍と戦い続けた。朱温は黄巢が手詰まりになっていくのを見て寝返り、王重栄のもとに帰順し、皇帝から全忠の名を賜って、

節度使として汴州の地に赴いた。朱全忠に同行できたのはわずかな人数で、兵士のほとんどは王重栄のもとに留め置かれた。伍七もその一人だった。王重栄は部下に殺され、伍七の仕える先は次々に代わり、李克用のもとに連れていかれた。

李克用軍団の主軸は沙陀族の騎馬武者で、伍七のような漢人の歩兵は人間並みに扱われなかった。韋荘が朝廷の宣諭使として王建に会いにいったころ、遠く幽州での戦で、敵の矢面に立たされた。このころまでほとんど負け知らずであった李克用は敵を侮り、陣中で大酔し、明け方の深い霧に乗じて奇襲を仕掛けてきた敵に大敗した。霧から雷雨に変わった荒天こそお狐さまの恵みと、伍七は数人の仲間とともに戦線から脱走した。ひたすらお狐さまの加護を祈って虢州を目指し、半年ほどの辛酸の末、莊園の跡地に辿り着いた。五年前の春だった。

帰り着きさえすれば皆に会えると思っていた伍七は、廃墟となった莊園に呆然とし、伍七に付いてきた仲間も落胆した。伍七はかつての韋荘と同じく、

最後の希望を楊爺の小屋に繋ぎ、狐潭にきた。そこにいたのが楊銀の孤真だった。楊銀は初めて会った伍七に素性を明かさず、たまたまここに杖を留める廻国の僧だと言った。

楊銀は伍七の話を知ると、あてもなく他所に行くよりはここの復興に努めるのがよいと勧めた。いずれにしても他にいくところのない伍七たちはその言葉に従った。楊銀が托鉢で得てきた粃を蒔き、秋にわずかながらも収穫に恵まれた。それは春に蒔くために残し、食うや食わずで冬を越し、春から夏へと少しずつ田畑を甦らせていった。

ここでの暮らしにも目途がつくやも知れぬと思えるようになったころ、狐潭に飛び込んだ者がいた。岸边に一人で住む楊銀が救い、伍七が呼ばれて駆けつけると、水を吐いてかろうじて息の通じるようになった男が、魂の抜け出した顔で横たわっていた。骨と皮だけに痩せ、全身傷だらけだった。楊銀はいつの間にか姿を消していた。

伍七はともかくもその男の介抱に努め、徐々に回復するにつれ、伍七は自

身のことを語るともなく話した。男は聞くと半狂乱になり、人々の制止を振り切つて再び狐潭に飛び込んだ。伍七は救い、何かの憑きものが男を狂わせているのだらうと、小屋に閉じ込め、御祓いを盛んに行った。

そうこうするうちに、楊銀が瀟洒ななりをした一人の人物を連れてきて、全ての事情が明らかになった。入水自殺を図つたのは韋愠で、楊銀が連れてきたのが韋憐だった。

韋愠は、韋莊と会つてからすぐに華州を去つて汴州にいった。しかし思い描いていたようにはならず、ようやく得た小さな機会に、朱全忠を怒らせてしまった。その不首尾に、愠を誘つた李振は冷たく知らん顔をした。愠が目論んでいたのは、韓建と朱全忠との繋ぎ役となることだった。しかし、韓建が皇帝を手放し、彼我の力の差が大きく開いては、繋ぎ役など全く不要だった。汴州に居場所のない愠は気鬱症を病み、洛陽郊外の山間に母と隠れ住む憐に救いを求めた。

愠はそれまで彩霞の母が自殺したことは知らずにいた。楊銀から渡された

彩霞の手紙には、彩霞の母の不幸を暗示するようなことが記され、気になっていた慍は憐に尋ねた。憐は病死したと答えた。慍は、彩霞の母の最期を知る下女に執拗に尋ね、事実を聞き出した。慍は憐の家を飛び出て、それからどのような経路を辿ったものか、全身を痛めつけて、狐潭に飛び込んだのだった。

憐がきたことで、慍は少しずつ落ち着きを取り戻した。半月ほどして二人は出かけていき、戻ってくると、この莊園の所有者が伍七であることを証明する州知事の書類を伍七に渡した。韋莊から伍七に譲り渡すと書いてあった。

伍七はそこまでを話すと、

「旦那さまのお許しもなしにこのようなことになり、いかにお詫び申しても許されるものではありません」

地に手をつこうとするのを押し留め、

「詫びる必要など何もない。そなたがこの持ち主になっていてくれてこれ

ほど嬉しいことはない。憐くんと愠くんの二人は一番正しいことをきちんとしてくれた」

「とんでもないと辞退したのでございますが、お二人はどうしても許してください。且那さまがお帰りになるまで仮にお預かりする心で、お二人のなさるようにお任せいたしました。今日、こうして且那さまがお見えになりましたので、ここは全て元のまま且那さまのお持ちものでございます」

「いやここはそなたのものだ。ここ暮らしては今までと何も変わりはない、皆も安心してよい」

伍七とその周りの人々に微笑を見せる。同時に、心の底が抜け落ちるような寂しさに襲われる。

「そうはいきません」

伍七が言いかけるのを止め、

「愠くんと憐くんが決めたことを尊重する。とりわけ愠くんは亡くなったのだから、その遺志は守らなければならない」

伍七を立たせ、

「そなたは立派な莊園の主だ。我が韋家の代々の誰もそなたには適うまい。それは、ここにいる皆の顔を見ればわかる。私はそなたの祖父の伍武と慍くんを杖で撃った。あの過ちを私は自分で正すことができなかつた。私が滅ぼしてしまつた莊園をそなたはみごとに甦らせてくれた。これほどに嬉しいことはない。いくら礼を言つても足りない」

伍七は韋莊の言に従うことになお抵抗する。韋莊は耳に入れず、慍と憐のその後を尋ねる。

莊園を伍七に託した二人は楊銀とともに出ていき、三ヶ月ほどして僧に姿を変じた慍が楊銀と帰ってきた。慍は南山に念仏堂を建てて一年余りで死に、楊銀はそれを機に廻国の旅に出た。憐は山中の村に帰り、その場所は誰も知らない。

「聞けば聞くほど床しい人ではないか」

憐とは一度も会っていないのを残念に思う。

「あのお方に、ここを少しでも昔の姿に近づけてほしいと言われまして、以来、誠心誠意励んで参りました。ここに皆とともにこうしていられますのも、旦那さま方のお蔭、お狐さまの御加護があればこそです。私などは何もしていません」

伍七は莊園を返すとまた言う。

「もう言うてくれるな。ここはそなたたちのものだ。たとえそうでなくても、私はここにはいられない身だ」

「遠く離れておられましても、ここが旦那さまの莊園であることに変わりありません」

伍七の言葉は嬉しくないものではない。真実の思いを言えば、この莊園の主としてここにいたい。狐潭の風光を見れば、伍七が立派に復興させてくれた莊園以外に、己の住む場所があらうはずがない。

成都に帰らなければならない。王建の幕府の掌書記であり、修好の使者としての帰り道だ。朱全忠からの返礼の使者を成都に迎えて和約は完全なもの

になる。そのときに己がそこいないでよいはずがない。己のいまの暮らしは全て成都にあり、彩霞に会つての後に新たな人生があり得るかも知れない。初めから彩霞の母を愛することができていたならば、真実の気持ちのままに己はずっとここにいたのだ。

「そなたはここにいて皆に慕われているのだろう。そうなのだろう。羨むばかりだ」

伍七の体を皆の方に向けさせ、

「ここはこれまで通り、この伍七が主だ。皆が望む通りであり、お狐さまもそれを望んでいる。だから今日のこの祭をせよと夢のお告げがあったのだらう」

韋荘の声に皆がうなずく。

かつて理想は田疇であった。漢が滅びゆく時代に、田疇の徳を慕う人々が集まって山中に自ずと村が形成された。己は杖の力で人々を従わせようとし、その結果が莊園の破滅だった。叔父の韜は、人々の自ずからなる働きによつ

て荘園が自然と良くなっていくことを望んでいた。己はそれと正反対のことをした。

韋荘の目に涙が滲む。

これまでもこの狐潭をどこよりも美しいと思っていた。いまの思いはその比ではない。己はここを去る他はなく、二度と戻って来ることがないのだから。

「これでよい。では、私の話を聞いてもらおうかい」

何よりも重要な阿枉のことを話す。

「幾度かあきらめそうになりながらも、心を強くして思い返し、今日までも希望を繋いできました。ここに戻ってきたのも、これまで懸命に働いてきましたのも、実はそれ故でした。それほど早くに亡くなっていましたとは」

伍七の顔に慰めの言葉もない。

阿枉と伍七の小さな幸せを守りたいとまさにこの場所で思った。

伍七は泣くのをこらえ、

「生きていると思えばこそ、あの苦しい日々も生き抜けました。こうして旦那さまとお会いできました。あの人のお蔭で今日まで生かされていたようなものです。その幸せを思わなければなりません」

「阿枉のような心の優しい娘にどうして短い一生しか許されなかったのか、残念でならない」

とうとう泣き出してしまった伍七につられ、阿枉とともに銀犁を思つて韋荘も泣く。

そして、やはり涙を拭う鄭郎を伍七の前に立たせる。

「これが阿枉の兄だ」

鄭郎について話せば、伍伝の義理の息子になった経緯も、杭州で伍伝が死んだことも告げるようになる。

父親の死まで知つて伍七はさらに落胆する。

伍七と鄭郎の二人に盃を持たせ、

「阿枉はそなたたち二人が仲良くしていくことを望んでいた。兄弟の固めの

盃を交わすことは、伍伝を喜ばせることにもなるだろう」

伍七と鄭郎は顔を見合わせる。二人の間をいま阿枉が強く結んだと感じ、祠の前でいかにして狐潭を去るのか決めたことは間違っていないと確信する。

盃を満たし、

「伍七が兄、鄭郎が弟だ。半分ずつを呑み干すように」

「阿枉さんのお兄さんであれば、私が弟でなければおかしいです」

伍七が言うが、

「いや、伍七は兄でなければならぬ。そう私が決めた」

二人に対して主人面するのは好まないが、こればかりは強引にでも決めた。二人は韋荘の断固とした言い方に、酒を口にする。

「では、私から二人に最後の頼みがある。是非に聞いてもらいたい。よいか、鄭郎はこれより兄の指図に従い、兄弟二人、この莊園を末永く発展させていっておくれ。阿枉のためにも、伍伝のためにもそうしておくれ」

「どういうことでしょうか」

鄭郎が言う。

「そなたにここに残ってほしいのだ。どうかそうしてくれないかい」

「あつしがですが。旦那さまは」

「勿論、成都に帰る」

「旦那さまにお仕えするよう義父に言われ、今日まで離れることなく努めて参りました。旦那さまが成都にお帰りになるのなら、あつしも御一緒しなければなりません」

「今日まで伍伝の言いつけを忠実に果たしてくれた。有難い限りだ。礼を言う。もう十分過ぎる。伍伝は、私のそばに常にいるようにと言ったのではない。私の願いを聞き入れてはくれまいか」

「旦那さまのお近くにるのが最もいいのです。阿枉もそう思っていますよ
う」

「兄弟二人が仲良くするのを阿枉が一番望んでいる」

「それならば離れていてもできましよう」

「どうか、無理にでも聞いてくれまいか。私は成都に帰らねばならない。私の代わりにここにいてもらいたい。伍七には不服はないだろう」

「ここは旦那さまにそっくりお返しするつもりでおりました。それがどうしても叶わぬのなら、旦那さまのおっしゃる通りにいたします。こちらは、私がない間に、代わって父に孝行してくださいました方です。喜んで一緒に働かせていただきます」

「兄弟となった二人だ、弟は兄の言葉に耳を傾けてくれるだろう」
鄭郎は腕を組んで考え、

「兄上にすっかりお任せいたします」

「祖父より、我ら伍家の者は、韋家の旦那さま方に力を尽くすため生まれてきたと教わりました。旦那さまのお言葉に逆らうことはできません。旦那さまのおっしゃったことを忠実に守るまでです」

「韋の家と伍の家の古い関係はもう忘れてください。いまのこの場だけは、伍七の言うのを忝く受け止めたい。鄭郎もそれでいいかい」

「こうなりましたからには兄上のお言葉の通りにいたします」

「これで安心した」

三人並んでお狐さまの祠の前で誓う。

立派に変わった祠をしみじみと眺め、

「壊れていたこの祠に、もしかして雀蛤先生の札がかかっていなかったかい」
伍七は祠の内より、

「このように雀も蛤も見えないほどに薄れておりますが、雀蛤先生のお札であらうと思い、お帰りになるまでここに納めてきました」

それを手にし、

「隻念さま、まことに恐縮ですが、お願いがあります」

黙ってここまで聞いていた隻念は、

「愚僧に何かここでできますことがありませんか」

「この札に画を一つ描いてはいただけませんかでしょうか。雀でも蛤でもありません。楊絃の姿です。葵州におりましたころの、隻念さまの御記憶にある

あのころの楊絃です」

「春琴さまをですか」

隻念は同意し、即座に描く。

武術の鍛錬に励んでいたころの春琴の眩しいばかりの輝きが符の上にそのまま甦る。

それを祠の扉に掛け、

「では、お祭を続けてくれないかい」

お狐さまの祭の中に置くとの約束はこのような形で果される。

賑わいの内に春琴を残し、狐潭を離れ、南山の肩にある叔父たちの墓に詣でる。この乱世を今日まで生き延び、なお修好使の任に耐え得る身体を保っている。この乱世を今日まで生き延び、なお修好使の任に耐え得る身体を保っている。先祖が恵んでくれた余慶に他ならない。これほどの恩を受けながら、莊園を滅ぼし、唐朝の滅亡に間接的ながらも力を貸した。齟齬ばかり多い生涯であり、いまさら正すこともできず、ここを伍七と鄭郎に委ねて去る。詫びることばかりが多い。

南山の頂に立ち、ここに仏蕃がきた重陽の節句の日のことを隻念に話す。

「仏蕃の歩む道に己は踏み従うことはついになかった。」

「一つの画想がいま浮かんでまいりました。夢に真を見ると貫休さまは良くおっしゃっていますが、これはもしかすると仏蕃さまのお導きなでしょうか。」

この日中にありありと一つの想を得ました」

老木となった槐の幹を巡って隻念が言う。

「狐潭や南山の風光が絵心に働きかけるものがありましたでしょうか」

「朱全忠さまや御殿の女性方が、手のない愚僧の技を喜んでくださるのを見て、手を失えばこそ画を描けているとの思いを改めて強くいたしました。天が、あるいは御仏が、愚僧の手をなくして下さったのは、愚僧に何を描かせたためだったのでしょうか。汴州を出てからそのことを考えていました。先ほど、人の求めに応じて描くと申しました。天あるいは御仏は愚僧に何を求めているのでしょうか。それが一枚の画として見えて参ったように思います。狐潭もこの丘も、その画の中に必ず描き込められましょう」

「どのような画でしょうか」

「地獄絵図です」

「狐潭も南山も地獄の一部とおっしゃるのでしょうか」

「ここばかりでなく、愚僧がこれまでに見てまいりました揚州も杭州も婺州も成都も洛陽も全てがその画の一部となりましょう」

「この世がさながら地獄だからでしょうか」

「そうとも言えましょうか。恐ろしい地獄の責め具を愚僧は思っていない。仏蕃上人さまのおっしゃる救いは地獄においてこそ得られるといま思い至りました。地獄は罪障の滅する場です。地獄において救いを得る人々を描きたいのです。狐潭や南山はその画になくはならない場所です」

「有難いお話です」

「愚僧に描けるかわかりません。成都に帰りましたならば、とにもかくにも取り掛かる所存です」

隻念がいかなる図柄を心に思い描いているのか、いまは知りようがない。

隻念は画に生き、一つの画を描くに至った。この己に何の為すべきことがあろうか。

南山の肩より、叔父の韜の隠居所跡と慍の念仏堂を弔う。それぞれに苦しみはありながらも、二人とも自身で見出した終着点に辿り着けたのだろう。

不意に、高く伸び上がった木立の蔭に息子の幻影を見る。

黄巢が長安に入った年に、そうなるとは知らず、貢奉を受けるために莊園を出た。「後を頼む」と息子に言い置いた。純と言う息子がいることを初めて心強く感じ、純も父に認められたと嬉しげであった。それは純に重荷を負わせるものだった。綜に、藹の息子であればよかったと純は漏らした。この山のどこかで純は殺された。父に代わって恨みを引き受けてくれたのだ。純の母を最初から愛していればそうはならなかった。

人は一つの生き方しかできない。己にはこの生涯しかなく、なおしばらくは歩かねばならない。

「ここから官道に引き返すとしよう」

息子が刃に倒される幻想を振り払って、伍七に言う。

「まだ祭は続いております。棗のお菓子が焼きあがりましょう。どうぞ召し上がってください。お屋敷の跡地も御覧になってください。旦那さまのお帰りになるときに門がなければと、小さいながらも建てたものがあります」

「食べるのも、見るのも、鄭郎に任せよう。隻念さまが描いてくださった楊絃の画がある。春琴が莊園に残ってくれるのだから、未練はない」

勿論、計りようがない未練がある。

華州で会ったとき、慍が不思議な画の話をした。愛する女性の生前の姿を描いた画に、百日の間、心を込めて話をする、画から抜け出て生きた人間になる。隻念の画ならそのような力があるだろう。春琴に甦ってきてほしい。そうなったら、春琴に何を与えるのか。この世で最も美しいと思う狐潭で永久に過ぐす幸せだ。

慍の心の痛みがわかってくる。なぜ華州で話せなかったのか。彩霞にこの思いを告げなければならぬ。

伍七はなお引き止めようとするも、南山を下り、川にかかる橋で別れる。

伍七と鄭郎は兄弟で莊園を發展させていくことを改めて誓い、いつか自由に往来できる道が通じたならば、莊園の産物を成都に届けると約束する。

幾度かここで弟の藹と別れた。弟はいま成都で兄の帰りを待っている。彩霞もいる。己の生きる場所は成都にある。

馬に跨る。二度と戻ってこないであろう莊園は、辛くなるのがわかってい
るから顧みたりしない。

「これでよろしかったのでしょうか」

隻念が言う。

「引き返す道を絶ちました。そうせねば新たな道は開けませんまい」

「行くは帰る、帰るは行くでありましょう。地獄は人の逝くところにして故郷なのでありましょう」

日は西に傾き、馬上の影が長く伸びていく。

こうなると望んだことは一度もない。狐潭の畔に生涯を終えてよいはずだ

った。

己は取り残された。惨めな姿を、一人見よとてこの鏡を置いていったのか。恨みがましくそのように考えるのは許されまい。

幸運ばかりが重なり、羨まれるべき境遇にある。ここが己の人生の到達点であるとして大いに満足しなければ、遥かに及ばぬわずかな成功さえ高嶺の花と仰ぎ見ねばならぬ者に、疎ましい思いをさせるだけではないのか。己とて、本当はこれでよしと思いたがつていたのではないか。あからさまにそれを外に見せてはさすがに浅はかに過ぎようと、何かを求めるふりをしていただけではないのか。無自覚に満足している者よりもおぞましかろう。どうせのことなら、高い地位に昇り得た者だけが聞かせられる教訓話などを、胸をそらせて得々と語って見たらどうなのか。その方が自身に余程正直だろう。そうしている顔を己で見よとてこの鏡を置いていったのか。そう考えるのも

恨みがましい。

この鏡を残して彩霞は成都を去った。鴛鴦の透かし彫りのある揚州産の品。彩霞の母がこれを携えて嫁にきた。自ら命を絶つに際し、それを憐に託し、彩霞に渡された。彩霞は、父に返すと言って陸氏に残した。

彩霞が成都を去ったのは、韋莊が虢州からの帰路についている間のことだった。どこにいき、いつごろ帰るのかと、陸氏が尋ねると、西方にいき、帰ることは恐らくはないと答えた。婆羅門僧に同行するだけ告げ、それ以外は何も話そうとしなかった。

そのころ、成都に金剛経の札を配り歩く婆羅門僧が現れ、彩霞が発ったのと時を同じくして姿を消した。人伝に聞いた僧の風貌は仏蕃に少しく似るが、仏蕃とは名乗っていなかった。

彩霞はなぜ西方にいったのか。なぜこの鏡を置いていったのか。全てが謎だ。恨みがましい推測は正鵠を得ていないだろう。しかし、どうしてもそのように考えてしまう。

成都に戻り、彩霞と話をすることから、新たな生き方が始まるはずだった。

彩霞の母について考えると約束したことがようやくやく果たせた。これで娘と胸襟を開いて語り合えると期待していた。語り得た先に何かがあるのか、一切思い描かずにいた。そうであつてこそ、彩霞に心の底を見せられると思つていた。

彩霞はいなかった。新たな生き方は幻になつた。現在の境遇から脱する術を失つた老人が残された。娘に見放された惨めな父の顔を、母の鏡に映して、苦しむがよいと、これを置いていったのか。そのように考えるのは並外れた恨みがましきだ。

世間から見れば、稀に見る幸運な成功者である。この地位に満足しないのはむしろ貪欲過ぎる。この境遇をよしとしないのは、恩知らずも程がある。一体何がいけないのか。しかし、いまをよしとしては己は終わりだ。

南山において、己は元に戻つて全てが否定されたのだ。新たな生き方を見出す他はない。

欲が多過ぎるのか。これ以上に何を求めるのか。ここに満足して後に残るのは老儒官の廉恥心を失った面だけではないか。事実はそのと異なるのか。だからそれを見よとてこの鏡を置いていったのか。

決してそうではない。彩霞はそのようなことをしない。新しい生き方を開いてくれると期待をかけた娘だ。彩霞しかいなかったのだ。

本来そこに己の人生があるべきだった莊園を伍七と鄭郎に託した。帰路を断った。春琴は狐潭に残した。春琴は狐潭の風光の中で安らぎを得ている。もう煩わせるようなことがあつてはいけない。『秦婦吟』とともに生きること
も終わった。

始めよりしかるべき生き方をしていればいまは晩成に到達してよい年齢である。この年になってから新しい生き方を思わねばならないとは。

独上小楼春欲暮

この春の終わりに、ぼつねんと楼閣に立ち

愁望玉関芳草路

玉門関に続く草原の道へと愁いが馳せる。

消息断

来るべき消息は断たれ

不逢人
会えるはずの人はいない。

却斂細眉帰繡戸
何も見せてくれなかった目を閉じ部屋に戻る。

海棠の咲く春に彩霞がこのように歌ったのは、父に最後の別れを告げるためだったのか。そうでなければ、突然、父を訪ねて詞を歌ったりはしないだろう。

そのとき気づくべきだったのだろう。このように鏡とともに残されることをあらかじめ知っておかねばならなかった。虢州から離れずにいることもあり得たろうか。

元には戻れない。

彩霞はなぜ西方に向かったのか。婆羅門僧は仏蕃だったのか。仏蕃であるのならば、またも己は従い損なったのか。彩霞とともに仏蕃に帰依する最後の機会が、汴州にいつている間に失われたのか。

鏡は彩霞の心を語ってくれない。鏡を見れば、そこにあるのは己の顔。ここに映る己から逃れられない。

この鏡に彩霞は何を見ていたのか。そして、彩霞の母は何を見ていたのか。韋荘は身を震わせる。

望んでいたのか、望んでいなかったのか、ともかくにも鏡に映るのはいまのこの己で、他の己はどこにもない。これ以外の己がどこかにあると思いたがっても、存在しない。彩霞も彩霞の母も鏡を見てそうと知ったのだろう。彩霞の母は自ら命を絶ち、彩霞は西方への旅に出た。己はどうするのか。

何よりも掌書記であらねばならない。鏡を見て考えている暇などはない。汴州往復の長旅の疲れも見せずに、多忙な日々を送る己がいる。これが現実にも唯一存在する己だ。他の己がどこかにあるのではない。

勇ましい將軍連中には目算違いであったろうが、汴州から帰り王建の手放しの賞賛を受けた。民衆も戦が回避されたことを歓迎し、韋荘の名が大いに知れ渡った。人々に幸せを与えたいとの思いは少しばかり実現できたと、せめてもの心の支えとする。馮涓は不満げで、唐朝に不実であったことは韋荘も自覚している。

朱全忠が送ってくる使者を迎えるのが次の役目である。汴州や洛陽のありさまを聞いた王建は、それに負けぬだけのものを見せてやらねばならぬと言う。使者が通る道から成都までを大いに飾り立てるべく韋荘は奔走する。

汴州からは王殷（おう いん）がくる。文官として李振、敬翔に次ぐ第三の人物で、骨柄の堂々とした点で二人を凌ぐ。朱全忠に命じられたのだろう、王殷は何かと蜀を見下す姿勢を露わにする。汴州にいった際の韋荘と大いに異なる。

成都城の画紅門に上り、蜀軍の盛んなことを王殷に見せる。王建は欄干より身を乗り出し、門の下を行軍する蜀軍の編成を自身で説明する。王殷はふんぞり返ったまま、

「蜀の甲兵の鋭きありさま、いやはやまことに感服つかまつた。さすがに錦官城の名に恥じず、美々しき衣装に目が覚めました。されど、錦は女に纏わせた方が栄えましようかな。他所事ながら、軍馬の乏しさにはいささか心もとなく感じさせられました。これは某があるいはうっかり見落としまし

たのでしようかな」

王殷の言葉に王建は欄干を軽く叩いて振り返り、

「御覧の通り、蜀は山また山の地。騎馬を用いるによろしい広い場所がありません」

「男児として、中原に鹿を追うお志がもとよりおありでないのなら、確かに馬は御無用でしようかな」

王殷は笑う。

二人の後ろに控える韋莊は、

「ここ数日ほど成都としては珍しく晴天が続き、土が乾き切っておりますので、大事なお召し物を埃で汚してはと、今日は、某の一存で馬を控えさせました」

王建はうなずき、王殷の肩の塵をゆったりと払い、

「蜀にあるのは田舎のこととで駄馬ばかりです。ただ、険しい山坂に耐える脚力だけは自慢できます。蜀の十里は平地の千里にも当たりましょうか。御

所望とあれば、駄馬の一万頭ばかりを率いて、朱全忠どのの御覧に入れるべく参上いたすのも一興でありましようか」

「それはまことに結構なお話。しかし、わざわざ労をかけていただくには及びますまい。我がこの目で蜀の馬の壮健なところを拝見し、帰ってから汴州の者どもに吹聴するようにしましょう。蜀の勢いの盛んなことを余さず伝えるのが、かく歓待いただきました某の務めでありましようから」

王殷は愉快そうに笑う。

「では近い日に、蜀の駄馬どもを御覧いただきましようか。塵除けの天蓋を御用意いたしますほどに」

王建も笑って応じる。

その日より連夜の酒宴。王殷が成都に留まる間に、韋荘は、官馬であろうが私馬であろうが、ありとあらゆる馬を成都に集めさせる。將軍たちは必ずしも協力的ではなく、王宗儒や赤虎亭の女將に力になってもらう。

王殷が成都を発つ日、見送りがたがた王建は星宿山へと誘う。

王建は遠くの土煙を示し、

「いつぞやのお約束を覚えておられましょいか。たまたま我が騎兵の一隊があのあたりで訓練に励んでいるようですよ」

高台に設けられた立派な天蓋の下へと王殷を案内する。

そこに姿を現したのは、賑々しく飾られた馬およそ一万二千頭。延々と続く馬列にさすがの王殷も呆然とする。

それより国境に達するまで、韋莊は王殷に同行し、蜀の盛んなところをことさらに見せる。

成都に帰って、さすがに疲労のためであろう、体調を崩して寝込む。王建は蜀で第一と言われる名医に診察させ、高価な薬を届けてくれる。そうまでされてはおちおち寝ていられず、早々に職務に復帰する。

八月、朝廷からの使者がくる。蜀王の爵が王建に授けられる。修好が成ったことで、朱太岳が朝廷に働きかけたのだ。唐朝の仕来りに精通する韋莊が、朝廷の使者を迎える。王建はお上への恭謙ぶりをことさらに示す。

息つく間もなく蜀の統治機構の整備に着手する。馬の手配の一件で、成都と地方の連携がうまくいっていないことに痛感した。地方の統治は仮子たちに任されている。王建を父とする家族は愛の紐帯で結ばれ、蜀は王建の意思のままに動くはずなのだが、実際はそうではない。掌書記は軍政に手が出せないのも、中央と地方との文官の繋がりを良くする工夫をする。それも容易なことではない。

秋の半ば、貫休が成都にくる。

物見高い連中が貫休を出迎える。錢鏐とも成汭とも大喧嘩したことは良く知られている。成汭は大艦隊を組んでの遠征であえなく戦死し、貫休は相をよく見ると、評判はますます高い。荊州は他の者の手に落ちたが、幸いにも李洵一家は無事だ。

貫休は数人ばかりの弟子を従え、粗末な修行僧のなりで成都の城門を潜り、集まった人々に向かって、

「ちと腹が減りました、成都には蕎餅子があるとか。楽しみにしてきました

が、どこで売っていますかな」

人々はわいわい言いながら貫休を店へと案内する。自ら銭を出して購ひ、弟子に分け、口をもぐもぐさせつつ町の中へと入っていく。王建からの使いの者が貫休を幕府の建物へと案内する。

旧き馴染みの韋荘が第一に会う。婺州で別れてから八年が経った。

疲労で寝込んでより老いを強く感じているのだが、貫休は以前よりも若返ったかようだ。汴州の相国寺で会ったところに戻ったような精悍な顔付きであり体型である。初心に返って修行の旅に出ると、蟻光への手紙に書いてあったのはまことを告げるものだったのだ。痩せただけに、目が一段と大きく見え、錢鏐でも成納でも恐れはせぬとの鋭い光を放っている。

一別以来の挨拶をしているところに、馮涓が入ってくる。韋荘が座を譲ると、貫休はやおら進み出て、馮涓の手を掴み、

「おお、この手である。この手である。昔と少しも変らぬ」

馮涓が慥然としたにも構わず、掌を返したり、撫でたり、あるいは指を捻

ったり、爪を押したりとしきりにいじりまわす。馮涓は不快そうに咳払いをする。それでも、馮涓の両手を弄び続け、甲を抓るに及んで、

「失礼ながらお目にかかるのは今日が初めてと存じます。何の挨拶もせぬうちに、かような手荒な真似は御容赦願いたい」

馮涓は身を揺すって手をほどこうとする。

「何をおっしゃいます。今日が初めてではござらぬ。幾度このように致しましたことか。わしとそなたは叔父と甥の仲。そなたはわしの甥っ子。いつの世のことであったか、いまはまだ定かに思い出しはせぬが、この手の感触ばかりはしかと覚えております」

馮涓の手を強く引いて、ぺろりと舐める。

「ほうほう、この味、この味」

馮涓は顔を真赤に染め、貫休を突き退け、袖を払って立ち、

「我が手をこの似非坊主に触られたのはこれが初めて。まして舐められるなど、汚らわしいものほどがある。今後二度とお目にかかることはありませんま

い」

足音高く出ていく。

貫休は何事もなかったかのように、韋莊との話に戻る。荊州の淑娥や、蟻光禪師のことなど、花にまつわることを言ううちに、貫休は王建が待つ奥の間へと案内される。

貫休はためらうことなく上座に付く。王建が下座で迎え、その後ろに韋莊が控える。一緒に並ぶはずだった馮涓は姿を見せない。

王建が挨拶する間、貫休は瞬きもせずに正面から顔を見据える。

王建の言葉が途切れると、

「愚僧はこれより九年の後、すなわち八十一歳にして、この成都において身まかります。蜀王どのには、一つ御面倒ながらも、愚僧にとつて無用となつた亡骸を埋める場所を、お頼みせねばならぬと、まかり越しました。お聞き届けいただけますかな」

「某が九年先にも生きておりましようか」

「そうならぬと知っておれば、もとより蜀には参りません」

王建は笑い、

「これは愚問でありました。委細承知つかまつりました」

「臨終に際し愚僧が見たのは、冬のものであるか、春のものであるか、夏のものでもあるか、秋のものであるか、判然とはせぬものの、月の光。されば、望月の晩に死ぬと御記憶願いたい」

「その折に、某より大師号を贈らせていただくことはお許しただけましようか」

「土の中より起き上がり、いらぬとお返しする訳にもいきまますまい」

「されば、禅月大師さまとお呼び申すようになりましょう」

王建と貫休の間で何か通じ合ったのか、貫休は成都に居場所を定め、王建は立派な寺を寄進する。

貫休が管主となった寺には名のある僧が続々と訪ねてくる。それにつられ文人も多く集いくる。才がありながら報われぬ人々に、ふさわしい処遇が与

えられるよう韋荘と貫休は王建に働きかける。旧いものを尊重する王建はいずれの人々をも厚遇し、ますます人が成都へと流れくる。

十二月、張濬の息子の張格（ちょう かく）が逃げ込む。張濬はかつて李克用が無謀な戦を仕掛けて失敗した宰相で、それ以来、都を放逐されたままになっていた。近頃、東方で朱全忠に反発する動きが散発的に生じるのは、張濬が画策しているからだ。朱全忠は疑い、潜伏場所を探し出して殺害した。息子はかろうじて難を免れた。張格に聞けば、張濬が陰謀を仕掛けていた事実はないものの、朱全忠が皇位篡奪を企てていることに切齒扼腕し、酔うと大声で朱全忠を罵っていた。その昔、張濬が李克用との戦に踏み切ったのは朱全忠に後ろ盾を仰いでのことだった。朱全忠はかつての縁など構わずに邪魔と見れば殺す。

天復四（九〇四）年一月、崔胤が殺される。崔胤は朱全忠とともに宦官を誅滅してから、朝廷を正しい姿に戻すべく禁軍の増強を図っていた。それは朱全忠の目論見と相反するものだった。

崔胤は唐の再興を誓い合ったかつての同志だ。崔胤はその志を保ったまま長安で死に、己は朝廷を去って成都で生き続けている。

朱全忠は、皇帝に洛陽への御幸を願い出る。事実上は無言を言わさぬ命令だ。都には一人も残ってはならぬとされる。人々は街路に立ち、「崔胤のせいでどうしようなくなってしまった」と罵り叫んだ。

皇帝が長安を出ると、たちどころに宮殿が取り壊され、材は渭水に流されて洛陽へと運ばれる。

皇帝は華州に入る。かつて韓建のために幽閉されていた町だ。民衆は久しぶりの皇帝を「万歳」をもって出迎える。皇帝は、

「道に立って迎えてくれなくて良い。朕はもはやおまえたちの主ではない」と、泣く。

皇帝は、ある年の正月の宴で、

安得有英雄　英雄はどこにいるのか

迎帰大内中　大内に迎えてくれる者は。

と、歌った齊雲楼に登り、俗謡を口ずさみつつ泣く。

紇千山頭凍殺雀　　紇千山の寒さは雀を殺してしまうのに

何不飛去生処樂　　楽な場所へとどうして飛んでいかないのか。

「雀はその気になりさえすれば飛んでいける。朕は漂泊することさえ許されない」

傍らの笏を手に取り、その心を記す。皇帝の涙に濡れたその笏が成都に届けられる。

「いかにすべきか」

王建は韋莊に問う。

「お上の御親筆に相違ありません。帝がお記しになったものはすなわち詔にすぎません」

「お上を成都にお迎えするのにか」

「臣下としてそうすべきと存じます」

「朱全忠どのとの修好はいかになるのか」

「節度使間のお約束は私事にございませぬ。詔は公のものにございませぬ」

王建は逡巡する。王建は必ず筋を通す。朱全忠と干戈を交えぬ約束をした。皇帝を成都に迎える挙に出るのは、朱全忠との戦いを辞さぬと明らかにするに等しい。一方で、皇帝の命は重んじなければならぬ。

皇帝の即位以来の日々を韋莊は語る。この十二年間の皇帝の難義は韋莊の自身の難儀に重なる。韋莊には悔いがある。修好は成都の民のためになった。しかし、馮涓が反対した通りに、朱全忠を利したのだ。馮涓は唐臣としての節を失うまいとした。己はそうではなかった。この上、皇帝自身が記した筋を見て、何もしないでいては、皇帝より進士及第を賜った者として、生きていく価値がない。己にもなお忠節のかけらがあると示す最後の機会であろう。皇帝の悲運に王建は心を決め、皇帝を迎えるための車駕を急行させる。皇帝が潼関を出てしまえば、そこから東は完全に朱全忠の手のひらの内、万事休すとなる。蜀の一行は、興平で朱全忠の兵と遭遇する。戦に及ぶべきか成都との間に人が行き来し、皇帝は潼関を越える。

韋莊は落胆するも、こうなると予想していなかった訳ではない。もしも間に合えば、蜀は国運を賭けた重荷を負うことになる。成都の民の平穩を思うのならば、皇帝への思いは見せ掛けだけにしておくのが掌書記として正しい判断である。

皇帝は陝州において朱全忠の出迎えを受ける。皇后は朱全忠の膝にすがり、「我等夫婦の命をそなたに委ねます」

と、泣く。

陝州は虢州の東隣だ。虢州の莊園に残っていたならばどうしたか。二本柳の場所に出て、官道をいく皇帝一行を涙とともに見送っただろうか。皇帝に何もできない点は変わりなくとも、心に誠実であるかどうかは雲泥の差だ。いま外見はお上のためを為すべきを為そうとし、実現を阻まれた。内心は虚飾であったと恥じ、こうであってよろしいと計算するもう一つの内心もある。内と外の全てが乖離している。こうであって己は一体何であるのか。

彩霞が成都を発つてから間もなく一年、残された己は新しい生き方を見出

さぬままに、日々を多忙の内に過ごしてきた。それは一つの所に留まっていたのではなく、一日ごとに忌むべき陥穽へと己を追い詰めていくものだったようだ。得意とする早見えの手の積み重ねの結果であろう。

「万策尽きました」

韋荘は観念して石を置く。

「そこでよろしいのですか」

「他に良き術がなく、止むを得ずです」

韋荘は盤面より目を離す。これ以上見えていても、打開できぬ局面に、先に置いた石を悔やむだけだ。己自身でこのようにしてしまった。

貫休の大きな目がぎろりと動く。この目は、韋荘と言う男は初めからこうであったと見抜いていたのだろう。

貫休は石をつまみ、腕をぐいと後方に回し、大きく半円を描かせながら前方へと伸ばしてくる。太い指に力が籠る。いざと言うとき、この大仰な動きを見せる。韋荘が覚悟する場所の真上で、貫休の指がぴたりと止まる。

「はて」

貫休は呟き、腕を折って石を額の中央に当てる。

勝負は決しているはずだ。貫休が成都にきてより時折このように碁を打ち、勝ったためしがない。

貫休は考えあぐねたようにふっと息を吐き、膝の上に手を置き、

逸格格難及　　格を踏み外した碁では及びもつかぬ

半先相遇稀　　黒を持っても滅多に互角とはいかない。

落花方满地　　落花が地に満ち

一局到斜暉　　日が傾くまで一局が続く。

静かに詩を誦じる。

あたかも韋荘のことを詠むようだ。

「これは、どうやら、万策尽きましたか」

「その通りです。私の負けです」

「いやいや、それは愚僧の方。こうなりましては、こちら側に座るのが古の

楮胤でも挽回はできませんまい」

貫休は碁石で鼻の頭を叩く。

「何をおっしゃいますか。黒が勝ちになる道理はありません」

「でしょうか」

「先ほど置かれようとされたところ。それで決まりと思いますが」

「愚僧もそう思いかけていたのですが、格を逸した碁は条理にもとると気付かされました」

「そのような難しいこともなく、明らかです」

「何はともあれ、置いてみますか」

大きな音を響かせ、貫休は白を据える。そこであるならば、ここしかないと思っていた所に黒を静かに置く。貫休はその指を押さえ、

「やはりそうお考えでしたか。そこならば愚僧の勝ちとなりましょう」

「どこでも、より悪くなるだけでしょう」

「ここならば、どうなりましょうか」

貫休は黒を横に移す。韋荘は首をひねる。

「こうなると、愚僧はこうするより致し方ありません」

貫休は勘違いをしているのか、わざと不利にしていくかのようだ。

「そこでよろしいのですか」

腑に落ちないながらも韋荘は応接し、貫休はさらに意表外の所に置く。数手進んで、貫休は腕組みをして思案顔。やはり間違っていたのだろう。

「うん」と唸ると、また詩を誦じる。

褚胤死不死　　褚胤は非業の死を遂げたが

將軍飛已非　　その碁はいまも不滅だ。

今朝漸一行　　今朝は碁の真似事をしただけのこと

無以造玄微　　奥深いところに到達できはしない。

誦じ終わると同時に、例によって腕を大きく回し音高く石を置く。韋荘は目を見張る。有利になったと思ったのは束の間であった。

「やはり万策尽きていました」

「楮胤が究めようとした玄微に照らせば、愚僧の碁は似非なるもの。逸格の碁が惑いへとお誘い申したようです」

韋荘はいささかの矜持を保とうと、

「これは自ら招いた負けです。玄微に照らすまでもありません。己の拙い手に絡みつかれて、抜け出せなくなりました」

「似非は大賢に勝ることはあっても、大愚には到底及びません」

「碁は人を映すとか。晩成に至る佳き手があるいはあったとしても、己自身の故に逃してしまったのでしょう」

「智を排さねば玄微には至りません。晩成とは、情の欲するに任せて格を逸せぬ者のみが成し得るものでありましようか」

「私如きは深い陥穽に落ち、救いにくる者としてなく、一人悔いるだけです」
貫休の大きな目がまた韋荘を見捉える。この目を避けようとしても無駄だ。

「西方に旅立った人をお考えでしたか」

意識してはいなかった。しかし、そうであったようだ。

「おわかりでしょうか」

「愚僧も見限られた一人でありますから」

貫休は笑う。

「娘は何を求めにいったのででしょうか」

これまで貫休に尋ねることはなかった。父でありながら聞くのが憚られた。

「まさしく愚僧に知れることのない玄微のためでありましょう」

「仏蕃上人さまだったのでしょうか」

「否定する理由はありませんまい」

「仏蕃上人さまならば天竺の民を救うために帰っていかれたのでしょうか。娘

はなぜ従ったのでしょうか」

「愚僧が見限られたのです」

貫休は穏やかに言う。

「そうなのでしょいか」

「自らの足を磨り減らして大地を経巡り、出会う一人一人の民を救おうとの

志の高さにおいて、愚僧は仏蕃どのに及びません。仏蕃どののは己が身を風雨に曝し石に眠り、愚僧は大屋根の下にあつて暖かな夜具にくるまつて眠ります。堂々の大伽藍を頂戴し、安座して、千人万人の大衆が押し寄せてくるのを待ち、似非な説法をする技の巧みさにおいて、仏蕃どののは愚僧に及びません。それ故でしょう」

「娘に置き去りにされた老いた父はいかなる苦行に耐えたら良いのでしょうか」

「かように閑暇を持て余し、碁に時を費やすのは、仏蕃どのにとっては耐え難き苦行でありますよ」

貫休はいまだに計りようがない。真か似非か、問うことさえできない。彩霞が仏蕃上人を選んだのならそれは理解できる。仏蕃上人に帰依する思いを己も幾度か抱いた。貫休には一度もない。しかし、揚州において迷妄の底に達したときに初めて迷妄の外に出られると教わって以来、貫休に多くを助けられてきた。いまもだ。

紙を取り、一篇の詩を認める。

新春新霽好晴和 新たな春は新たに晴れてまこと好天

間濶吾師鄙吝多 気楽な吾が師には俗なところがある。

不是為窮常見隔 しばらくお会いせずにも気になされぬが

祇応嫌醉不相過 酔ってお寄りせぬのだけはお嫌いになる。

雲離谷口俱無著 雲は谷から離れてはおるべきところがなく

日到天心各幾何 日は天心に到ってどれほどいられようか。

万事不如棋一局 万事は碁の一局にも及ばぬ

雨堂閑夜許來麼 雨の降る夜にまた伺うとしましょう。

貫休は読み、

「では、次は雨の夜に」

と、立ち上がる。

「谷を離れてしまった雲には、消えることしか許されていないのでしようか」
「今日の碁に全てが見えます。これも偶然のしからしむるところか、玄微の

現れの一つか。窮地の先で、本然の真へと立ち戻るやも知れませんが」

貫休は笑う。その意は掴みようがない。

それは似非であるからか。似非とすれば貫休一人ではあるまい。王建も似非者、そしてこの己もだ。三人の似非者が成都にいる。

成都は平安である。民のためにこれでよい。死に至るまでここに身を置くのが、己の残されたありようなのだろう。他に何があるうか。万策尽きてここに至ったのか。それとも、これが誇るべき晩成なのか。己の手に絡み付かれて、陥穽より抜け出ることができない。つまり、迷妄の底に達したと言うことなのか。ならば突き抜けられるのか。似非であるとの自覚に至れば、真に立ち戻れるとの貫休の教えなのか。

ここにいかなる理屈を並べようとも、いまとなつては内外の乖離は、外に内を近づける以外のやり方では繕いようがなくなつたようだ。

乱世時偏促

乱世にことさら時は早く

陰天日易昏

曇り空はすぐに暮れる。

無言搔白首

無言で白髪頭を掻き

憔悴倚東門

憔悴して東の門に倚る。

冬の夕日が西の雲に消え、川の流れに小暗い闇が忍び寄る。

「どう思ukai」

ゆっくりと振り返り、その拍子によるける。綜が支える。

「風が冷たくなってきました。早く乗り物に戻りましょう」

「いまの詩は、いささか杜甫を思つてのものだ」

綜に腕を取られつつ、芒の枯れ痕を踏み、別の詩をまた吟じる。

錦里先生烏角巾

私、錦里先生は黒い角ばった頭巾をのせる

園收芋栗不全貧

畑から芋や栗が採れるから全くの貧乏ではない。

慣看賓客兒童喜

お客がきて、いつものあなたであるから子どもらは

喜び

得食階除鳥雀馴
雀は馴れて階の下で餌をついばんでいる。

秋水纒深四五尺
秋の水は四五尺の深さしかないので

野航恰受両三人
二三人の乗る小舟なら浮かべられる。

白沙翠竹江村暮
白い砂と緑の竹、川べりの村は暮れた

相送柴門月色新
柴門から送っていくと、月がちやうど昇ってくる。

「これは杜甫の詩だ。草堂の柴の門はここらあたりにあったのだろうか」

成都の旧き名の錦官城に因み、眼下を流れる川は錦江とも言われる。その川沿いの村を杜甫は錦里と呼び、錦里先生と自称した。

「言い伝えではこの場所に建っていたとのことだ」

「再びここに草堂を建てると言ったら、どう思うかい」

「その時がきたのですか」

「そうではない。その時などきたりはしない」

綜の手を振り切るようにして歩み出し、首を振りつつ、あたりを検分する。

「あれは三年前の秋だった。百花潭で釣り糸を垂れたとき、草堂跡に行くの

はまだ早すぎると言ったのを覚えてるかい」

「ええ。ですから、今日はここにお越しになると聞いて、少々驚きました」

「ここにくるのはいまもまだ早いと、そなたも思っているのだろうか」

「正直、そう感じています」

「草堂を建てるのはそれ以上に早すぎる。最もよろしくないと言うべきだ。だから建てようと思う。おかしいかい」

韋荘はよろりと綜の腕にすがり、

「ここらの木は杜甫が風除けに植えたものなごりだろうか」

綜は伯父の横顔を覗き込み、

「余り思い詰めませんように」

「杜甫の心を、その当時において、誰が知っていただろうか。百年余りを経
ていま誰が知ろうか。少なくとも私は知らない。そう知らないのだ」

木立を離れ、川べりへと向かい、

「この私の心を誰が知ろうか。蘭くんがここにいてくれたらわかってくれる

だろうか。春琴ならどうか。平陽公主のように生きようとしていた春琴がわかるものではあるまい。隻念さまが描いて下さった画を狐潭に残してきてよかつた。この老残の身は春琴には見せられない。綜、そなたはどうだ。わかってくれるかい」

綜が答えるのを躊躇する間に、韋莊は自ら言う。

「わかってくれなくてよい。この無残な生き様は誰かわかるようなものではない。そなたに甘えてはいけない。いまほど杜甫から遠くに離れたことはない。偶然ではあつたが、時折、杜甫の人生と交差することがあつた。そのたびに杜甫には近づけぬと思ひ知らされた。成都にきて、少しでも杜甫に近づけ得たと思えたならば、ここにこようと考えていた。ますます遠ざかつていくばかりだ。そのことを深く己で知るために、ここに草堂を建てようと思う。そうしなければ、己は杜甫に恥じることさえ忘れてしまひそうだ。これ以上落ちぬためにそうする他ない」

綜は韋莊の体を両腕で支え、

「余り思い詰めませんように」

再び同じことを言う。

「これで決心がついた」

粽の腕を払い、

「ここに門を建てて。そして、ここが草堂の入り口だ。ここに川を見晴らす窓を開けよう」

「退隱なさるのでしょうか」

「杜甫の書を置く棚をここに作る」

草堂の様子を描き、

「漢州にいけばどれほどよいか。藹も喜ぶだろう。漢州ほど良い場所は、他には一つしかない。漢州にいつて、そなたと毎日釣りをし、時にはそなたの子に論語でも教えてみようか」

「是非そうなさいませ」

「それはできぬ。為さねばならぬことがある。杜甫からますます遠くなるこ

とを為さねばならぬ」

「それは伯父上の為さりたいことと違うのではありませんか」

「そう思っかい」

「退隠なさってください。伯父上はもう十分にお働きになりました。成都にいらして、この先どうなりましょう。退隠なされば、杜甫に近づけるのではありませんか。このままでは伯父上は苦しまれるばかりです」

「苦しみか。恐らくはそれをいま求めているのだろう。居るべき場所がそこにあると知るからだ」

川に向かって立つ韋荘の体を綜が背後より抱える。

「さあ、参りましょう。お体にさわれます。伯父上のおっしゃること、僕はしかとわかっております。是非そうお考えなってください」

「そうなのかい」

「ここに草堂を建てること、僕に任せて下さい」

「そうかい、それは有り難い」

綜に身を委ね、道の向こうに待つ従者のもとへと歩み始める。

数歩ばかりで足を止め、

「貫休どのは大したお方だ。そうは思わないかい」

低く呟く。

唐突なもの言いに、綜はためらいがちに、

「天下に名高いだけのことはあると思います」

「成都もたちまち変わった」

「大勢の方々がこられました」

「貫休どのはこうなるとわかっていてこちらにいらしたのだ。滅びゆく唐に代わる場所を定められた。草堂をここに再建するのは、貫休どのお考えにそうようであるのだが、決してそうではない。それはわかってくれるかい」

「伯父上お一人のための草堂であると思います」

「草堂のこと、そなたにすっかり任せる。どうか貫休どには何も言わないでくれ」

「畏まりました」

「あの方には何もかも見えておられるのだろう。小はこの私のこと、大は天下の行く末。時流に遅れて節度使の息子に殺された元の宰相と同様、滅びゆく唐朝には一片の同情を寄せれば十分であるとお考えのようだ。旧きよき唐の最も優れたものは、あの方とともに成都に集まった。ならば、いまは成都こそが中夏を中心だ。そこに皇帝がいて少しも奇妙ではない。いずれはそうなるう。私は杜甫からさらにさらに遠くへと離れていかざるを得まい」

呻くような声が薄暮の中に虚ろに響く。

皇帝を成都に迎えようとしたのは一年九ヶ月前。唐朝の命運はここに尽き果てようとしている。

昨年の四月、皇帝は陝州から洛陽に移った。皇帝は、皇后が妊娠したのを理由に移動を遅らせようとした。朱全忠は許さず、陝州を発つ前の晩に、皇帝は最後の抵抗を試みた。朱全忠を皇后と二人だけの部屋に招いた。韓建が同行した。皇后は玉卮を差し出して朱全忠に酒を勧めた。韓建が朱全忠の足

を蹴った。朱全忠は呑んだふりをし、大酔を装って退席した。毒殺は失敗した。

このころに皇帝が書いたと思われる詔書が、後になって成都に届いた。

「これより洛陽にいけば、詔勅は全て朱全忠の手より出ることとなり、朕の心は外に一切通じなくなるであろう」

救出を求める墨跡に韋莊は泣いた。しかし、もはや動きようがなかった。

皇帝が陝州を出て六日目、穀水で昼の休息を取った。皇帝と従者はそれぞれ別の帷幄へと導かれた。皇帝が食事を終えると、二百人の従者は着る物と同じでも、全て別の人間と入れ替わっていた。二百人は帷幄の内で縊り殺され、朱全忠の部下が衣を替えて皇帝の前に現れたのだった。

皇帝は完成したばかりの洛陽の宮殿に入った。それを言祝ぎ天祐と改元した。成都では朱全忠の非道を認めず、天復の元号を使い続けた。

皇帝が去った長安を取るべきか、成都で議論が交わされた。韋莊にとって不快な話だ。幸いにも、軍事上の事柄には関わりを持ってない。威勢のいい将

軍連中は、放っておけばいずれは李茂貞の手に落ちてしまうのだから、先に取ってしまうべきだと主張した。皇帝を抱え込んだ朱全忠には潼関を越えて戦う余裕がない、いまが好機と言う訳だ。言わば火事場泥棒のような作業は筋が通らないと王建は思ったのだろう、珍しく馮涓に意見を尋ねた。朱全忠との修好に反対してから馮涓は影が薄く、しかも貫休と最初の日には仲違いして、何かと王建の意にそぐわない。それでも、旧くからの文臣として尊重し、ここぞと言うときには問う。馮涓は、「兵は凶器にございます。民を損ない、財を費やし、窮まるところがありません」と、高い理念を掲げ、戦は避けるべきと、將軍連中の前を憚らずに主張した。さらに、李茂貞と姻戚関係を結び、力を合わせて朱全忠の動きを牽制すべきだと言った。將軍連中は猛烈に反発した。これまでに幾度も戦ってきた李茂貞と同盟を組むなど考えられない。馮涓は自説を依怙地に繰り返した。王建が決断した。「李茂貞は庸才ではないが、強悍の名はまだ天下にあり、遠近の者は畏れておる。朱全忠と争う力はなくとも、自らを守る力は十分にある。それを我等を守る垣根として使

うのは利が大きかろう」。馮涓の言うところを採用した。

王建は戦を避け、朱全忠のもとに改めて修好を確認する使者を送った。

八月、偶発的な事件によって皇帝が死んだと、朱全忠が天下に告げた。裴貞一（はい ていいつ）と李漸栄（り ぜんえい）という二人の女官が、逆恨みで皇帝を刺したと言う。

しばらくすると、異なる顛末が聞こえた。事實は朱全忠の將の蒋玄暉（しよ うげんき）が殺したのだ。蒋玄暉は「皇帝に会いたい」と宮殿の門を叩いた。応接に出たのが女官の裴貞一だった。武器を手にした百人ばかりの男を見て、裴貞一は「これは何事ですか。剣を捨ててお帰りなさい」と一喝した。その言葉が終わる前に、蒋玄暉の部下の史太が裴貞一を斬った。中に踏み込み、「皇帝はどこだ」とがなり立てる蒋玄暉の前に立ちはだかったのが李漸栄。「私を殺しても、お上を傷つけてはなりません」。皇帝は酔って寝ていた。単衣をまとい、柱を巡って走った。史太（した）が皇帝を斬った。皇后は蒋玄暉にすがって命乞いをした。蒋玄暉は皇后に令旨を書かせ、皇帝の第九番目

の息子を次の皇帝として即位させた。

皇帝の死を聞いた朱全忠は汴州より洛陽に急行した。棺の前で慟哭し、裴貞一と李漸栄を乱の首謀者として、死骸に改めて刑を加えた。

それから十ヶ月後、朱全忠は白馬駅において、唐朝の高官二十四人を黄河に叩き落とした。最後まで皇帝に忠義を尽くそうとした清流派の人々だ。黄河の濁流に呑み込まれる人々に向かって、李振は、「おまえたちが清流を自負するのなら、この濁流を澄ませてみせるがいい」と、言い放った。

李振は貢挙の落第者だ。進士及第の優秀な人間ばかりが揃う清流派を憎悪していた。韋荘も李振には嫌われた。韋荘は長安を離れるに際して、皇帝より進士及第の詔を得て劉得仁の墓を祀った。貢挙の恨みはそれで消えはしなかった。

従弟の愠を憐れむ気持ちちが一段と強まった。李振に誘われて汴州にいった愠はいかなる苦しみを味わったのか。愠が華州から汴州に移ると決めたことに、彩霞の手紙が関係しただろう。愠はあるいは己のために汴州にいつてく

れたのか。華州で愠が話していた寓話を思い返せば、愠には、彩霞の母の愛に応えられなかった深い後悔があったに相違ない。彩霞の母にも愠にも幾重もの苦しみを与えたがこの己だ。

己は李振にさえ劣る。最後は立派な終わり方の愠に対し、この己はいかなる終わり方を見通せるのか。

そして今月、すなわち天復五（九〇五）年十一月、朝廷から先帝の亡くなったことを伝える正式の使者が初めて送られてきた。告哀使の司馬卿（しばけい）である。先帝が死んで一年半以上も経つてからの使者にどう応接すべきか、国境の関から王宗縮（おうそうく）が照会してきた。

王建に尋ねられ、韋荘は、関から追い返すべきと答えた。静かに喪に服し動揺せぬよう教え諭すのを主旨とした使者である。各地に広がりつつある反感を気にしていまになって朱全忠が送り出したのだ。王建は同意した。

司馬卿に告げるべき言葉を書いて王宗縮に送った。

「我等蜀の民は長く主上の御恩を蒙り、お上がお着物に記された宸翰は新た

なまま我等のもとにあり、お涙の跡をいまでもありありと見てとることができません。犬や馬でさえ主人に報います。人として臣であり子である我等がそうでないはずがありませんか。去年三月、主上は都をお立ちになり、我等は二十回にわたり、成都にお越しになられるようと捧げ文をお出ししました。ご返事を賜ることのないまま、いまや天地を隔て、叫んでも及ぶものではありません。聞きますところでは、お上が穀水にお出ましになられた際に、臣僚、官僚、千余人が汴州のために害されましたか。洛陽に至りましては、痛ましくも弑逆に遭われ、そのことを耳にしましてより、我等は食べる物を手にすることなく、戈を枕にして朝を待ち、主上のために讎に報いることだけを考えてまいりました。いまさらにお使者がお越しになり、一体我等に何を宣諭なさろうと言うのでしょうか。ここより進むなり、退かれるなり、御自身でとつくとお考えください」

司馬卿はすすこと帰っていった。

虚しい啖呵だ。朱全忠は皇位篡奪を着々と進め、誰も止められない。

朱全忠が皇帝になった先はどうなるのか。かつて魏、呉、蜀の三国が天下を分け合ったとき、漢の皇族の流れを汲む劉備は、自分こそが天下の正統な後継者であるとして、成都において皇帝の位についた。劉備に三顧の礼を受けてその軍師となった諸葛孔明は、劉備亡き後に、宰相として蜀の国力増強に努め、魏との決戦に臨んだ。数次にわたる遠征は実を結ばず、陣中において没した。諸葛孔明の才をもっても、成都からの天下統一の事業は成らず、蜀はわずか二代で滅んだ。

王建はどうするだろうか。朱全忠に対抗して皇帝になるのか。唐の文化の粹の集まる成都こそが、唐を受け継ぐにふさわしい場所であると貫休は考えている。ならば、成都が天下の中心になるのか。王建は蜀より撃つて出て朱全忠の非道を正すことまでは考えていない。いまの蜀に諸葛孔明に当たる人物はいない。掌書記は国で言えば宰相に近い。己と諸葛孔明では雲泥の差だ。

民衆に慕われていた王宗滌が殺された事件が尾を引いている。父である王建と、子である民衆との距離は残念ながら開きつつある。王建の周囲に佞臣

が増え、後継者を巡る駆け引きも始まっている。劉備の蜀は二代目が暗愚であつたために、諸葛孔明の死から間もなく滅亡した。王建の場合はどうか。長男は早くに死に、次男は粗暴な性格と噂される。一方で、王建には寵愛する徐賢姫がいて、徐一族は賢姫が生んだ子が太子になるのを望んでいる。王建は徐賢姫や寵童の唐道襲のような最も身近な者の言を簡単に信じてしまう。己はそこに立ち入ることができない。

貫休は唐朝の命運に対して冷淡であり、ましてそれ以外の権力者にはなおさらだ。王建が他よりはいくらかましと考えるから成都にいるのだろう。己はどうか。王建を理想の君主とは思っていない。現実には王建に優る者はいない。王建に恩義を感じ、王建に握られた手の感触はいまもある。忠節を尽くさねばと考えてきた。しかし、諸葛孔明のように無私の心で仕えているのではない。高い志も、優れた才もない。かと言って、杜甫のように官職を捨て、真実の言葉に生きると覚悟も持てない。

杜甫は草堂を建てたときにこのように歌った。

万里橋西一草堂 万里橋の西のこの草堂

百花潭水即滄浪 百花潭の水はそのまま滄浪の水である。

風含翠篠娟娟淨 風が巡る緑の竹は娟娟として淨く

雨裏紅蓮冉冉香 雨に濡れる紅い蓮は冉冉として香る。

厚祿故人書斷絶 厚祿をもらっている友人からの手紙は絶え

恒飢稚子色淒涼 いつも飢えている子供たちの顔色はまことにさえない。

欲填溝壑惟疎放 溝か谷に埋もれて死ぬべき私は世間離れがひどく

自笑狂夫老更狂 老いてますます脳天がおかしいのを笑うだけだ。

万里橋とは、諸葛孔明が「万里の征はここより始まる」と、魏の討伐に登った場所だ。その万里橋から西南に離れた場所に草堂は立つと、諸葛孔明への敬慕の念を込めて杜甫は詩を歌い出した。

草堂のすぐ下流に百花潭があり、その水はさながら滄浪の水であると杜甫は言う。滄浪の水とは、遠い昔に屈原が「滄浪の水が澄めば吾が嬰を濯げば

よく、滄浪の水が濁れば吾が足を濯げばよい」と歌ったことにちなみ、俗世間と折り合いのつかなくなつた者が隠遁する水辺であると、杜甫は理解している。

杜甫は自身を「狂夫」と称した。せつかく得た地位を捨て、たかが言葉の組み合わせでしかない詩に人生を賭けるとは、まさに脳天のおかしな者の為すことだ。その自覚が杜甫にあつた。

狂夫となつた杜甫を、厚禄を食む友人たちは見向きもしない。それで子供たちはいつも飢えている。

己こそは厚禄を食む者だ。杜甫の草堂を継ぐ者としてこれ以上にふさわしくない者はいない。だから草堂の再建を決意した。その思いは誰もわかるまい。

いや、外から見てこれほどわかりやすい人間はいない。高い地位に昇つて、もはや貪欲である必要がなくなつたときに、清廉であることをことさらに顕示すべく、隠者ぶる似非者は多い。そのような輩を見て、裏では笑い合ふの

だが、面と向かつては、徳を讃えたりする。実に滑稽ではないか。己の似非も極まったと言うものだ。

目眩を覚え、

「間違っているかい」

綜は大きく息をつき、

「お捨てになつてはいかがでしようか」

「やはり退隱を言うのかい」

「それも一つの手ではありませんようか」

「せねばならぬことがある」

「蘭おじさんの言われた通り、背負い過ぎです」

「蜀の国を整えなければならぬ」

掌書記としてできることはわずかだ。だからこそ、その部分だけはゆるがせにできない。民政、財政を支える官僚の頂点に形式的ではあるにしても己は位置している。民の幸福のために、この官僚の機構はしっかりさせねばな

らない。その思いは確かにある。現実との落差は大きい。諦めてはただ地位を貪るだけの者になってしまう。掌書記にある己のせめてもの自負だ。退隱は安易すぎる。逃げたくない。

「伯父上は、多欲で多情です」

「私がかい」

「だからお捨てになれないのです」

かつて仏蕃に最初に会ったときに捨てるようにと言われた。以来、何かを捨てただろうか。

「ここに草堂を求めるのも一つの欲であろうか」

自嘲気味に笑う。

「草堂の完成を機に、苦しみもお捨てになっただけだ。伯父上のお考えとは逆でありましょうが」

「そなたに何もかも任せたい」

綜の手を強く握る。

「伯父上の思いに適う草堂をお作りします」

「有り難う」

あたりは闇に包まれ、綜の力で乗り物へと向かう。

人に助けられて生きてきた。最後は頼りとするに至ったのがこの甥だったのか。そうでなくても老残のこの身、一人では歩くさえもやおぼつかない。

「**ま**あまあ、全部開けっ放しのままではありませんか。お寒いでしょうに」
林婆さんの顔が窓の外からにゆうつと現れる。

ふつと我に返り、襟元のあたりに手を触れる。寒いのかも知れない。

「風かい」

「どうなさいました。紙やら何やら、風に舞って飛び散らかっているではありませんか。こんなにもびゅうびゅう吹いていますのに」

「そうなのかい」

「しっかりしてくださいませ」

目だけを動かしてあたりを見回し、

「そうだな」

「外は早くも冬の風です。窓を半分ばかり降ろしておきますから、それでも吹き込むようでしたらお閉めください。よろしいですか」

林婆さんは突かい棒を取って覆いを下げる。部屋の内が薄暗くなり、身をすくませる。

「体が冷えたようだ。全部閉めてくれないかい」

「お気をつけくださいましよ、もう御立派なお齡なのですから。やっと良くおなりになったところではありませんか。ここが大事です。後で火を入れてさしあげましょう」

「齢を言うならそなたの方が上ではなかったかい。そなたが外で働いていて、私がぬくぬくと火に当たっていいものか」

「何をおっしゃいます。旦那さまはお国にとって大事なお体です。大切にし

ていただきませんと。こんな婆さんの一人や二人、いや百人、千人おっちゃん
だところでどうってことありません」

「そなたの世話になってばかりだな」

「この婆の仕事ですから」

「そなたは大したものだ。いつも感心している」

「こんな婆さんを褒めても何にもなりません、およしなさいまし」

「本当に有難いと思っている」

「気の利かないこんな婆さんでなく、もつと若い女がお世話して差し上げま
した方がよろしいでしょうに」

「いや、そなたが一番だ」

「相変わらずお上手ですこと。それこそ若い女に向かっておっしゃったら喜
びましょうに」

林婆さんは笑いながら窓を閉ざす。

すっかり暗くなつた部屋に残り、ここでいまままで何をしていたかと考える。

思い出せない。

林婆さんが薪を割る音が外から聞こえ始める。

武成元（九〇七）年十月、浣花溪のほとりに再建した草堂に韋荘はいる。他には林婆さんだけ。ここでは世間との交わりを断っている。

己はいまのことも忘れてしまいうくらいに衰えてきた。林婆さんは薪割りも苦にしない。本当に元氣だが、あれだつて相当な齡だ。随分と長いこと家にいてくれているが、あれがきたのはいつだったのだろうか。

いまのことは忘れても、昔は覚えている。貢奉を受けるために上京し、すぐに東呉くんが連れてきてくれたのだ。とにかく口の達者な妙な婆さんだった。東呉くんの勧めだから、断るのも悪いと思つて置くことにした。まさかこうも長く、あの婆さんにいてもらうようになるとは思ひもしなかった。

そうだ、東呉くんのことを考えていたのだ。窓辺に立ち、浣花溪の流れを見下ろしていた。そのときは風など吹いておらず、まこと朝の穏やかな光に包まれて、水に浮かぶ鳥たちの遊ぶ様が面白く眺められた。それから何時の

間に天候が変わったのか。

どつしりと心を重くするものが戻ってくる。そうだ、これだ。これの耐え難さに、たったいまのことも忘れてしまったのか。

「天下の大道の中央において、再び相まみえる日がなくなったのを残念に思います」

東呉くんからの伝言を聞いたのは十日余り前のこと。太原に送った蜀の使者が帰ってきて、東呉くんと会ったと教えてくれた。

長安の小雁塔での最後の別れに、東呉くんの背に孟子の言葉を贈った。

居天下之広居 広々とした天下にいて

立天下之正位 天下の正しい位置に立つて

行天下之大道 天下の大いなる道を実践する。

いつか天下の正しい位置において東呉くんとまた会いたいと考えた。それはあり得なくなると東呉くんは言う。それでも、この言葉を託してくれたのは、なお友情が続いていると東呉くんが考えている証であると思いたい。

だが、同じ天下の大道を歩いてはいない。己はどこを歩いているのか。しかるべきどこかへと向かっているのか。難しすぎる。そのようなことを考えるだけの気力はもうない。

そこで思考が止まった。

欲填溝壑惟疎放

溝か谷に埋もれて死ぬべき私は世間離れがひどく

自笑狂夫老更狂

老いてますます脳天がおかしいのを笑うだけだ。

静かに杜甫の詩を吟じる。

天下の正しい位置において東呉くんとは会えない。杜甫と遠く離れ、この草堂に住むに最も値しない己だ。

杜甫は官職を捨てて西方への旅に出た。それは何のためだったのか。

彩霞は西に去り、あの鏡が残された。それはどのような意味だったのか、いまもわからない。

心の重さのために、頭は再び明瞭さを失っていき、林婆さんの薪を割る音だけ単調に耳に響くようになる。

韋莊は七十三歳、朝廷から派遣された告哀使を追い返したところと比べて一段と衰えが目立つ。

先帝を殺害した張本人の蔣玄暉が斬られたのは、告哀使が国境からすぐすごと帰っていった翌月だった。蔣玄暉は、皇位を譲り受ける下工作のために、先帝の皇后、すなわち何太后と幾度かの交渉を重ねていた。何太后は自分と息子である皇帝の命の保障を求めた。蔣玄暉は何太后の色香に迷い唐朝の存続を企んでいると、朱全忠に讒言する者がいた。朱全忠は毒殺されかけたことから何太后を憎み、蔣玄暉を殺し、続けて何太后も殺した。

今年の正月、皇帝は朱全忠に使者を送り、皇位を譲る意向を伝えた。朱全忠は辞退した。禪讓においては、謙讓の美德を大いに発揮しなければならぬ。

二月、朱全忠が堅く辞退したにも拘わらず、唐朝は皇位の譲渡を決定した。三月、唐の重臣が揃って汴州に赴き、禪讓に必要とされる儀式を執り行った。かくて朱全忠は皇帝となり、国号を大梁と定め、開平と改元した。唐の皇帝

は済陰王に格下げとなった。

朱全忠の即位を知らせる使者が各地に走った。同盟関係にある王建と李茂貞は、唐室を再興させるべしとの檄を全土に飛ばした。兵を動かす者は誰もいなかった。

王建は李克用に、「各々天下の一方に天子として立ち、手を取り合って朱全忠に対抗していかうではないか。朱全忠を滅ぼしたならば、唐の皇帝を改め立て、我等は速やかに皇位を降り、唐朝を守る節度使に戻るようにしよう」と、手紙を送った。韋荘がその草稿を記した。李克用からは、「生きている限り、誓って節を失う真似はせぬ」と拒絶の返事だった。

李克用は唐朝の恩義を深く感じている。古くは沙陀族が他族の攻撃にさらされて住む場所を失い、東方に逃げねばならなくなったとき、唐朝は沙陀を国内に受け入れ、北辺守備の任を授けた。その恩に報いるため、李克用の父は徐州兵士の反乱の鎮圧に赴き、その功によって皇帝と同じ李の姓を与えられた。李克用父子はその後、周辺諸勢力との軋轢に苦しんだが、長安を占拠

する黄巢を討てとの勅命を得て、李克用は沙陀族を一つにまとめあげ、長安の回復に成功し、独眼竜の名が天下に鳴り響いた。以来、李克用は張濬に無謀な戦を仕掛けられた以外は一貫して唐朝のために尽くしてきた。とりわけ、宦官の張承業と交わりを結ぶようになってから、李克用の忠義の心はますます固くなった。東呉くんは張承業に誘われて太原にいった。

九月、王建は臣下の主だったものを成都に集めた。古参連中は一致して王建が帝位につくのを願った。馮涓一人が、賊臣の真似は断じてしてはならぬと敢然と反対した。韋荘は王建に尋ねられ、自ら起草した李克用への手紙の内容をなぞり、即位することをよしとした。馮涓は顔を真赤にして怒った。「お上より進士及第を賜りながらいかなる不忠の言を吐くか」。韋荘は反論しなかった。馮涓に同調する者はおらず、唐の世ではなくなるのを見るのは忍びないと、屋敷の門を閉ざし二度と外に出ないと誓った。

即位の礼を韋荘が取り仕切った。唐の滅亡を悼んで成都の民は三日間の哭礼を行い、天の命を受けるための壇を築き、王建がそこに登って皇帝となっ

た。国号を大蜀とし、それまで使っていた唐の暦を止め、新しい元号を武成へと定めた。朱全忠が皇位を篡奪する道程を整えたのは李振である。王建のために似たことをしたのが韋荘だ。

王建が皇帝になったことで、蜀の官制は唐朝と同等のものに改められた。王宗佶が皇帝に次ぐ国家の要である中書令に、唐道襲が軍事の責任者である内枢密使に、韋荘が宰相になった。いつか宰相になるとの廬山の愚笠子の予言がこうして実現した。それは、民衆に最も人気のある王宗滌を陰謀で殺した王宗佶と唐道襲の二人と並び、王建の最高の側近として認められる形によってだったのである。

王建が即位したと知らせる使者が成都から各地に送られた。李克用は、「私は唐の皇帝より授かった晋王の地位を守り、唐の暦を使い続ける」と使者に言った。東呉くんの伝言はその使者が聞いてきた。

即位の礼が終わって韋荘は体調を崩した。ようやく起きられるようになったところで、太原にいった使者の帰朝報告を聞き、再び心身の不調を来たし、

宰相としての務めを休んでこの草堂に籠っている。

東呉くんは形としては唐の世がいまも続く太原にいる。かつて韋荘も東呉くんも、唐朝に尽くすのが疑いもなく天下の大道を歩むことであると考えていた。

成都にきたのは王建を皇帝にするためではなかった。しかし、振り返ってみれば、韋荘のしてきたのは王建の即位につながることばかりだった。成都の人々の小さな幸せのために、政治が安定していることが何より重要だ。朱全忠が皇帝として立てば、蜀の地を蚕食されぬよう、王建も対抗して皇帝として立つべきだとの理屈は成り立つ。

唐朝への忠義を貫く点で李克用は王建に優る。李克用が当初の軍事的優位を失ったのは民に対して苛虐だったからだ。伍七の軍務は悲惨を極めた。東呉くんは民政の改善に取り組むために太原にいったが成果のほどは聞こえてこない。王建は理想の天子ではないが成都は安定を得ている。

成都には仏法をもって国家を鎮護する貫休がいる。唐の時代の名族の出で、

『秦婦吟』の作者でもある韋莊が宰相であることは、王建にとって重要な意味を持っている。つまりは、綜が言っていた通り、飾り物である。王宗佶、唐道襲と並び立つ場所から逃れようがない。

「どうされたのです、真暗ではありませんか」

半分眠りに入っていた韋莊は、ゆっくりと目を開ける。淡い明かりが射し込んできている。扉が開かれ、黒い人影が立っている。

「眠っておられたのですか」

綜だ。草堂に勝手に入ってくるのは綜しかいない。

「そうかな」

虚ろな声で答える。

「お体がまだ優れないのでしょうか」

「そうでもない」

「でしたら、窓を開けて明るくしてはいかがですか」

「窓かい。ああ、何だかここは暗いようだな」

綜は窓の覆いをがたがたと動かし、

「どうしてこうも閉め切っておられたのです」

「風が吹いていないかい」

「ああ、風ですか。それですか。途中でひどく吹いていましたが、もうとつくにおさまっています」

「そうなのかい」

林婆さんが窓を閉めたようだったが、いつだったのかはつきりと思い出せない。

綜は明るくなった部屋を顧みて、

「一体どうなされたのです。滅茶苦茶にちらかっているではありませんか」

「そうかい」

瞬きしながら周囲を見る。紙が散乱している。

茶の道具を持って林婆さんが入ってくる。

「伯父上を怒らせるようなことを、おまえしでかしたのか」

綜に言われて、

「滅相ありません。これは風のせいです。薪を割ったら片付けるつもりが、ついつい薪割りに一生懸命になっているうちに遅くなってしまいました。それだけのことです」

綜は紙を拾い集め、

「どうも見ても伯父上は険しい顔をしている。おまえにやはり足りないところがあつて、伯父上が痲癩を起こしたのではないのかな」

「あたしはこう見えましても、旦那さまにお仕えするようになってから十五年間と言うもの、一度だつてお小言を頂戴したことはありません」

林婆さんの声に、次第に頭がすつきりしてきて、

「その通りだ。このごろは、林婆さんのお蔭で、生かしてもらっているようなものだ。感謝している」

「有難いお言葉です」

「伯父上は優しいですな。とりわけ女の人にはな」

「こんな婆さん、女の人の仲間に入るものですか」

林婆さんが笑い、韋莊の顔も少し緩む。

「いや、なかなか大した別嬪だとかねてから思っておる」

「お止めくださいませ。こんな婆さんに世辞をおっしゃいまして、皺の数を倍にして醜く笑うだけです。賑やかな町にお出になって、美しい若い娘を褒めて喜ばせておやりなさいまし」

「この老いぼれがかい」

「この婆さんを相手に日がな過ごしておられるばかりでは、どうしたって老け込んでしましましょう。華やかな妓楼の並ぶあたりにお出になって、美しいおなごを御覧になれば、きっと目も覚めて若返りしましょう」

「まさか、遊里などには」

韋莊は苦笑する。

「宰相さまが遊里にいかれましたは、口うるさい連中が黙っておりますまい」
 綜がやや皮肉ぼく言うので、忘れていたことを無理矢理思い出させられた

ような感じがし、

「宰相として宮中をうろろするよりは、遊里をふらつく方が余程似合うだろうし、全うであるに違いない」

不快そうに言う。

綜は、前言と相反することを言った伯父の顔をまじまじと見る。

「伯父上には何が似合いますしよかな。笠蓑を身に纏って釣りをなさるのがお似合いとは思えません。僧衣も似合いませんでしょう。さりとて、僕の旅籠屋にお越しいただきましてもお似合いのものはありません。この草堂におられるのもお似合いとは思えません」

「この草堂に私ほどふさわしくない者はいない」

ますます不機嫌そうに言う。

「そうなるのですな、やはり、林婆さんが言い、伯父上がおっしゃった通りですか。伯父上に最も似合いそうなお姿を思い描くいたしますのですな、頭にごく柔らかな頭巾を載せ、お召し物はと言えば上等でも見かけは簡素なも

の、さりとして地味ではなく、懐にはたくさんの銀子、袖には珍香がほのかに焚き込められ、ふらりとお出になる先はですな、揚州ならば九里三十歩街、長安ならば平康坊、そぞろ歩きにふと目に止まったのは小粋な店。足を止め遣り手婆さんと一言二言、それで店の良し悪しを見抜き、興に任せて登楼すれば、まずは並べられる盃で軽く口を湿らせ、何か糸竹でもと所望し、一曲か二曲お聞きなり、いよいよ気分がよろしければ、女たちを大勢呼び寄せ、『今宵はどうか、わしが一つ歌ってみようかな』と、よい喉を鳴らして女たちを驚かせる。歌うは纏綿たる情詞。女たちは涙を流す。もう一曲、さらにもう一曲と、女たちに所望されれば気樂に応じ、すっかり満足した頃合いを見計らって、ふいと立ち、銀子をたっぷり置いて引き上げる、伯父上にはそのようなお姿こそがびつたりではありませんかな」

林婆さんは手を叩いて喜び、

「まさに旦那さまにびつたりです」

揚州の九里三十歩街、長安の平康坊にあった己こそが、まごうかたなき韋

荘と言う男だったのかと、ぼんやりと考える。

「私は何歳になったのだろうか」

ぼそりと言う。

綜は林婆さんの顔を見て、

「七十三でありましょう」

「そうかい、七十三か。それで色里遊びは笑われような」

「誰が笑いましょうかな」

「七十三歳こそ大変結構ではありませんか。旦那さまくらいのお年の方が、女にとつては本当はよろしいのです」

「そうなのかい」

「若い殿御ときましては、御自身の欲が強すぎまして、女のことなど何もわからないことが多いものです。根を断ったとか言う昔の儀光さまのことを聞かせてくださったではありませんか」

「なるほど、根が邪魔をするのか。だけど、儀光さまは女に誘惑されたので

はなかつたのですかな」

と、綜が笑う。

「どっちだって同じようなものです」

「枯れ果てたこんな老人なら女も安心と言うことかい」

「伯父上は枯れ果てておられましようかな」

「そうですねえ、小粋なお召しものに替えられて、遊里にお立ちになれば、自ずと渋い色気が外へと滲み出てまいりましよう。女たちはたまらないでしょう」

「林婆さんは、さすがに都で長年苦勞しただけあって、人情の機微に通じておりますな」

「お坊ちやままでこの婆さんをお褒めになつて」

林婆さんは額を叩き、

「そうそう、面白い話があるのですが、いま思い出しそうとして、この婆めも、頭がかなり鈍り、苦勞します。確か、淫らな欲が強くて女の情を汲み切

れなかつた男の話です。うまく思い出せたら、お聞きになりますか」

「面白そうではありませんか。さあ、思い出すまで、気長に待つとしましよ
うか」

綜の言葉に韋荘もうなずく。

林婆さんは茶を入れ、いつものように、都の庶民の間に語られていた話を
披露する。

主人公はよくあるように貢挙の落第生。田舎から出てきて、都での滞在費
が底を尽き、かと言って不合格のままでは故郷に帰れず、青年は思い詰めて、
ある夜、死のうと覚悟を決める。いかにしたら死ねるかと思案していると、
どこから入ってきたものか、寝台の脇に若い女が立っている。驚いたのは一
瞬だけ、女の優しげな眼差しにたちまち心を奪われる。

「まあ、そんなに浮かぬ顔をなさって、どうされたのですか」

と、女が言う。

「訳あって故郷には帰れません。貢挙に合格できなければ死ぬしかないので

す」

我が身の上に泣く。

「せっかく殿御にお生まれになり、才能にも御立派なお体にも恵まれて、他にも生きる道はいくらでもありましように」

女はいろいろに言うが、男の頭の中には貢挙しかない。

「そうまで執着なさるのでしたら、合格できるものかどうか、私が見てさしあげましよう」

「相を御覧になるのですか」

「いえ、あなたのお力が見てさしあげるのです」

女は題を出し、詩を作るように言う。男はしばらく呻って、一篇の詩をどうにか書き上げる。女は一瞥し、微妙に笑う。

「不出来でしょうか」

男は女の顔色を伺う。

女は嘆息し、

「これは一体どのようなお心を歌ったものなのですか」

男は説明しようとしてしどろもどろになり、

「本当は違うことを思っていたのですが、うまく言葉が見つけれなくて、このようになってしまいました」

「それではいけませんね。お考えになっていたことを普通の言葉で言ってみてください」

男が説明すると、女は筆を執ってさらさらと直す。

「これでしたら、お考えといくらか近くなったではありませんか」
見違えるばかりの立派な詩に、

「そうです、そうです。こうしたかったのです」

女は、

「次はこのように御自分でなさってください」

と、別の題を出す。男の詩はやはり不出来で、女が直す。

五篇ほどの詩が成ったところで一番鶏が鳴く。

「今夜はここまでです。また明日の晩やってまいりますから、良くお勉強なさい」

女はふっと姿を消す。

死ぬ気持ちは消え、夜になるのが待ち遠しく、女が約束通りきてくれるかと、一日そわそわしていると、

「昼の間にちゃんとお勉強なさいましたか」

女は出てくるなり尋ねる。男は顔をあからめ、

「実は、食べるものが何もなく、昼間は横になって体を動かさずにいるだけで、勉強どころではないのです」

と、言い訳をする。

「まあ、そこまで困っておいでとは」

女はあきれたように笑い、

「仕方ありません。お助けすると決めてしまったのですから」

ふっと姿を消し、すぐに食べ物を携えて戻ってくる。

「こんな御馳走。何日ぶりでしょうか」

男は目を輝かし、無我夢中で食べる。

「では、始めましょう」

女は昨夜のように詩の題を出す。男は考えるが、久しぶりにおながが一杯になったものだから、こっくりこっくり居眠りを始める。

「そんなことでは、来年も落第ですよ」

女は男を叱責する。

そのようなことが十日ほども続くと、男は女に慣れ、女が詩の添削をしている隙を狙って、袂の口から腕を差し入れる。柔らかな肌に指が届いたと感じた瞬間に、男の腕は振じ上げられ、頭を寝台に押しさえつけられて息もできない。

「こんな戯れをしていたのでは、貢奉はあきらめるのですね」

女の厳しい声に、男は床に這って謝る。

女は嘆息し、

「仕方ありません。お助けすると決めてしまったのですから」

女は許してくれ、また勉強を続ける。

しかし、女は美しく、その眼差しが、昼の間にも男の前のちらつき、また十日ばかり経つと、どうにでもなれと、男は女に抱きつく。腕の内におさめ得たと思った瞬間に、両腕とも捻り上げられる。女にこっぴどく叱られ、男は床に額を打ちつけて謝る。許されるとまた勉強をする。

同じことを三度も繰り返したら、今度こそは許してくれまいと、淫らな心は起こすまいと男は心に誓って勉強に励む。しかし、女の顔を見ると、もやもやとした気持ち湧いてくるのを抑えられない。だから、なるべく見ないようにして二十日ほどは頑張る。

女の美しい声はどうしたって耳に入るし、細い指の動きは目に入るし、これはいけないと思うとますます女に引き寄せられ、油汗を流してこらえにこらえて、もうどうにでもなれと、身をがばと起こすと、女は笑い、

「どうにもしようのないお方ですこと」

女は男の両手を握り、顔をすぐ近くにまで寄せ、

「よいこと、これからお話をすることをお聞きになって、それでも私を愛してくださいるお気持ちが変わらないのでしたら、あなたの望むままになさってくださいましな」

女の息が吹きかかり、男の魂はすでに遠く飛び去ってしまふ。

「あなたさまをお慕いするこの気持ち、胸を割ってお見せできないのが残念です。これは決して変わることはありません」

息せき切って言う。

女は男の手を自分の頬に押し当て、

「本当にそう思っているのですか」

女の美しい顔に触れ、男は天にも昇った気持ち。

「はい」

女はにっこりと笑い、

「では、お聞きください」

女は身の上を語る。ある官人の娘に生まれ、四歳上の兄がいた。女の母は娘を産むと間もなく死に、すでに身ごもっていた妾が後添いになった。後添いは、前妻が生きていたころから仲がひどく悪く、自分の娘である妹ばかりを可愛がり、姉を苛めた。姉は、兄が勉強するのを脇で聞くだけで、兄よりも先に覚えてしまうほどに頭が良かった。妹は鈍才で、器量も劣り、後添いはますます姉を憎んだ。兄は十九歳で貢奉を受けて落第。父は姉に、「お前が男だったなら何の心配もないのだが」と言い、姉も「次の試験は髯を書いて代わりに受けてさしあげましょうか」と冗談で兄に言うほどだった。後添いはそんな姉を見るだけで癩にさわるので、ある節度使の息子との縁談をさつさと決めてしまった。嫁入りの直前になって、その息子は女狂いで幾人もの妾がいて、少しでも気に入らないと殴る蹴るの乱暴を働き、殺された者さえいるとわかった。姉はそうと聞いて気を病み、後添いは「私に恥をかかせる気かい」と責め立てた。

姉はどうすることもできずに死んでしまった。冥界にいき、我が身の悲運

を役人に訴えると、役人は同情し、冥界の戸籍簿に登録するのをためらった。女の魂魄はいく場所が定まらずに漂揺し、折から出遊する九天玄女の一行の先触れに行き当たった。九天玄女は女の訴えを聞いて哀れみ、女に生き返る機会を与えた。一人の不遇な若者の命を救い、互いに深く愛し合い、若者を貢挙に合格させ、世の中に役に立つ仕事をさせることが条件とされた。

女がすでに死んでいると聞かされても、男は怖いとも思わず、九天玄女の条件を満たすようにすると誓う。一人は深い契りを結び、夜明けが近づくと、離れがたい男は女に抱きついたまま引きとめようとする。

「生きた肉体を完全に取り戻すまでは、日の光を浴びますと、何もかもなくなってしまうのです」

女は少し恐ろしげに言う。

男はやむなく女と別れ、昼間は夢うつつのうちに過ごし、夜になるのをひたすら待つ。

女がくると、男は昨夜の続きとばかりに抱きつく。女は厳しい声で、

「あなたが貢挙に受かってくださらなければ、私は冥界に戻らねばならなくなりませう」

男は勉強する。明け方前には、男の願いを入れて、淡い夢を結ぶのを女は許す。

そうこうするうちに、夏が過ぎ、秋も過ぎて、試験が近づいてくる。

女は熱心に教えるのだが、男は愛し合うことの方に熱心で、結局、次の貢挙も落第してしまふ。

「あなたと言うお方はいつまでもこうなのですか」

男は首をすくめ、

「私はこの程度の男だ。九天玄女さまの条件を満たすことのできる立派な若者を他に探してくれ」

女は怒り、

「私は嫁にいく前に死んだのです。あなたに初めて身を任せた私に、また別の男と通じるようにおっしゃるのですか」

男は懸命に謝り、次の貢奉には必ず合格してみせると誓う。女は仕方なく許す。

男は女の顔色を伺って、

「実は困ったことがあって、この部屋は合格したら家賃を倍にして払う約束で借りたのですが、今回も落ちたために、もう追い出されてしまうのです。にっちもさっちもいきません」

女は呆れ果て、

「一度見込んでしまったのですから、あなたさまに頑張っていたくしかないのです」

鏡を出し、市で売って金に換えるように言う。

鏡は揚州産の極上品、男は大喜びで、翌日、高級な道具を扱う店に持っていく。店の者が安く買い叩こうとするのと、男はここを先途と値を吊り上げる。次第に声を高くしてやり合っていると、

「あの男を捕まえて」

店の奥から女の叫び声。男はたちまち屈強な男たちに囲まれ、背中を手荒く押さえつけられる。

出てきたのは立派ななりの女。鏡を指差し、

「これは亡き姉の棺に納めた鏡。この男は墓盗人です」

罵声を浴びせる。その後ろから年輩の女が出てきて、

「世の中には似たような鏡もありましょう。粗忽なことをしてはなりません」

「いえ、お母さま、私がこの鏡を棺に入れたのです。見間違えることはありません。裏に私が記した文字があるはずですよ」

女はその文字を言い、店の者が見ると、確かにその通りである。

男は墓盗人と決め付けられ、仕方なく実状を話す。

妹は嘲笑する。

「言うにことかき、そんなありもしない幽霊話を出任せに言っつて、誰が信じましょうか」

店の主人はこの騒ぎに役人を呼ぶ。

墓から盗まれたものかどうか、墓を開けてみればわかると役人が言うので、一同揃って検分することになる。

寺に行き、まだ埋葬されずに床に置かれている甕を開き、棺を見ると、大釘が打ち付けられたままで、外から開けられたような形跡は全くない。

「ほら御覧なさい、私は暴いたりなどしていません」

男は棺をこのままにしておくよう訴える。

妹は、

「盗んでからそっくりまた元に戻したのです」

男は、日の光を浴びると元に戻れなくなると女が言ったことを話し、棺を開けぬようにと懇願する。

妹は笑い、

「よくまあ次々に勝手な言い訳を思いつくものですこと」

人々を促して大釘を抜かせる。

蓋板がはずされる。棺の内に、男は、毎夜見る女の姿を見る。顔は艶々と

美しく、しかし、胴より下はまだ肉体を得ていない。男は女の上に覆いかぶさり、日の光を遮ろうとする。

「私はこれで冥界にいかねばなりません。お別れでございます」

女は悲しげに呟き、美しい顔は消え、朽ちた骨となる。

林婆さんの話が終わる。

韋荘は一筋の涙を拭う。

綜は、

「男が情欲をいま少し抑えて勉強に身を入れておれば、事は成就していたのですかな。情欲がなければ女のためにと言う気持ちも湧かなかったでしょうから、難しいところですね。で、男はその後どうなったのかい」

「棺の中に娘がいたのは母も見ましたら、さすがに気味が悪くなって男を許し、話を聞いた父は娘を手厚く葬り、男には次の試験を受けるのに必要な銀子を与えたそうです。しかし、黄巢がきたために貢奉は中止となり、底意地の悪い妹は賊のために殺されたと聞きます」

「ああ、あのころの話だったのかい」

銀犁や春琴を思い出し、さらに悄然とする。

その様に綜は、

「その女は、父親が言っていたように男に生まれておれば、いくらでも違った生き方ができたでしょうにな。女ほど哀れなものはありません」

彩霞もそのように言っていた。

韋荘の心は昔へと立ち戻っていく。揚州の酒樓の窓辺の外に彩霞と春琴が立っていた。韋蘭と旅に出る朝に彩霞が馬の前へと走り出てきた。彩霞は、母とは違いますと言った。

独上小楼春欲暮　この春の終わり、ぼつんねんと楼閣に立ち

愁望玉関芳草路　玉門関に続く草原の道へと愁いが馳せる。

消息断　来るべき消息は断たれ

不逢人　会えるはずの人はいない。

却斂細眉帰繡戸　何も見せてくれなかった目を閉じ部屋に戻る。

彩霞の琴に合わせて詞を歌った。

そのときの震えの意味が突如として知れる。

彩霞はわかっていたのだ、父が何をすべきかを。それを教えにきてくれたのだ。己の体はそれで震えたのに、頭は了解しようとしなかった。

鏡は真実を映す。見れば自明と彩霞は残してくれたのだろう。それなのに今日までわからずにいた。

突然の気持ちの昂ぶりに、立ち上がり、

「私に似合う姿を言ってくれたが、あれは何かい、本気でそう思うのかい。それとも私を嘲笑するのかい」

思いがけず強い口調で綜に向かつて言う。

綜は静かに立ち上がり、伯父の腕を取って窓辺へと誘い、

欲填溝壑惟疎放　溝か谷に埋もれて死ぬべき私は世間離れがひどく

自笑狂夫老更狂　老いてますます脳天がおかしいのを笑うだけだ。

杜甫の詩を吟じる。

「伯父上の望まれる通りにここに草堂を作りました。僕の願いは、伯父上が狂夫になられることです。行いにおいて杜甫とは決して同じにはなりませんでしょう。しかし、真のお気持ちのままに同じ狂夫になられるはずで。成都にくる前に、伯父上は、不幸な女たちを救いたいとおっしゃいました。男であれば貢挙に合格できる才があっても、それを使って一晩の媚を男に売らねばならない女たちがいます。その悲しみを掬い取れるのは伯父上の他にはいませんでしょう」

「私にできると思うかい」

林婆さんに顔を向ける。

「きつと、女たちは喜びましょう」

彩霞もそう思っていたのだろう。

心の昂ぶりはたちまちおさまり、体の力が抜ける。綜の手を借りて腰を下ろす。

目の前の林婆さんや綜の姿がぼんやりと薄れ出していく。韋莊一人は追憶

への世界へと入ってく。

ここは揚州は嫋嫋の部屋か、あるいは平康坊は銀犁の部屋か。詞を歌っている己がここにある。蜀の宰相である苦しみなどは一切存在しない。

「**近頃**、宰相の詞とか言われるものが流行っているらしいですな」

綜がくくつと笑う。

小さな祠の前の日溜りに腰を下ろし、韋荘は上り下りする舟を眺めている。何も返事をしないので、綜は歩み寄り、

「ここらあたりまでは噂が聞こえてきていませんか。成都では随分と評判のようですよ」

身を屈めて韋荘の耳元で言う。

ぼんやりとした表情を向け、

「そうなのかい」

「御存知ではなかったですか」

首をかしげ、

「林婆さんなら知っていようかな。あれに聞いてみてはどうかい」

綜は上からじっと覗き込み、

「本当に御存知ないのですか」

「近頃は成都にいくのも珍しくなったからな」

綜の鋭い視線にとまどいを覚える。

「そうですか」

綜は伯父の前を離れ、辺りを数歩行き来し、戻ってきて、

「宰相の詞と言われているのは、例えばこのようなものです。お聞きください」

何処遊女

どこからきた遊女なのか

蜀国多雲雨

「蜀の国は雲と雨ばかり」と言う。

雲解有情花解語

でも、雲は心を解かってくれ、花は言葉を解かって

くれ

窠地繡羅金縷

綾や金の糸のように地を払うのです。

綜は歌うのが得意ではない。

「それは何かい、もしかして『清平楽』のつもりかい」

「そうです。『清平楽』です」

「ちよつと音律が違いはしないかい」

「よろしかったら、伯父上、正していただけませんか。そして、願わくば、詞に後半も添えていただけると嬉しいのですが」

「いまのは、他国から成都に流れてきた遊女の心を歌ったものなのかい」

「そうだと思います」

「かつて聞いたような気もする」

「それは伯父上が」

と、綜は言いかけ、

「いえ、伯父上ならば、みごとな後半を添えて完成されると思います」

「それはどうか。昔ならいざ知らず、近頃は詞など作ったことがない。何しろ、今朝あったこともすぐに忘れて、林婆さんに叱られる始末でな」

「伯父上のこと、詞の一つや二つ、たやすいでしょう」

「そうもいくまい」

少しく考え、

「いまのを最初からもう一回歌ってくれないかい」

綜が歌い出すと、韋荘は杖に頼って立つ。

綜に合わせてもごもご口を動かし、前半が終わるころには、韋荘の腰が真直ぐに伸びている。大きく歌い出す。

粧成不整金鈿　化粧はできましたけど髪飾りが整いませぬ

含羞待月鞦韆　恥じらいつつ鞦韆を揺らして月を待ちます。

住在緑槐陰裏　緑の槐の蔭です

門臨春水橋辺　春の水が流れる橋に向かって門の開くところです。

しわがれた声ではあるが、音律は確かである。

「おみごとです」

「そうかい」

はにかんだように笑う。ほっと息を吐くと、腰が元通りに折れ曲がる。

「宰相の詞の噂、まことにお聞きになつていないのでしょうか」

「もしかしたら聞いたのかも知れぬ。とにかく何でもすぐ忘れてしまうのでな。何しろ、今朝あつたこともすぐに忘れて、林婆さんに叱られる始末でな」

同じことを言つて苦笑いする。

「そうですか」

「どのような噂なのだ」

韋荘はよろよろと川べりの道を歩み出そうとする。綜は祠に軽く一礼し、伯父に寄り添つて進む。

祠には楠の霊が祀られている。樹齡二百年の楠の大木がここにあつた。その堂々とした姿を朝夕に眺めようと、杜甫は草堂を建てる場所を定めた。あの年の大風に楠は根ごと倒され、老樹の寿命が尽きたのを悲しむ詩を杜甫は

作った。後にどこかの風流人が祠を建てた。

「今年の春のことです。立派な身なりの老人が成都の色里に時々現れるようになったそうです。一人の供を従えてどこからともなくふらりとやってくる、ふと目についた妓楼に登り、店中の女を呼び集めて酒食を振る舞い、かつて唐の都で流行った曲を所望し、興に乗ると自分でも歌い、女たちの望む題に応じて即興で詞を作るとか。そんな話です」

「そうかい。どこかで聞いたような気もする」

「そうですね」

「いまの『清平楽』がそれなのかい」

「気に入りましたか」

「まあまあのお出来だな。他にも知っているかい」

『謁金門』という曲もありましたか」

「どのような曲だったろうか」

「色里には伯父上のお供で参っただけですので、僕はうまくはありませんが、

ちよつと歌ってみましようか」

「そなたを連れていったことなどあったかい。いつのことだい。趙十五娘さんによく叱られなかったものだ」

「勿論あれには内緒です」

「そなたも釣りだけでなくて、たまには違う遊びも良いだろう」

「聞くところでは、『謁金簡』は、懐旧の情に責められて眠れずにいる貴公子との題で、女たちがせがんだとのことです」

「ありそうなものだ。それならたやすく作れるだろう」
綜は立ち止まって歌う。

春漏促

春の時は過ぎゆき

金燼暗挑残燭

金の燭台の灯が消えかかる。

一夜簾前風撼竹

簾の外の竹が夜もすがら風に揺れ

夢魂相断続

夢は途切れがちである。

韋荘は真白な髯を揉み、

「平凡だが、悪くはないな。後半を付けてみようかい」

「そうしてください」

有箇嬌嬌如玉

かの美しき玉のごとき女性は

夜夜繡屏孤宿

夜ごと、一人、屏風のうちにある。

閑抱琵琶尋旧曲

琵琶を抱き、そぞろに昔の曲を奏く

遠山眉黛緑

遠い山の緑のようなその眉。

「どうだい。その老人の詞に見劣りするかい」

「いまの伯父上の詞の方が優れていますよ」

「で、その老人とやらはどこの人なのかい」

綜は困ったような顔になり、

「何しろ、女たちにたくさんの祝儀を与えると、ふっと帰ってしまうので、

どこの誰だかずっとわからずにいたそうです。ある晩のこと、その色里に禅

月大師さまがお見えになり、ちよつとした騒ぎになりました」

「貫休どのかい」

韋荘は顔を少し歪める。

「禅月大師さまは、詞を歌う老人を探しているとおっしゃいまして、ちょうどその日もきていましたので、登った妓楼へと、人々がわいわい言いながら案内していきました。禅月大師さまはずかずかと入っていき、老人の前に立つなり、大声で一喝されたそうです」

韋荘は杖で地面を突く。

「何を言われのだ」

「他の者には厳しくお叱りになった様子しかわからなかったようです」

「で、老人はどうしたのかい」

「『河伝』の曲を歌われたそうです」

「何かい、『河伝』とはこのような曲かい」

川面に向かって歌う。

春晩

遅き春

風暖

風は暖かく

錦城花満

錦城に満ちる花。

狂殺遊人

旅人は心を痛ませる。

玉鞭金勒

玉の鞭に金の勒

尋勝馳驟輕塵

塵を揚げて旧跡を訪ね巡り

惜良辰

この良きときを惜しむ。

「その通りです」

「で、その老人のそのときの詞はどのようなものだったのかい」

「伯父上が歌われたのに似て、後半はこのようでした」

翠娥争勸臨邛酒

女たちが臨邛の銘酒を争って勧める

織織手

そのほっそりとした手。

抃面垂糸柳

柳の糸が顔を抃う。

帰時煙裏

帰るときは靄に包まれ

鐘鼓正是黄昏

時を告げる鐘鼓はまさに黄昏

暗銷魂

魂は消されてしまう。

韋莊はうなずき、

「そうあるべきだろう」

「その晩を境に老人は色里に現れなくなりました。禅月大師さまがわざわざ色里にこられたのですから、老人は高貴な方に違いないと、以来、老人の歌った詞は『宰相の詞』と呼ばれるようになったのだそうです」

「成ほど、そういう話か」

ふっと息を漏らして、腰の折れた老人に戻る。

「お疲れでしょうか」

「そのようだな」

「草堂に帰りましょうか」

「それがよいだろう」

体がぶるつと震え、得体の知れない不安に襲われる。この頃は何かよくわからぬことが多くある。

二人は向きを変え、もときた道に戻る。真向かいから注ぐ午後の日、川

が輝く。

漁人網集澄潭下

漁人の網は百花潭のもとに集まり

估客船随返照来

商人の船は夕日の照り返しの中をやってくる。

口ずさむと、少し心が軽くなる。

「杜甫の詩にこのような句がなかったかい」

「伯父上は良く覚えていらっしやいますな」

「そなたの父のようにはいかぬが、昔覚えたことは忘れないようだ。この麗らかな陽光は、杜甫のこの詩がぴったりではないかい」

続けて杜甫の別の詩を吟じる。

坦腹江亭暖

川べりの暖かな草堂に腹ばいになり

長吟野望時

野辺を眺めつつ長吟する。

水流心不競

水は流れ、心はそれと競うことがなく

雲在意俱遲

雲は在って、思いはそれとともにゆったりとしている。

寂寂春将晚

静かに静かに春はまさに暮れようとし

欣欣物自私

樂しげに樂しげに万物は己の生を遂げている。

故林歸未得

故郷の林にはまだ歸れぬ

排悶強裁詩

悶えを押しつけるために無理にこの詩を作る。

「この詩は、いまのこの春にぴったりではないかい」

綜は足を止める。

「どうかしたかい」

「いま春とおっしゃられましたか」

「おや、違ったのかい」

周りを見回す。再び良くはわからぬ不安が戻ってくる。

綜はやや重々しげに、

「いまは武成二（九〇八）年の秋の終わりです」

「そうそう、秋に違いない。あまり陽気が良いので勘違いをしたようだ。秋

だ、秋だ。あそこにあった楠が風で倒されたのも秋であった」

額の汗を拭い、

幹排雷雨猶力争　　幹は力の限り雷雨と争ったのだが

根断泉源豈天意　　根が地下の泉と断ち切られたのは天意であろうか。

楠を悼む杜甫の詩の一部を唱える。

「二百年の楠でさえ倒れるときがくるのだ。ましてこの私などは」

韋荘のつぶやきに、

「今日は外にお誘いしたために、お疲れになった御様子です。大丈夫でしょうか」

「久し振りに良く歩いた。まあ、ぼちぼちと帰るとするかい」

綜に支えられて草堂の柴門に至る。

「僕はここで帰ります。林婆さんと顔を合わせると、飯を食っていけだの、泊まっていけだのうるさくて適いませんから」

「あれも齢なのだ。くどくどと同じことを言う。いつものことだ」

韋荘は笑う。

「この戸を叩けば、林婆さんがすぐに出てきますから。では、ここで」

綜は門から出ていき、その姿が消えてからもしばらくぼんやり佇んでいると、後ろで戸が開き、

「おやまあ、やはりお帰りでしたか。何か心配がすると思いました。お一人ですか。若旦那さまは」

あたりを見て、

「綜かい。あれはどうしたかな」

「お帰りになってしまったのですか」

「そのようだな」

「そうでしたか。ちょうどお父さまがいらしてまして、若旦那さまともお会いできましようと話していましたのに」

草堂の内に入ると、藁が迎える。いつも変わらぬ弟の顔だ。

「どうしたんだい、急にやってきて、今日は何かあったのかい」

藁は少しばかり驚いたような目で兄を見る。

「今日がお約束の日ですから」

韋莊はまた不安を覚える。

部屋の内を見回し、いつもの椅子に座る。弟と何か約束をしたのか。

「何かい、あれは今日だったのかい」

天井の方を見ながら言う。

「そうです。五日後と言うことでしたから、やって参りました」

「ああ、そうだったな」

もう一度部屋の内を見回す。

藹は兄の視線の先を追いながら、

「それです」

「ああ、あれか」

机の上をじっと見る。

弟は立ち、机の上に積み重ねられている数巻の書を、兄の目の前へと置き直す。

「これです」

「このことかい」

ゆつくりと書物に手を伸ばす。

「今日までに見てくださると、兄上はおっしゃっていました」

「ああ、そうだったな。そうか、あれは今日だったのか」

笑いながら書物を手に取る。表紙に題がない。開くと、冒頭に「章台夜思」

と記されている。弟の筆だ。

清瑟怨遥夜 清らかな瑟の音は長い夜を怨むよう

遶弦風雨哀 まとわりつく弦の響きは風雨のような哀しさ。

孤燈聞楚角 ただ一つの灯のもと、楚の国の角笛を聞くうちに

残月下章台 章華台へと月が傾く。

芳草已云暮 芳しき草はすでに枯れたのに

故人殊未来 かの人たちはいつまでもこようとしない。

郷書不可寄 わが故郷へと手紙を送れずにいる

秋雁又南回 雁が南に帰るこの秋に。

つぶやくように読む。

古い記憶が甦ってくる。昔のことは忘れていない。

「昔々の詩だ。これは章華台で詠んだものだった」

「そうです」

「あれは蘭くんとの旅だった」

「そうです」

弟の返事に安心する。

紙を繰っていくと、これは己の詩を弟が記してくれたものだとわかる。

「これを見て、それで、どうすればよかったのかい」

小さく呟くのを、弟は聞こえなかったのか、黙って兄の様子を見続ける。

一卷をひと通り見て、別の一卷を手にする。同じように詩が並んでいる。

林婆さんが入ってきて、茶を置きながら藹の耳に、

「旦那さまは、大切なことでもお忘れになることがあります。その内に、この婆の顔もお忘れになってしまうのではないかと心配しておるのです」

韋荘は書物から顔を上げ、

「これは全てそなたが覚えていてくれたのかい」

「その通りです」

「そうかい。嬉しいことだ」

弟が微笑むのを見て、韋荘も微笑む。

藹は茶を一口啜り、姿勢を改めて前に身をせり出し、

「この前参りました際に申し上げましたように、兄上の詩を全て記して差し出すようにとのお上のお申しつけで、ようよう思い出せた千首ばかりをこのように記しました。お上に御覧いただきますものにいささかの疎漏があつては悪かろうと、兄上に御覧いただくためにお届けしました。今日までにとおつしやいましたので、こうして参上した次第です」

「そうそう、そうであつたな。それならば勿論見ておいた」

そう答えてからさらにもう一卷を手にし、目を通したものか思い出そうとする。

「拙い詩ばかりが並んでいる。お上に御覧いただくようなものではない。先

祖の名を汚すようなものだ」

「宰相になられた兄上の詩を国の書庫におさめ、後の世に伝えようとお上の有難い思し召しにございます」

「宰相は七世の祖だ。私は進士になったばかり。これらは蘭くんが言っていた通り、どれも寢床で書けるような詩だ。お上に御覧いただくようなものではないだろう」

藹は当惑顔で、

「兄上が一生を費やして書いてこられた詩ではありませんか」

韋荘は急に不快な気持ちになり、

「どれも無用なものだ」

手にしていた一巻をいささか乱暴に置き、他の巻とともに弟の方へと押しやる。

兄の仕草に弟は林婆さんの方を見る。林婆さんは首を振り、「旦那さまは、このごろ急にお怒りになることがあるのです」

小声で言うのが韋莊の耳に入る。

「怒ってなどいない」

弟を驚かせたことに当惑し、

「そなたがこれをこうして書いてくれたことに大いに感謝している」

弟は笑みを作り、書物を引き寄せ、

「もしすでに御覧いただけましたのでしたら、後はお任せくださいませでしょうか」

「ああ、そうしてくれてよい」

とにかく弟を安心させようとする。

「念のため、兄上がどこを直されたのか見させていただきます」

「そなたがしてくれたこと、何の間違いもない」

弟の様子を見つつ、韋莊は茶をすすする。

三巻目の中ほどに至って弟の手が止まる。

「兄上、これはいかなることでしょうか」

「どうかしたかい」

「ここはどくなさったのでしよう」

弟は書を開けたまま兄に示す。数葉にわたって引きちぎられている。

「ああ、それか。それはだな、破ったのだな」

己がそうしたのか思い出そうとする。

「どうしてここを」

「それは、何しろ、そこだからだろうな」

曖昧に答える。

「こここそが最も大切なところではありませんか。特に心を込めて書きました。どうしてここを」

藹にしては珍しく感情を昂ぶらせる。

「そうかい。それは悪いことをした」

弟は悲しげに嘆息し、

「洛陽に入る前の晩でした。必ず覚えて、いつでも吟じられるようにしなさい」

いと、兄上がおっしゃったではありませんか。ですから、そのときから一字だつて忘れることがないようにと今日まで繰り返して思ひ出してきました。それをどうしてこのようにされたのですか」

弟の勢いに額に手を当て、

「洛陽に入る前の晩か」

「そうです、雨に打たれつつ車を押し、ようやく着いた荒れ果てた寺で、蘭にいさんがお粥を煮てくださいましたではありませんか」

「蘭くんの粥か」

そのときの匂いが鼻に戻ってくる。

中和癸卯春三月 中和三年の春三月

洛陽城外花如雪 雪のような花に包まれる洛陽城。

東西南北路人絶 東西南北の大路は静まり返り

緑楊悄悄香塵滅 緑の柳の葉がしつとりと垂れる。

路旁忽見如花人 ふっと現われる一片の花びらのような人影

独向緑楊陰下歇　柳の根元にぼつねんと息をつく。

藹は低く誦じ、

「兄上がこのように詩を聞かせてくださったではありませんか。お上もことの他この『秦婦吟』を大切に思し召しです。どうしてそれをこのようにされたのですか」

「それか」

そう呟く韋荘の脳裏に、鎖された仙酔樓の扉が浮かんできている。

「破られたのはどうされたのでしょうか」

藹の言葉は耳に入らない。

林婆さんは、

「それでしたら、旦那さまが燃やすにようおっしゃいまして。そうしてよいものか、迷って、まだ残してあります」

部屋から出て、丸められた紙を手に戻ってくる。

藹は、

「これは兄上の最も大切な詩ではありませんか」

破られた紙を一枚ずつ展ばしていく。

韋荘はそこに『秦婦吟』の文字の並びを認め、

「それは銀犁の詩だ」

低く言う。

「兄上は幾度かそのようにおっしゃっていました。そのお気持ちもわからなくはありません。しかし、『秦婦吟』は紛れもなく兄上の詩です。あの晩にお聞かせいただいた私たちがいます。お上に差し出す詩集に『秦婦吟』がなくっては適いません。後世に残される詩集に『秦婦吟』が入っていないくてよいはずがありません」

「忘れろ」

呻くように言う。

「何をですか」

韋荘は立ち、弟に背を向け、

『秦婦吟』は決して思い出してはならない」

「おっしゃることがわかりません」

「わかつてはもらえないのかい」

韋荘の唇が震える。

弟に説明しなければならぬ。しかし、何をどう言ったらよいのかわかっていない。

窓より木立に向こうを流れる浣花溪を眺める。

幹排雷雨猶力争　幹は力の限り雷雨を争ったのだが

根断泉源岂天意　根が地下の泉と断ち切られたのは天意であろうか。

二百年の楠にも倒れるときがくる。

一つの言葉を思い起こす。

「老耄。私は老耄なのだよ」

韋荘は振り返る。弟の驚いた顔がある。

「何をおっしゃいます。兄上は老耄などではありません。このようにはつき

りとお話しされているではありませんか」

「わからないことを口にし、わからないことをしているだけだ」

韋荘は笑う。しかし、強い不安がある。

「そのようなことはありません。そうだろう」

藹は林婆さんに問いかける。

「ええ、ええ、そうですとも。旦那さまは前と少しも変わっておりません。

お若いころと同じです。いまからでも成都の色街にいつて御覧なさいました、たくさんの若い女が大喜びしましょう」

林婆さんがしどろもどろになって言うのを見て、韋荘は俄に頭の内が澄んでくるのを感じる。

「近頃、宰相の詞とか言うのが流行っているそうではないかい」

弟と林婆さんは顔を見合わせる。

「そのような噂を聞いております」

「どのような詞なのか、知っているかい」

「一つか二つは聞きましたか」

「覚えていたら聞かせてくれないかい」

「私は歌うのが不得手で」

「歌わなくても、普通に唱えてくれないかい」

弟はためらいがちに口にする。

昨夜夜半

昨日の夜半

枕上分明夢見

枕辺にはつきりと見えて

語多時

たくさんを語ったそのとき。

依旧桃花面

桃の花のような顔は昔のままだったのに

頻低柳葉眉

柳の葉のような眉をしきりに曇らせた。

「それは『女冠子』の曲ではないかい」

「そうかも知れません」

「ならばこう歌うのだ」

韋荘は弟が唱えた部分から歌い、後半を繋げる。

半羞還半喜

恥じらいを含み、また喜びをみせ

欲去又依依

出て行くこととして、またためらう。

覺来知是夢

覚めればやはり夢

不勝悲

悲しさだけが残る。

「巷間に伝えられる『宰相の詞』とはこのようなものかい」

「そのようです」

「宰相の位にあるのはいま誰なのかい」

「それは」

弟は躊躇しつつ言う。

「兄上です」

「私なのかい。そうなのかい。だったら、『宰相の詞』とは私の詞なのかい」

藹は顔を赤く染める。

「私にはわかりません」

韋荘は座り、机の上の詩集を指先で叩き、

「ここには『宰相の詞』は入っていないのかい」

「これは詩を集めましたものです。詞はお上の御所望ではありませんでした」

「そうだろう。浮華の詞など宰相にふさわしくない」

「禅月大師さまも色里にお入りになるのをお止めになったと伺っております」

韋荘は詩集を突き除け、

「ここに琴があつたかい」

「春琴さまのお琴があります」

「持ってきてくれないかい」

林婆さんが琴を据える。

韋荘は絃を調整し、

「大切なのは『宰相の詞』だけだ」

韋荘は琴を奏きつつ歌う。

夜夜相思更漏残

夜のたびに何時までも君を思い

傷心名月憑欄干

心は無残に破れ、欄干より月を見る。

想君思我錦衾寒

君は冷たい蒲団で僕を思ってくれているだろうか。

手を止め、

「これは『浣溪沙』だ。女たちの間で歌い継がれていくのなら、『宰相の詞』であることなど忘れられて良い」

咫尺画堂深似海

この部屋は深い深い海のように

憶来唯把旧书看

その底で僕は君の昔の手紙を見る。

幾时携手入长安

もうないのか、君と手を携えて長安に行くことは。

「歌う女が十人いれば十人それぞれに思いがあるう。ある女は長安を想い、ある女は揚州を想い、ある女は別の故郷を想う。それぞれの想いを託して歌ってくれたらよい」

韋莊は弟に、

「老耄だ」

藹はまじまじと兄の顔を見て、

「兄上のおっしゃる通りです。兄上はこれまでいつも正しいことをなさって

きました。いまも必ずそうです」

「そう思ってくれるかい」

弟は昔と変らぬ顔でうなずく。

それを見て、心の底の不安は消え、胸の内で昂ぶっていたものも急に凋む。

いま弟に話したことも薄れ、穏やかではあるが朦朧とした心持ちへと帰っていく。

武成三(九二〇)年七月。

目覚めると、重くのしかかっていたものがぼろりと落ちたように軽い。体も心も爽やかである。

上体を起して周囲を見る。暗い。

ここはどこなのか。細い一条の明かりが射し込んできている。それに誘われ榻から下る。

手足が自由に動く。我が身を確かめ、これまで己は何をしていたのかと思う。長くこの榻に臥せっていたようだ。

明かりの漏れくる窓辺に倚る。覆いに手を掛け、少し上げる。青白い地面が見えてくる。腕に力を込め、開け放つ。

煌々と照り輝く満月。その光を浴びる。いよいよ清々しい気分になる。そうか、この月光が闇の中から救い出してくれたのか。

中天にかかる白い月は鏡のようだ。

芳草叢生結縷 芳しい草がもつれ合うように茂り

花艶艶 艶やかな花に

雨濛濛 雨が濛濛と注ぐ

暁庭中 この暁の庭

塞遠久無音問 遠く辺境の塞からは音沙汰なく

愁銷鏡裏紅 鏡の中にあつた紅の顔は愁いのために消えた。

紫燕黃鸝猶在恨何窮 燕も鶯も鳴いてくれるが、恨みは窮まらない。

静かに詞を歌う。

遠く去った人を想って愁いに沈む己の顔を、鏡中に見るのはもう止めよう。それにいまは雨が降る暁ではない。花が艶やかに咲く春でもない。

窓より身を乗り出す。一本一本の草の茎、一枚一枚の枝の葉まで、くつきりと見てとれる。その向こうに、銀色にちらちらと揺れるのは川の流れた。静かなせせらぎが耳に入ってくる。

そうか、月のこの夜、己はまだ生きているのだ。遠く忘れていた感覚が甦ってくる。

烟簾寒水月簾沙

寒々とした水を靄が覆い、月の光が砂を包むこの夜、

夜泊秦淮近酒家

秦淮河のほとりの酒家の前に舟を泊める。

商女不知亡国恨

金陵の妓女は亡国の恨みを知らないのか

隔江猶唱後庭花

川向こうで『後庭花』が唄われる。

このような詩があった。金陵の秦淮河のほとりで杜牧のこの詩を唱えた。杜牧は、滅び去った南朝を唐の盛時において偲んだ。『後庭花』は南朝の最

後の皇帝が作ったものだ。唐が滅んだ後に、『後庭花』に代わる曲を誰か歌うのだろうか、己は想像した。

あれから唐はどうなったのか。滅んだのか。唐が残した『後庭花』とは何であろうか。妓女が歌うのが聞こえてきはしないか。

はらりと葉が落ちる。咽ぶような川の流れ。梟の声が響く。

「相思、相思」

誰を呼ぶのか。

そうだ、杜牧のこの詩を口にしたとき、笛の音が聞こえてきた。その笛をまた聞きたいと幾度となく待った。

「相思、相思」

梟がまた鳴き、月明かりに人影がある。

頭巾を載せ、川の方に向いて立つ影の形に見覚えがある。

白沙翠竹江村暮

白い砂と緑の竹、川べりの村は暮れた

相送柴門月色新

柴門から送っていくと、月がちやうど昇ってくる。

人は静かに吟じる。この声だ。

ゆつくりとその人は振り向き、袖を振る。

韋荘は窓の下に立つ。

「いつ帰ってきたのかい」

韋荘の問には答えず、

「さあ、いきませんか」

蘭は言う。

「どこへかい」

「この美しい月夜です。佳きところはどこにでもありましょう」

蘭に手を取られて柴の戸を出る。

川に小舟がある。

「乗っていただけますかな」

秦淮河でもこのようにして舟に乗った。

蘭は纜を解く。

「で、どこにいくのかい」

「兄貴の望みに任せて、どこへなりとも参りましょう」

「どこがよかろうか」

舟は川の中央へと出ていく。

婺州から旅立とうしたときに、もしもこのようにして蘭が現れていたならば己の人生は全く違っていた。

「蓬莱島の東まで水は一つに繋がっています。御所望次第ですな」

「己が望んでいると思ったのは、まことに望むことと必ず違っていた」

「それは面倒な話ですな」

蘭は笑う。

「だから、そなたに任せる。初めからそうしていればよかったのだ」

「人任せですか。それもよろしいでしょう。俺は風任せ。今夜は月の光に任せますかな」

舟は水の上を滑る。

蘭は歌い出す。

人尽説江南好

人は江南のすばらしさをたたえる

遊人只合江南老

漂泊の人は江南に老いるのが良い。

春水碧於天

春の川は空よりも青く

画船聽雨眠

船は水声の中に眠る。

「江南へと下る気かい」

「それもよいでしょうな」

「いまのは『菩薩蛮』かい。どこかで聞いた気がする」

蘭は後半を歌う。

炉辺人似月

炉辺にほのかに照らされる人は月に似て

皓腕凝双雪

雪のような白い腕。

未老莫還鄉

若いうちは故郷に帰らなくてよい

還鄉須斷腸

帰れば悲しみだけがあるのだから。

「お互いに若いうちはとうに過ぎ去りましたな。とすれば、ここらで故郷に

帰ってみるのも悪くないのではありませんかな」

「故郷とはどこかい」

「どこですか。たった一つの玄微でしようかな」

「ここのところ世の中は何だかすっきり変わってしまったようだから、故郷に帰ろうとしても、道が絶たれてしまっているのではないかい」

「隻念くんのあの画が良い道案内となりましょう」

「地獄図を見たいのかい」

「早く地獄に帰りたくまりましたな」

「そうかい」

「迷っても伍七が教えてくれましょう」

「伍七がいるのかい」

「棗の菓子を届けに藹くんのところにきているではありませんか」

「棗の菓子か。久しく食べていない」

「ちようど狐さまのお祭です」

「そうか、ならばそこに輝くのは秋の月なのかい」

「季節も忘れていたのですかな」

蘭は笑う。

「老耄だ。我が身のこともわからない」

「それは困りましたな。この詞はどうですか、覚えておられましようかな」
蘭は再び歌う。

独上小楼春欲暮　この春の終わり、ぽつんねんと楼閣に立ち

愁望玉関芳草路　玉関に続く草原の道へと愁いが馳せる。

消息断　来るべき消息は断たれ

不逢人　会えるはずの人はいない。

却斂細眉帰繡戸　何も見せてくれなかった目を閉じ部屋に戻る。

「今度は別離の詞かい」

「玉門関の西へと去った者もいれば、東の海へと去った者もいましたな。俺の親父どのも、兄貴も、帰らぬ恋人を待つような心で、唐の時代をなお生き

「続けようとしたのですな」

「虚しいことだった」

「唐の世の『後庭花』を残せたではありませんかな」

「もしかして『秦婦吟』のことを言っているのかい」

「あれは銀ちゃんの詩ですな」

「そうだ、銀犁の代わりに歌っただけのものだ」

「秦婦吟の秀才の名を恥じ、葬り去ろうとしたところで、『秦婦吟』は滅びませんでしょうな。玉関芳草の路に残り、秦婦の嘆きを万世に伝えていきましよう。銀ちゃんならすっかりやってくれましよう」

「そのように思いたい。それで、『後庭花』は何なのかい」

蘭は先ほどの詞の続きを歌う。

坐看落花空嘆息　空しく溜め息が出るのは花の落ちたためか

羅袂湿斑紅淚滴　襟が濡れているのは涙が落ちたからか。

千山万水不曾行　千の山、万の川を越えては行けぬ私

魂夢欲教何所覓

夢をさまよう魂に、何をどこで求めさせたら良いのか。

成都で一度だけ彩霞と会ったときの詞と、韋荘は思い出す。

「どうしてこの詞を知っているのかい」

「彩霞ちゃんが教えてくれました」

「何かい、彩霞に会ったのかい。天竺にいったのではないのかい」

「虢州で、兄貴の帰りを今か今かと待っておりますな」

「本当かい」

韋荘は思わず立ち上がろうとする。

「危ない、危ない。舟がひっくり返ります。せつかく兄貴を連れていこうと思っても、ここで水に落ちてお陀仏ではどうにもなりません」

蘭は韋荘を座らせる。

韋荘は月を見上げ、鴛鴦の鏡を想う。真実がそこに映るのか。あるいは、昔の光に照らされ、昔の影が映るのか。

そうだ、帰路を絶つてはいけなかつたのだ。

「いまの詞がもしかして『後庭花』なのかい」

「これに限らず、『宰相の詞』とか言われているものどれかでしょうかな」

「取るに足りぬこのような詞がかい」

「取るに足りないからこそ良いのでしょうか。これほど取るに足りない情趣を歌った人が兄貴の他にいましたかな」

「立派な行為とは言えまい」

「抱柱の信ですな」

「抱柱の信も、愛されることを求めている間はまやかしかつた」

「老いてようやく抱柱の信を窮められたようですな」

「老耄だ」

「老耄に在りては欲慮柔らぎ、嬰孩の全きに及ばずといえども、少壮に比べ
ては間ありと、列子だったかが言っておりますな。生まれたての子には完
全な徳が備わっているのに、若いころは欲が盛んであるためにそれが衰えて

しまう。老いると欲が静まり生まれたての子に近づく。兄貴もそこに至ったのでしょな

「これでよかったのかい」

「楊爺の願いも叶ったようすな」

「そうかい」

「己に恥じぬ生き方が最後にはできましたかな」

「抱柱の信かい」

「天与の才を活かせましたかな」

「そう思ってくれるかい」

「狐潭の祭にいけば何もかもわかりましょう」

「初めからわかっていてよいはずだった」

「祭は明日ですな」

「何かい、明日までにこれで狐潭に着くのかい」

「これまでに俺がしくじったことがありますかな」

「そなたに全て任せておけばよかったのだ」

韋蘭は竿を置き、

「月の光が運んでくれましょう」

蘭の笛の音とともに舟は狐潭の水へと滑り込んでいく。

浣花溪の草堂の窓辺にもたれて韋莊は死んでいた。日頃吟諷することの多かった杜甫の詩「白沙翠竹江村暮」にちなみ、白沙の南の地が墓所とされた。

唐朝滅亡の際に生まれ合わせていなければ、貢挙に落ちる悲哀を味わいこそすれ、小さな莊園の主として可もなく不可もない一生をそつなく終えられたであろう。唐の盛時の内に完結すべきだったそのような己の生涯を夢見て、韋莊は『秦婦吟』を葬ろうとしたのだろうか。そうであったならば、生来の多情は凡庸な詩に閉じ込められたまま詞を歌い上げるには至らなかつたのだらう。